
世界に革新を齎すモノノスピノフ ～四年前の悪夢～

千葉 久々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界に革新を齎すモノノスピノフ ～四年前の悪夢～

【Nコード】

N2256P

【作者名】

千葉 久々

【あらすじ】

この物語は、『世界に革新を齎すモノ』の四年前に起きた、「CB」と時空管理局、そして世界清浄の、知られざる戦争を描くものである。

00・彼の者はその日、『神』を見た（前書き）

『世界に革新を齎すモノ』のスピノフ作品です。なので、流血・人死・重いかダーク（？）が苦手な人は、リターンを推奨します。あと、これもオーバーS ガンダムなので、「ガンダム無双」ではないことを、事前に伝えておきます。……あとで「ガンダム弱過ぎんぞ」でああ！？」と言うのは無しでお願いします！

それでは……開演です。

【この世界に、神はいない】

——『機動戦士ガンダム00』の刹那・F・セイエイより

00・彼の者はその日、『神』を見た

——新暦67年——

血の様に濃い真紅の夕日が、その輝きを空から地へと落とし、世界を赤橙色に上塗りする。その赤橙色に輝く砂と土と石しかなかった世界で、全身をボロボロの布で覆った一人の少年が、使い古された一丁の銃と共に、「戦場」と呼ばれる場所を必死になって走っていた。

「ハアツハアツハアツハアツ……！」

その八歳ほどの、方々に跳ねている黒髪を持つ褐色の少年は、自分の頭のすぐ上を銃弾が掠めていくのを薄茶色の大きな瞳で捉えながら、遮蔽物に成りそうな瓦礫の山へと、その小さな身を転がりこませた。それで体中がまた傷と砂だらけとなるが、少年はそれを気にせずに、両手で抱えるように持っていた長い銃身の長銃を、目の前の魔導師——青と銀で構成されたB・Jを纏うDランク魔導師——に向け、何の躊躇いもなくその引き金を引いた。

ガガガガガガガッ！

少年が持っていた長銃から、質量兵器である銃弾が、大量に発射された。それは人を殺すには十分過ぎるほどの威力でもって、B・Jを纏う魔導師へと砂煙を上げながら全弾、着弾する。

「……チィッ！」

だが、その成果を見た少年は、舌打ちをしつつ体を中腰にし、す

ぐさまその場から退避した。その退避が終了した瞬間に、少年の足元に一発の非殺傷設定の魔力弾が撃ち込まれた。それを見た少年は、その額に一粒の汗を浮かべた。少年にはリンカーコアが無いので、その魔力弾一発でも致命傷——気絶するだけだが——なのだ。

『こちらB - 3！ まだ抵抗している奴がいた！ 武装はアサルトライフルだけだが、どうすればいい！？』

『こちらA - 1。その子供は無視して、早急に第4級反管理局組織「K P S A」の首領^{しゅりやう}を確保して下さい』

『こちらB - 3、了解した！ 指定のポイントまで急ぎ移動する！』

少年にはこのやり取りは聞こえていなかった。そのやり取りが会話によるものであったし、何よりも少年は、既にその場から逃げるようにして脱出していたからだ。

「……この世界に、神はいない……！」

その逃げる途中に、少年の口から、その少年の全てが込められている様な気迫でもって、その一言が発せられた。そしてその一言を口した少年の口から、ガリツという音と共に、血が一滴、黄土色の砂でできた地面へと落ちた。しかし、その落ちた音は、少年のすぐ後ろを追う様に発射された射撃魔法の雨による騒音でかき消される。

「この世界に、神なんていない……！」

もう一度、少年が真っ赤になった口でそう言った。それと同時に、少年の目の前で、少年と同年代の、少年と同じ銃を胸に抱えていた少女が、色とりどりの魔力弾の嵐に呑みこまれ、意識を失う。その光景を見た少年は、すぐさま進む方向を転換し、石でできた家に両脇を挟まれている通路を進む事にした。

「いたぞ、こつちだ！」「手こずらせやがって、犯罪者共が！」「テロリストを全員確保しろ！　ただし、殺傷魔法だけは使うなよ！」
「どうせ奴らが持っているのは旧式の銃とバズーカだけだ。そんな貧相な武器じゃあ、B・Jを貫けねえよ！」
「……ッ!？」

しかし、その通路の先には、十人近い魔導師達が、魔力を各々のデバイスに充填して、少年を待ち構えていた。その姿を見た少年は、半ば反射的に銃の引き金を引くが、銃弾は魔導師達のB・Jを貫くこと無く、虚しい音を立てて、地面に落ちた。

「クソッ……!」

思わず悪態を吐く少年。だが、悪態を吐いた所で世界が変革しい事は、少年自身が一番骨身に染みて理解していた。

何故なら、その少年の言う通りに、この世界には神などという存在はいないからだ。

故に、少年は救われない。今まで信じてきた、居もしない神が少年を救わないように、この残酷な世界も、少年を救わないからだ。だから少年は、最後の抵抗として、魔導師達をキツと険しく睨んだ。決してお前らには屈しないと、お前らの神など信じないと……その意思を示すように、少年は険悪な目付きで魔導師達を睨む。

「これでこの任務も終いだな。ディバインシューター！」
『ディバインシューター』
「……!」

一人の魔導師が杖状の青いデバイスを少年に向けた。その矛先には既に白っぽい魔力が球形となって滞空しており、今か今かと発射の時を待ち望んでいた。それに思わず、魔導師には効かない銃を乱射する少年。魔導師はその抵抗の全てを受けつつ、無表情のまま発射のキーワードを唱える為に、口を開い

ドウシューンッ！ ドウシューンッ！ ドウシューン……

少年には何が起こったのか、全く分からなかった。気が付けば、少年を狙っていた筈の魔導師達全員が、夕闇に沈もうかという空から降ってきた数条の桃色の光線に撃ち抜かれ、呆気なく死んでいた。あまりの事に、口と目を茫然と開くしかない少年。

「……？」

だが、その疑問はすぐに氷解した。何故なら、空から蒼碧色の粒子が降ってきたからだ。それを不思議に思った少年は、顔を天上へと向け、そして……見た。

少年——ソラン・イブラヒムにとっての……確かな「「ガンダム」神」を。

【戦え……お前の信じる神のために！】

——『機動戦士ガンダム00』の刹那・F・セイエイより

00・彼の者はその日、『神』を見た（後書き）

最初の短さは許して下さい。

そして、感想と言う名の批判、お待ちしております。勿論、此方の方でも格言は募集とさせていただきます。

ここまで読んで下さった皆様には感謝を。

最後に。

次の投稿が何時になるかは不明ですが、取り敢えず、三話目を執筆してきます！

01・降臨する天上人（前書き）

【俺がガンダムだ！】

——『機動戦士ガンダム00』の刹那・F・セイエイより

01・降臨する天上人

——新暦71年——

この世界に、神はいない。

「大佐あゝ……まだ新型デバイスのデータ取り、終わらないんですかあゝ？」

「パトリック、さつきも言っただが、これは非常に重要、かつ機密性の高い実験だ。私はA A A + ランク魔導師であるお前の実力を見込んで、この実験に無理を言っただけで参加させてやったのだぞ？まさか、それを忘れたわけでは……」

「も、勿論忘れていませんよ、大佐あッ！」

第3管理世界「ヴァイゼン」の、とある褐色の山間の一画に、一人の男が、若草色のボディースーツとヘルメットを被って、その山肌の上に二本の足で立っていた。その手には細身で鋭角的な、やけに銃身が長い銃が握られており、間違っても民間人ではなさそうだ

った。実際、その男の身分は、局員というよりも軍人に近いモノがあり、魔導師同士では中々ない、命を賭けた戦闘すらも、男は経験した事があった。

また、男のヘルメットに内蔵されている通信機の先、男が居る場所から数キロ以上も離れた所にいる女性も、この男と同じ部署に所属しており、こと戦略に関しては、超組織である時空管理局においても三本の指に入るほどの智将である。

「……まあいい。ところでパトリック、もう一度聞くが、その対質量兵器用の新型ストレージデバイス「ヘリオン」の感触はどうだ？」
『どう……と言われましても、このとんでもなく薄いB・Jの性能はいいですし、銃型にした所為か、射撃魔法の精度も上がりましたし……自分にとっても合うデバイスだと感じましたよ、大佐あゝ』
「そうか……どうやらあの新型デバイスは良好みたいですな、マリエル・アテンザ主任とイリス・ラビリンズ第一局長殿、それに……モコ殿？」

「でも、まだ今一詰め切れてないといえますか……」

「詰まる所、最終チェックまでしないと安心できない」

「……（それでも、これだけの性能を叩き出せたので、私は満足です）」

その智将、カティ・マネキン大佐は、モニターの光りが照明の替わりになっっている薄暗い部屋で、パトリックを細かにモニタリングしている三人の女性へと話しかけた。それに管理局の第4技術部からやってきたマリエルは不安げに、中央技術開発局の第1局長たるイリスは冷静に、カレドヴルフ・テクニクスCW社の技術主任であるモコは満足げに返答しつつ、三者三様の意見を出し合い始め、カティにもさっぱり分からない高度な議論を展開していった。

「うーん……フェイトちゃんはアレを見て、どう思う?」
「え?」

その某開発王とマッドな科学者、知恵の実、あとは無限書庫の主にしか理解できそうにない高度な会話を、何とか理解しようと、はつきり言ってしまうは無駄な努力でしかない、そんな無謀を試みていたフェイトへと、マリエルは前振りも何も無く、いきなり話を振った。だが、フェイトは話を振られても、何を言えいいのかがさっぱり分からなかった。

「えっと……マリー? ごめん、何を言えいいのか、分かんないけど……」

「ヘリオンをフェイトちゃんの観点、まあ執務官の視点から見て、どんな感じなのかを言ってくれればいいわ」

「詰まる所、あなたから見て、ヘリオンが質量兵器を使用する犯罪者に通用するかどうか」

「……（貴女自身の忌憚きたんなき意見をお願いします）」

「……私から見て、ヘリオンは十分に通用すると思います。ヘリオンに搭載されているB・Jは薄くて軽いので機動性を損なわないですし、対弾、対魔性能も、最低Cランク魔導師以上の性能ですので」

「……」

「それに、自分の魔力をカートリッジの魔力と一緒に発射する「魔導ライフル」も、精度、及び威力、安定性、全てが申し分ないです。……まあ、これならどんな魔導師でも、最低Dランクぐらいの犯罪者には通用すると、私は思います」

フェイトは自分が本当に思った事を口に出しつつ、先程から板状のターゲットを撃ち抜いている男——時空管理局本局武装隊航空戦技教導隊の本隊に所属する「不死身の男」パトリック・コーラサワ

ーをモニター越しに見詰める。

『イイツヤツホウウーッ！！ 大佐ああああッ！！』

モニターの向こうでは、パトリックが白雲漂う青空を背景にして、飛行魔法で縦横無尽に舞い、地面に設置されていた板状のターゲットを、次々と手に持った銃で破壊していた。一つ二つ三つ四つ……全てのターゲットが破壊されるまで、一分もかからなかった。その動きを脳内に叩き込みつつ、自分ならどう対処するのかをシミュレートしてみるフェイト。

『それじゃあ大佐あ、次ザザようザきをザザー』

「……？ 何だとパトリック？ 聞こえんぞ？」

『でザザザつザザひよザザーーーーーー』

「……どうなっている？ 通信機の故障か？」

「でも、そんなデータはどこにも出ていませんよ？」

「結界を張られたとしても、ヘリオンの通信機はAランク以上でなければ遮断できないはず……しかし、そんなモノが発動した形跡は見当たらない。如何に高ランク魔導師といっても、魔法を発動した際に発生する魔力波長や残留魔力までは隠せない。詰まる所、何故ヘリオンの通信機が妨害されたのかは不明」

「……（AMFや机上の空論であるゼロエフェクトだとしても、あの切れ方はおかしいです。もし仮にそれらが原因だとしても、それなら通信はいきなり切れる筈です。徐々に聞こえなくなっていくとしたら……分かりません）」

だが、フェイトは周りに漂い始めた不穏な空気を感じ、対ヘリオンのシュミレーションを途中で切り上げ、目を雑音がするモニターの方に向けてみた。すると、そのモニターは画面中に白黒の砂嵐が舞っており、先程まで映っていたパトリックが完全に見えなくなってい

た。

「一体、何が起こっているんだろっ……?」

ザザザザー、という耳障りな音が薄暗い部屋に響く中、フェイトのその一言は、誰の耳に入らずに消えていった……

「ああ? なんだこりゃ?」

パトリックは突然ノイズが奔った通信機に驚きつつ、青空からゆっくりと地面に降り立った。そしてそのまま身を低くして、平らな足裏で地面をゆっくりと、警戒しつつ歩いていく。

「ちくしょー……一体何が起きているんですか、大佐あゝ」

犯罪者に顔を知られない為に施された黒いフェイスカバーの中で、大の男が情けなく泣言を言っている絵は、中々にシユールなモノだった。しかし、そんな情けない姿を晒していても、パトリックは周囲の警戒を厳に保ちつつ、一步一步、前に進んでいく。

「……あん? 何だこの音?」

だが、そんなシユールな姿のパトリックの耳に、まるで金属と金属をぶつけあっているような、そんな甲高い音が入ってきた。それにパトリックは眉を寄せる。カティの話では、この辺り一帯は自分達しかないはずだが……

「……どういう事なんだよ、これは？　ヘリオン、お前はこの音が何か、分かるか？」

『ノー、マスター』

「……ま、そりゃそうだな」

自分のデバイスも分からない、謎の金属音。それにパトリックは、通信が遮断された事も含めて、自分が襲撃を受けているのではないかと思い始めた。だが、何故こんな金属音を出す必要があるのだろうか？　襲いかかるなら無音のまま奇襲するのがベストなはず……

「……本当に、なんだってんだよ、大佐あああ！」

本当によく分からないこの現状に対し、パトリックは自分が襲われているという緊張感もなく、弱音を吐きまくった。彼は折角の大佐との時間を邪魔されて、少々ご立腹していたのだ。

最も、

「……？　音が……止んだ？　って、なんだあやッ！？」

それは、

『……エクシア、刹那・F・セイエイ。目標を駆逐する！』
『Yes,meister。目標を駆逐します』

青と白で構成された天上人^{ガンダム}を見るまでであった。

天上から地上へと、滑る様に降り立った「ガンダム」エクシアは、翠色の、「CB」で言うパイロットスーツに酷似したB・Jを纏っている目の前のパトリックへと、疑いようなない敵意を向けた。その敵意を受けたパトリックは、自分に喧嘩を売っているのだと勘違いした。それならばと、彼は手の中の新型デバイス、魔導ライフル「リニア」をエクシアに向け、次いで、何の警告もなしに発砲した。

「どこの何なのかは知らねえが、このオレを知らねえとは言わせねえぞ！」

至近距離からの銃撃。避けられる筈が無い。そう予想したパトリックの思惑は、しかし、完全に外れる事となった。エクシアはその攻撃を、パトリックの予想以上に滑らかな動作で、優々と回避したのだ。それに舌打ちをする暇もないまま、次弾を発砲するパトリック。

「オレはな、時空管理局本局武装隊の航空戦技教導隊に所属するエース、パトリック・コーラサワだぞ!? あのと千回の模擬戦で負け知らずの!!」

『エクシア、GNビームサーベルを!』

『Yes,meister。上手に使って下さいよ?』

エクシアは空に数センチほど浮遊したまま、その次弾をも地面す

れすれを飛翔する事で避け、パトリックとの距離を一瞬でゼロにした。凄まじい運動性能である。

「オレは！」

その動きに、パトリックは目が追いついても、体がついていけない。あまりにも速すぎて、彼の肉体が反応し切れないのだ。

「スペシャルで！」

エクシアの左手に、左肩後ろから引き抜いた桃色の光剣、刃渡り1メートル程のGNビームサーベルが握られる。そして、それが横に一閃されると、パトリックのリニアが真っ二つになった。

「二千回で！」

パトリックはリニアが破壊されると、今度は腰のホルダーから引き抜いたソニックブレイドを左手に握り、エクシアへと突撃する。だが、その攻撃をする前に、エクシアの右手に折り畳まれていた大剣、GNソードが大仰な音を立てながら展開され、パトリックのその左手を真上に斬り飛ばした。

「模擬戦なんだよオオオ！？」

そこからは、もう鬨り殺しだった。エクシアは敵に戦う力が残っていないにもかかわらず、気を緩めずに剣を振るっていった。右手のGNソードが、左手のGNビームサーベルが交互に振るわれる度に、パトリックからは鮮血が飛び散り、辺りを血の赤に染めていく。

『しっこい……！』

『それは、meisterの腕が未熟だからですよ。エクシアとしては、もっとmeisterには精進して欲しいです。エクシアが認めるぐらいまで』

『……努力する。だが今は……！』

幸いにも、致命傷となる攻撃だけは避け続けているパトリックだったが、それも時間の問題であり、確実に、少しずつ、エクシアに追い詰められていった。そして遂には、既に意識朦朧となっていたパトリックが、足元の小石に躓き、態勢を崩してしまい、決定的な隙を見せてしまう。

『これで終わりだ！』

勿論、その大きな隙を逃すほど、エクシアは甘くも弱くもない。態勢が崩れたパトリックへと、GNソードが大気を切り裂きながら迫る。それを静かな心持ちで眺めつつ、パトリックはただ、一緒に伸し上がるかと約束していた彼女へと、謝罪の言葉をヘルメット内で呟く。

「すみません、大佐あ……どうやらオレ、ここま……」

しかし、その謝罪の言葉は、最後まで言われる事は無かった。何故なら、パトリックへと迫っていたGNソードが、パトリックの目の前でいきなり消えたからだ。怪訝な表情で周囲を見渡すパトリック。と、そこへ、金色に光る魔力光を身に纏った魔導師が一人、パトリックのすぐ側に降り立ってきた。

「だ、大丈夫ですか、パトリックさん！？」

その魔導師は、長い金髪をツインテールに結び、漆黒のマントを

風にたなびかせながら、先程吹き飛ばした謎の敵へと、戦斧型インテリジェントデバイス「バルディッシュ」を突き付けたまま、パトリックへと声をかけた。その表情には謎の敵に対する不審と、パトリックを心配する気持ちが入り混じっており、かなり複雑な物となっていた。

「へ、へッ！ オレを誰だと……イッタアアアッ！？」

その知った顔を見て安心したのか、パトリックは少しだけ気を緩めてしまった。すると、今までにエクシアから喰らった傷が、いきなりその痛みを彼の脳内に叩きつけてきた。思わず絶叫し、地面に蹲るパトリックを、苦い笑みで見る金色の魔導師。

『アレは……まさかッ！？』

『……Meister？』

その合間に、バルディッシュで吹っ飛ばされたエクシアが、金色の魔導師と相対する形で立ち上がった。そしてエクシアのマイスターである刹那は一人、モニターの向こう側にいる魔導師を見て……戦慄した。

何故ならそれは、「金色の閃光」という^{あだな}綽名で犯罪者たちから恐れられているSランク魔導師、フェイト・T・ハラオウンだったからだ。

【無力であることは罪ではない

ただ、それを知ろうとしないことは罪深きことだ】

——EXAM様から

01・降臨する天上人（後書き）

本編の投稿は12月12日（日）です。ちなみに、文量は大体5000字を目安としています。あと、以前Forceの設定は使わな
いと言いましたが、SSX共々、やっぱり使う事にしました。これ
でまた複雑な設定になるかもしれませんが、許して下さい。それと、
この作品のシアは、あくまでも本編のシアと同人格ですので、お間
違いのないようお願いします。ここまで読んで下さった皆様に感謝
を！

最後に。

さて、03・の執筆に取り掛かりますか。

02・其は慈悲なきモノにて（前書き）

【特別な死はない——死は無慈悲なまでに平等だ】

——EXAM様より

02・其は慈悲なきモノにて

——新暦71年——

第6管理世界。魔法が普通となっているその世界の、茶色い地肌が剥き出しとなっている赤茶けた山の山頂付近で、それは長大な銃を構えながら、そこから桃色の光線を無数、放っていた。

『ロックオン・ストラトス、デュナメス、狙い撃つぜ！』

『ネライウツ、ネライウツ！』

緑の装甲に覆われた機械人形——「CB」で言う所の「ガンダム」、
「ガンダム」デュナメスは、その特徴でもある額のガンカメラを開眼させながら、次々とその戦域にいた魔導師達を狙い撃つていく。魔導師はその攻撃を防ぐために、それぞれの魔力光に光る魔法防壁を展開するが、デュナメスの高出力ビームはそれを容易く貫通し、その命までも貫き殺す。回避しようにも、デュナメスの正確無比な一撃は、「避ける」という動作を許さずに、必中でもって放たれ、魔導師の数を慈悲なく減らしていく。

「何なんだよ、こいつは！？」「ふ、防げ……！？」「避け……！？」
「……えッ！？」「がッ……！？」

悲鳴を上げることすら許さないとばかりに、数十人もの魔導師の命を刈り取っていくデュナメス。デュナメスは空に浮きながら、地を這うしかない魔導師達を俯瞰し、GNスナイパーライフルの照準を合わせ、その引き金を引く。単純な作業、単純な仕事、単純な実験……だが、それは淡々と人を殺していく。感情が抜け落ちたかのように。ロックオンは自身がしていることに吐き気を覚えるが、そ

れすらもデータ上の出来事であり、生身の彼には何の影響も及ぼさない。それが彼に、自分は目の前の事象とは無関係であると、そう錯覚させてくる。自分が殺しているというのに。

『……ふう。ハ口、どうだ？』

『ニンムタツセイ、ニンムタツセイ！ キカン、キカンッ！』

『おう、これでいいんだな？ そんじゃまあ、戻るとしますか！』

『うむ。今回の実戦テストはこれにて終了だな、マイスター』

吐き気を呑み下し、無理やりに明るい声を出しながら、ロックオンはデユナメスを、動くモノがいなくなった山頂から離させた。背面から付き出た白いコーン状の物体——GNドライブから、蒼碧色のGN粒子が、ロックオンの吐き気を表す様に吐き出された。重力を無視して、夜闇に浮かび上がるデユナメス。とそこへ、いきなり母艦「プトレマイオス」から通信が入った。それに少しばかり驚きながら、デユナメスのマイスターであるロックオン・ストラトスは、すぐにその通信に出た。四角いモニターが彼に視界に現れ、その中に映る、髪が桃色の女性が口を開いた。

『ロックオン、緊急の報告があるんだけど……』

『……？ 何かあったのか、フェルト？』

『うん。えっとね……刹那が管理局員と戦ったんだって。しかも、そのまま撤退した……らしいよ？』

『……………』

その通信を聞いたロックオンは、空を駆けながら思わず、

『はあッ！？ 何してんだ、刹那は！？』

と、叫んでしまった。

『アイツだって、まだ管理局と戦う時じゃないってのは分かってんだろ！？　なのに、何で……！』

感情を剥き出しにして叫ぶロックオン。だが、フェルトはやや困惑気に、彼の問いに素直に答えた。

『それが……ヴェーダでも確認できなかった極秘作戦が、ちょうど刹那の性能実験場で行われていたんだって。……それで、ヴェーダが言うには、『これからどうなるか、予測できない』みたい……』
『……そりゃあまあ、しょうがないわな。しかし、ヴェーダすら確認できなかった作戦が、刹那のすぐ近くで行われていたなんてなもう運がわりいとしか言えねえよ。なあ、デユナミス？』

『全くもってその通りだな、マイスター。しかし、これからどうなるか……先行きが不透明になったのは痛いな』

『イタイ、イタイ！』

ヴェーダすらどうなるか分からない。その言葉に衝撃と不安を感じつつ、ロックオンはそのままその世界から消え去り、母艦「プトレマイオス」へと帰還していった。

そして、彼はこれから起こるであろう動乱に、知らず、拳を握っていた。その内心に、自身ですら気付かないほど小さな喜びがあった事に……彼はまだ、気付けていなかった。彼がマイスターたる由縁、その目的を果たせそうだと、そう思っていた事に、彼はまだ……

第88管理外世界。その工業地帯が広がるとある都市の離れで、「ガンダム」キュリオスはその都市では有名な犯罪組織を相手に、縦横無尽に空を駆けていた。

『「ガンダム」キュリオス、作戦行動に入る！』

『Yes, master。この速さを、アイツらに魅せ付けてやりましょう、ヒヤッハー！』

工場の一画を照らす外灯に、美しく照らされた橙色の機体が、一瞬の内に、平べったくも尖鋭的な形に変形した。その変形機能を見て、魔法の存在を知らない犯罪者たちは、大いにたじろいでしまった。

『貰った！』

そのたじろいでしまった人間を、機体の下部に装着されているGNビームサブマシンガンで八チの巢にするキュリオス。そのマイスターであるアレルヤは、命を奪うという行為に否定的なのか、データ化された顔を酷く辛そうに歪めた。それを見た管制人格であるキュリオスは、しかし、何も言わない。キュリオスだって分かっているのだ、彼が何に対して苦痛を感じているのかを。しかし、それを指摘する事は、今のキュリオスにはどうしてもできなかった。もしそれをしてしまったら、彼自身が珍しく好意を抱けたマイスターの心を壊すかもしれないからだ。

「この……悪鬼めが！」

「……なんとわれようと、僕は僕のことを……押し通す！」

最後のボスらしき人間も、周りの人間だったモノと同じ様に八チの巢にしたキュリオスは、体を所々が尖っている人型へと戻した。そのデュアルアイがどこか悲しげで物憂げだったように見受けられるのは、果たして気のせいかな？ それは誰にも分からない。

「……これで、ミッションコンプリート。帰還しよう、キュリオス」

「Yes, meister. ……？ マイスター、プトレマイオスより通信が来ました。繋がりますか？」

「任務は完了したよ、キュリオス？」

「いえ、どうやらそれとは別件なようで……」

「……よく分からないけど、繋いでくれるかい？」

「Yes, meister」

だが、その悲しみも、そのぶつ飛んだ内容の通信を聞くまでであったが。

第9観測指定世界。そこは観測だけが許されし、不可侵の世界。だが、その不可侵の世界に侵入した、とある広域指名手配犯は、今、

死ぬほど後悔した。目先の利益だけに囚われた、先程までの自分を。

「死ぬ死ぬ死ぬ死ぬシネしねエエエエツ！！」

多くの魔力弾を、死ぬ気で放つ手配犯。その魔力弾が向かう先が、砂塵さじんにより包まれる。しかし、手配犯からあまりよく見えなくとも、それでも彼には理解できた。

自分と相対している相手に、この攻撃が意味を成していない……と。

『ヴァーチエ、目標を破壊する！』

『圧縮粒子、解放！』

「うおおおおッ！？」

男が作った砂塵の中から、いきなり桃色の極光が飛び出してきた。それを手配犯は体ごと横に転ばせる事で、何とか首の皮一枚で避けた。その極光はそのまま直進し、男の背後にあった山の中腹に当たると、その大部分を、綺麗に消し去ってしまった。その威力に、思わず顔を蒼白にさせ、失禁してしまう手配犯。

「……お、俺が何をしたっていうんだ、神様よおおおおッ！？」

そう叫ぶ手配犯の前で、ズシンツという重い音が轟いた。巨人の足音の様に聞こえるそれに、腰を抜かしそうになる手配犯だが、そんな手配犯を無視して、その足音は、手配犯の方へとズンズン近づいてくる。

『やれやれ……もう一度、照準の修正しなければならない、か……』
『Yes,meister。お手数をおかけしてしまい、申し訳ご』

「ごめんです」

『気にするな、ヴァーチェ。僕はそんなに気にしていない』

巨人が鳴らすような足音を出していたのは、その音を出すに相應しい巨体を持つ、白い機械人形であった。その白い機械人形は顔の上部に付いているデュアルアイを怪しく光らせながら、手配犯である男の方へと、ゆっくり歩み寄っていく。右手に持った、黒光りする大砲を、手配犯の方に向けながら。

「うわあああッ!？」

その尋常ならざる威圧感に、手配犯は心の底から恐れをなして、そこから逃げ出そうとした。だが、肝心の足が恐怖でガクガクと震え、思った通りに動いてくれない。それでも必死になって、四つん這いになつてでも、そこから逃げ出そうとする手配犯。

だが、現実……世界は、いつでも残酷である。

……グシャリ。

「あ……」

自分の上に、巨大な影が覆い被さつたと認識した手配犯は、その生々しい音を聞くと同時に、自身の脳漿を、岩だらけの地面の上にブチ撒けた。胸糞悪い色をした血液が、その場に水たまり——血溜まりを作る。それを上から無感情に眺めていた白い機械人形——「

ガンダム」ヴァーチェは、手配犯が確かに絶命したのを確認してから、手配犯の頭を容易く踏み潰した足をその場から持ち上げた。

『これでミッションは終了だな、ヴァーチェ？』

『Yes, master. これにてヴァーチェの性能実験は終了です。後は帰還するだけで……？ マイスター、ミス・スメラギから通信です』

『ミス・スメラギからだ？ ミッションは無事に終了したはずだが……』

ヴァーチェの足が、血色に染まっていな地面に、大きな音と共に降ろされると、その数百キロもありそうな巨体が、音もなく空へと舞い上がった。蒼碧色の粒子が、深い青を湛^{たた}える空に広がる。その見慣れた光景を何とはなしに眺めていた「ガンダム」ヴァーチェのガンダムマイスター、ティエリア・アーデは、GN-004の管^{マス}制人格であるヴァーチェから、スメラギ・李・ノリエガの通信を、訝^{いぶか}しげに受け取った。自分は完璧に任務をこなしたはずだ、そう思いながら。

『ティエリア、落ち着いて聞いて欲しいんだけど……エクシアの存在が、管理局にバレたわ』
『……………』

ブチッ！

しかし、その疑念に満ちた思いは、スメラギから齎^{いさ}された情報により、木端微塵^{いっぴん}にされた。自分の顔が恐ろしい表情になっていくのが分かるティエリア。

そして、何かが切れた音だけが、その場に木霊し続けた……

無数のモニターが乱立する薄暗い部屋に、老人は杖を片手に、部屋の中央に置かれた革張りのソファ^{セワ}に座っていた。老人は杖を持つていない方の手でモニターを忙^{せわ}しく動かしながら、モノクルの奥に潜む瞳で、目の前で繰り広げられている情報戦を、油断なく注視する。禿^はげあがった頭上から汗が何粒か滴^{したた}り落ちてきたが、それすら気にならない程に、その老人は目の前の情報戦に集中している。

そこに余裕などは、微塵も見られなかった。

「全力でいったはずなのだが……まさか、これ程の物とは……！」

老人の驚いた声が、部屋に虚しく響く。老人はカツカツと、どうしようもない焦りを現すかのように、地面を何度も杖で突^つくが、事態は一向に改善の兆しすら見せずに推移していき、それが老人の焦りを倍増させていく。そんな老人の心境を見かねたのか、目の前のモニターから無機質な声が、無感情のまま老人にかけられた。

『Meister、冷静保持提案』

「……すまない、世話をかける」

『No,meister。本局、マザーコンピュータ「A・L・I・」

C・E・S」、かてて加え、「無限書庫」。セキュリティレベル、「ヴェーダ」同等」

無機質な声は、平坦な声のまま、ありのままの現実、事実を老人に話す。それを聞いた老人は、目頭を一、二度揉むと、深々と溜息を吐き、世界にただ一つの量子演算処理システムである「ヴェーダ」に、本局へのハッキングを停止させるよう命じた。ヴェーダは特に異論を挟まないまま、その命令に従う。

「……」

『本局、動向不明。予測……不可』

「……情報の改竄^{かいざん}ができなかったのだ。恐らくは……戦争に突入していくだろうな」

『戦争……勝率19%。かてて加え、情報戦互角……敗色濃厚、戦争回避提案』

「そうしたいのは山々だが、この流れは止められまい。十一年前に起きた「一年戦争」のように、「CB」もまた……戦乱に巻き込まれよう」

重い溜息が、知らず、老人の口から吐き出された。これからの展望もそうだが、先程まで本局のマザーと無限書庫を相手に、単身で戦っていたのだ。老人の体には厳し過ぎる疲労が、老人の身と心に重く押し掛かってくる。

「……勝つぞ、ヴェーダ。人類の為に、そして……私達の為にも！」
『Yes,meister』

しかし、勝利が絶望的な事を知って尚、老人の目に諦めの色は見られない。その目は最初から最後まで、終始一貫して未来に向けられていて……目の前の事象すら、老人にとってはまだ、些事の出来

事であつた……これからが、本番だとも言つ様に。

【むきだしの力、暴力こそが歴史上、ほかの何にもまして、より多くの問題を解決してきた……それを否定する事は弱者の希望的観測であり、現実逃避でしかない……。

この自明の理を忘れた種族は、人命と自由という高価な代償を支払わされてきた……】

——ダイモン様より、ロバート・A・ハインライン『宇宙の戦士』より

02・其は慈悲なきモノにて（後書き）

本編の次話投稿は、1月24日（月）。

03・提督と司書長（前書き）

【いずれお前も、俺に追いつく時が来る】

——凡人様より、『Fate/stay night』のアーチ
ヤーより

03・提督と司書長

——新暦71年——

「ふう……それにしても、何だったんだろう、あのハッキングは？ ロストログアからだったのかな？ そうじゃないと、あの処理速度は説明できないような……」

ブツブツと、不気味に独り言を呟くこの少年の名は、ユーノ・スクライア。彼はありとあらゆる英知が捨て置かれていると噂のここ「無限書庫」、その若き司書長である。腰近くにまで伸びたハニーブロンドの髪に、優しい翡翠の瞳。そして細いフレームの眼鏡をかけた、女性のような容姿を持つ彼は、先程、最高評議会から回ってきた仕事を終えたばかりであり、どこか憔悴せうすいしているようであった。

「……（でも電子戦を仕掛けてくるロストログアなんて今まで存在しなかったはずなのにしかもどうして本局のマザーだけをピンポイントに理解できないところで今日の夕食どうしようフェレットフーとジャンクフードどっちを食べようか迷うなどっちもおいしい……）」

だが、ユーノはすっかり憔悴していても、先程の疑念——マザーにハッキングを仕掛けてきた謎の敵について、頭を働かせる。ハッキングを仕掛けてきた時の、あの異常な情報処理速度、そして性能は……既存の技術では説明ができなかった。次元世界でも最高峰さいこうほうの性能を誇る本局のマザーコンピュータ「A・L・I・C・E・S」。それにハッキングをしかけられるほどの性能とは……理論上、未だかつて実現化されていない「量子演算処理システム」しか、有り得ない。だが、それはまだ何処も……無論、管理局ですら、システム

の構成には成功していないはずなのだ。

だからこそ、分らない。敵の正体が、一端すらも。次元世界有数の賢者であるユーノの頭脳を持っても、全く……分からなかった。

『おい、フェレットもどき。何をしているんだ？ さっさと依頼した資料をだな……』

俯きながら、無限書庫の無重力に身を任せ、本と本の間にプカプカと浮かぶユーノ。とそこへ、提督用の黒い制服を着こんだ男——ユーノの悪友であるクロノ・ハラウンから、資料請求の催促がやってきた。しかし、心身ともに疲れていたユーノは、何時もの軽口にすら付き合わずに、現状の彼の状態と要望を端的に、的確に説明し始めた。

「ちょっと待ってよ、クロノ！ さっきまで最高評議会から押しつけられた仕事をやっていたんだ！ 少しだけでもいいから、期限を延ばしてくれないか？（ああもうそう言えばクロノの依頼もあったんだっけ今日でもう一週間も寝ていないっていうのにどうしてこゝう僕は扱き使われるんだらう最高評議会といいコイツといい……死ねばいいと思うよ？）」

『こちらもギリギリの期限で頼んでいるんだが……他に仕事があったのなら仕方ない。三日だけ延ばしてやる。だからさっさと仕事をしろ、フェレットもどき』

「フェレットもどき言うな、シスコン提督！」

『僕はシスコンじゃない！』

三日だけでも期限を延ばしてくれたことで、少し余裕を取り戻したユーノからの応戦に、クロノも何時も通り応戦する。何だかんだ

言いつつも、彼も彼なりに、珍しく疲れ切っていたユーノの事を心配していたのだ。

『とにかく、三日後だ！ 三日後にはキッチリと耳を揃えて提出してもらおうからな！』

何時も通りになったユーノに安心しつつ、最後にそう言って通信を切るクロノ。空中に投影されたモニターが消え、辺りに静寂が舞い落ちる。ユーノはその静寂の中で、クロノの気遣いに感謝しつつ、最近になって設置された司書長へと、その身を移動させた。

「はあゝ、クロノに気を遣われるとか……借りを作っちゃったか……な……？」

ユーノの人差し指が、司書長室の扉を開閉するスイッチへと伸びる。だがそこで、ユーノは気付いた。自分以外の何モノかが、既に司書長室へと入り込んでいるのを。

「……！」

全身を緊張でガチガチに強張らせるユーノ。だが無情にも、その指は既に止まらない所まで進んでいて……スイッチに、触れてしまった。

カシユッ！

という軽い音と共に、扉が左へとスライドした。と同時に、ユーノ目の前に、彼の部屋でもある司書長室が広がっ……

「あ、ゆ、ユーノさんッ!？」

広がって……？

「お嬢様、さあ今です！ 今こそ、あの地獄の特訓の成果をッ！！」
「わ、分かりました！ ……お、お……お帰りなさいませ、ご主人様！ ご飯にしますか、お風呂にしますかッ！？ それとも……じ、爺^{じい}や、これ以上は……！」

「何を言っておるのですか、お嬢様ッ！？ そこまでいけば、後一押し！ 後一押しで御座います！ さあ、ユーノ様を野獣淫獣、そして狼へと……」

「何を言っているんですか、バスターナさんッ！？ あと、プリウスさんも、何をやっているんですかッ！？」

ユーノの目には、司書長室に所狭しと置かれている本など、一冊も映ってはいなかった。彼の目に映るモノ、それは……目の前で何かのコント——最も、本人達は本気——としか思えない物を繰り広げている、男と女の二人組であった。

「だ、だって……こ、この服を着て、この台詞を言えば、たちまちの内に殿方を骨抜きにできると、爺やが……」

「バスターナさん、またプリウスさんに嘘を……！」

「嘘では御座いませんとも、ユーノ様！ お嬢様の魅力は、この次元世界一で御座います！ そんな御方からのお誘いを断ることは、一般男性には不可能ですとも！」

ユーノにプリウスさん、と呼ばれた20歳ほどの女性は、黒いフリルをふんだんにあしらった白いゴシックロリータ服を着ていた。20歳とはいえ、プリウスという女性はかなり童顔で、さらには身長も147cmと小柄だったため、ユーノの目から見ても、その白黒の服は、プリウスにとてもよく似合っていた。……それが称賛

かどうかは別だが。

そして、男の方、ユーノにバスターナさんと呼ばれた、白髪目立つ初老の男は、黒の燕尾服えんびふくを見事に着こなし、口髭くひげに蓄えた白髭しろひげを上ピンツと跳ねさせていた。彼はプリウス付きの執事で、いつもプリウスの斜め後ろに立っており、今この時も、彼はプリウスの、恥ずかしさでへたり込んだ様子を、彼の専用デバイスワンオラ「カリバーン」ができる最高画質で、詳細緻密しょうさいちみつに録画している。

「……とにかく、司書長室に入るのなら、僕に一言言ってから……」
「それでは、お嬢様。爺じいは司書長室の外でお待ちしておりますので、ユーノ様にお持ち帰りされる際には、是非とも一声かけてから……」
「じ、爺や、何を言っているのッ!? わ、私とユーノさんはそんな関係じゃ……じゃにやいけど……ポッ?」

「……もう、何も言いません。言いませんから……話を聞いて下さい……!」

思わず脱力しながら、ユーノは目の前にいる二人のオーバーソラック魔導師へと、疲れ切った声を漏らした。だが、その要望が叶えられるはずもなく、プリウスはお茶の用意をし始め、バスターナは司書長から出ていった。その様子を見て、ユーノはまた脱力してしまふ。もうどうにでもなれ。それが彼の偽らざる本心であった……。

ちなみに、その後。ユーノは送り狼などにはならず、きちんとプリウスをバスターナに預けたそう。それに二人が不満顔っぱかったのは気のせいだと、ユーノは自分にそう言い聞かせた。

「全く……後で何があったのか、問い質さなければならぬな」

局員の胃袋を支える本局の食堂で、身長が最近になって伸び始めたクロノ・ハラオウンは、ユーノとの通信を終わらせると、中断していた食事を再開させた。トマトの赤とベーコンのピンクが映えるパスタと、様々な色合いで彩られたサラダが、彼の今日の昼食である。クロノは少量のパスタをフォークに絡め、それを口に運んだ。運ぶ、運ぶ、運ぶ……

「昔と変わらず、美味しそうには食べないのだな、ハラオウン？」

「……別にいいじゃないですか、フォンフォン少将殿？　これが僕のペースなんですから」

「かーッ、可愛くない、可愛くない！　52歳である僕の軽口に付き合いもせんとは！」

「軽口の相手は間に合っていますので」

その食事、いや作業を向かいの席から眺めていたFⅡFⅡグラ^{フォン}ンチャイルド^{フォン}？　世は、しきりに「可愛くない」を連呼しながら、自分の食事をパクパクモグモグと、実に美味しそうに食べ始めた。作業をするかのように食べたクロノとは対照的な食べ方だ。無論、それも意図して食べているのだろうか……と、クロノは思う。

「そう言えば、聞いたか？」

「何をです？」

「ヴオクシーがお前を捜し回っているという噂さ」

普段は好々爺じいちゃんの風体を崩さないフォンフォンの、極めて真面目な表情。寄せられた皺しわが、眉間に深い溝を刻む。クロノは警戒感を持つてフォンフォンに対応しながら、その雰囲気は一瞬、呑み込まれそうになった。さすがは少将にまでなったお方、並々ならぬプレッシャーだ……！　そう思わずにはいられない。

「……ええ、聞いています。恐らくは、模擬戦を申し込むつもりなのでしょう。でも、今僕は仕事が忙しいのです。なので、こうやって隠れ……まさかッ!？」

そこまで言つて、クロノは気付いた。フォンフォンがどうしてクロノに話しかけてきたのか。そして、彼が何を狙っていたのかを……！

「フォンッフォンッフォンッ……儂をたった一杯で糖尿病にまで追い込んだリンディ茶のように甘かったな、ハラウン！　お前は既に、儂の術中だッ!！」

「謀りましたね、フォンフォン少将殿!」

急ぎパスタをかき込み、その場から立ち去ろうとするクロノを上機嫌な笑みで眺めるフォンフォン。その顔は余裕綽々で、焦りなぞ微塵も見られない。何故なら、彼は既にクロノの居所を「ヴオクシー」なる人物に念話で伝えていて、そしてクロノのその行動は……少しだけ、少しだけ遅かったからだ。

ドドドドッ！　と、食堂に地鳴りが響いた。それを聞いたクロノは顔を嫌そうに顰しかめ、フォンフォンは愉快気に笑った。そして、その地鳴りを出した人物は、一直線にクロノたちの方へと近づくと、

鼓膜を破らんばかりの大音量でもって、こう叫び出した。

「うおおおおおッ、クロノ・ハラオウン！ 俺と20回目の勝負をしろおおおお！」

「……」

「フオフオフオフオッ！ 愉快、愉快！」

フォンフォンの愉快的笑い声が、食堂の空気を震わせる。だが、その愉快的な笑い声とは正反対に、クロノはだんまりを決め込んだまま、突撃してきた人物を無視して、食堂を出ようとした。

「待て待て待てえーい、好敵手よ！ 貴様はこの宿命の好敵手たるオレ様を無視して、何処に行こうとしているのだッ！？」

「クラウディアに行くんだ。まだ仕事が残っているからな」
「貴様はオレ様より仕事を取るのかッ！？」

「当然だ。お前と関わって碌な目に遭わなかった事はないしな、この疫病神」

「きさ……！」

「まあ、落ち着きなされご両人」

クロノは冷静な対応でヴォクシーを振り払おうとしていたが、その行為が返ってヴォクシーの怒りに油を注いでいることには気が付けなかった。それを見かねたのか、フォンフォンは両者の間に割って入り、何時でもデバイスをセットアップしそうな二人を抑えようと……

「……そう言えば、ヴォクシー？ お前さんが先日、テストロッサ・ハラオウンの、あのはち切れそうなプルプルおぱい^{男のロックスン}を驚掴みにしたと、僕は人伝にそう聞いたんだが……」

「は？ 何だそれは？ あんな少女にそんなこと、このオレ様がするわけが……ッ！？」

違った。どうやら彼は、クロノを焚き付けようとしたらしい。それも、怒りに油どころではなく、ガソリンを百リットルほどもぶち撒けて。

「三秒だ。三秒だけ、遺言を書く時間を与えてやる。後は……分かるな？」

ヴォクシーの声が途切れたのは、目の前で絶対零度の視線を放つクロノを見たからだ。思わず体と足を震わし、後退りしてしまうヴォクシー。次元世界「最強」として名高いヴォクシーですら、今のクロノには勝てる気がしなかった。お互いの勝率が五分五分なはずなのに、である。

「……ふ、ふふ。それでこそ我が好敵手よ！^{ライバル} 行くぞクロノ、遥か高き決闘へ！」

「ああ、ぶつ殺してやるよヴォクシイイイイイイッ……！」
「フォンッフォンッフォンッ。頑張れよ、お二方。……さて、儂もそろそろ若い衆を弄^{いじ}るのを止めて、仕事に戻るとするかの」

訓練室へと向かう二人を見送ったフォンフォンは、苦いお茶を一気に飲み干すと、そのまま自分の仕事場へと戻っていった。そして同時に、食堂に活気が戻った。オーバーSランク魔導師全員がいなくなつて、漸く一般局員たちはゆっくりと昼食を取ることができたのであつた……。

ちなみに、その後。クロノはヴォクシーを文字通りコテンパンに叩き墜としたが、訓練室の修理費と山の様に溜まった仕事、それに、

エイミーからの暴力付きお小言というジェットストリームアタックに、心も体も、灰になりかけた……らしい。

【仲間だけは誇れ。忘れるな】

—— 鴨川柊様から、『ヨルムンガンド』のココ・ヘクマティアルより

04・世界清浄

——新暦71年——

男は一人、ほくそ笑む。それは手のワインが旨いからか、それとも何か、別の理由があるのか……

「ふっ……エクシアが管理局に発見されたか。少々早いが、これもまた運命の導き……この私に吹く、祝福の風なのだろう」

男は赤茶色のスーツを着ていた。それと、彼の周囲には心なしか黄金の輝きが多い様な気がする。……ちなみに、男は黄金が大好きであった。

「……お義父さん、どうしたの？ 何だか凄く嬉しそうだけど……」
「何、私にとって都合のよい、予定外の事が起こったのでな……少しばかり、はしゃいでいたのだよ、ロベルト」

男が「ロベルト」と呼んだ少年——10歳に届くかどうか——の小さな頭を、男は優しく撫で回した。ロベルトという少年はそれを気持ちよさそうに享受しながら、男の足にしがみ付き、もっともつと……甘えようとする。

「そうなんだ……お義父さんが嬉しそうだよ、何だか僕も嬉しく……」

「ロベルト様が嬉しがあると、この私めも興奮してきます！ さあ、ロベルト様！ この私めと一緒に、保健体育という名の実技を練習致しましょうッ！……」

そして、そんなロベルトの腕を絡め取る、ロベルトの専属メイド——長い蜂蜜色の髪を持つケスティ・アーネット、15歳は、未だ冷め止まぬ興奮で顔を真っ赤にしながら、ロベルトを男から引き離し、ケスティの怪しげな自室へと引き摺りこもうとする。例えばロベルトがそれをかなり嫌がり、イヤイヤしていても、それがケスティに更なる性的興奮を覚えさせるので、逆効果にしかならなかった。

『待てえええい！ 儂の目が黒いうちは、そんなことはさせんぞ、このシヨタコンバカ娘！』

しかし、ケスティのその行動に待ったをかける人物がいた。その人物は70後半ほどの老婆で、今は男のすぐ傍に座っていた。老婆は既に声を出すのも億劫なのか、念話でもってケスティを激しく怒鳴り散らした。ケスティはそのあまりの音量に、思わず頭を抱えた。自然、口調が荒くなる。

「チイイッ、このクソババア！ 私とロベルト様の、互いの愛を語り合う閨の時を邪魔しないで下さい！」

『それは明らかにお主の誤解だろうが！ アレハンドロ様も、笑っていないでロベルト様を助けてやっておくれ！』

「ハッハッハ……いや何、つつい面白くてな……ケスティ、そろそろロベルトを離してくれないか？ さすがの私も、涙目になった息子を見るのは吝かではないのではな」

70後半の老婆——コーラン・ダンヌに、「アレハンドロ」と呼ばれた男は、そう言いながら、ロベルトの手を取って、自身の膝の上にロベルトを座らせた。ロベルトはケスティの時とは違い、嬉しそうにアレハンドロに身を委ねて、アレハンドロの胴体に抱き付いた。それを見て、嫉妬の炎をメラメラと燃え上がらせるケスティだったが、しかし、相手が自身の雇い主である為、何も言うことがで

きなかった。奥歯の碎ける音が聞こえたのは、気のせいな筈だ。

「……さて、「CB」が何か対策を講じるよりも前に、私も当主としての仕事を済ましておかなければ……な」

幸せそうなロベルトを膝の上に乗せながら、コーナー家の当主、アレハンドロ・コーナーがそう呟いた。その呟きを拾うモノは、ロベルト以外、誰一人としていない……。

「……カタギリ、随分と熱心にその映像を見ているが、何か気になる所でもあるのか？」

「いやなに、ちょっと知り合いから頼まれてね……この機械人形を解析して欲しいってね」

管理局と並び称される超組織、「世界清浄」が所持する基地の一つ、「MSWARD」^{エムスワード}で、その二人はコーヒー片手に、白と青の機械人形が管理局の新型M・S「ヘリオス」^{モヒルスーツ}を、圧倒的な性能で蹂躪^{じゅうりゃん}する様を見ていた。

「……？ 何だこの機械人形は？ 随分と私の知っているモノと違

うが……」

「それは僕にも言える事さ。正直、何から何までお手上げだよ」

映像の中の機械人形は、蒼碧の粒子を噴射しながら、緑のB・Jを纏うヘリオン——パトリック・コーラサワーをどんどん追い詰めていった。その一撃一撃が尋常でない威力なのは、見るまでもなかった。

「……このヘリオンの性能は、確かにリアルドと同じくらいだったな？ それをこうも圧倒するとは……！」

「まだ試験が終わっていないうちのフラッグや管理局のイナクトとは比較していないから何とも言えないけど、この機械人形、相当高度な技術で造られているね」

そう言いながら、映像を見つめるのは「世界清浄」の技術主任、ビリー・カタギリ。その隣に立つ「世界清浄」最強の『エース』グラハム・エーカーは、映像の中に出てきた魔導師に驚いた。

「これは……なんと！ あの「金色の閃光」ではないか！」

「ん？ ああ、そつか。君は一回、彼女と戦ったことがあったんだっけ？ それじゃあ、もしかしたら、これは君の興味を惹くかもね」

「……？ それはどういう意味だ、かたぎ……」

「まあまあ、見てれば分かるよ。……きつと、ね」

グラハムが訝しむ中、カタギリは黙って映像を再生し続けた。その態度に、グラハムはきつと聞いても何も答えないだろうと思い、素直に映像を暫し眺めていたが……気付けば、その拳を強く握りこんでいた。

「……ッ！」

機械人形は初めこそ劣勢だったが、次第に、フェイト・T・ハラウンを、先程のヘリオンと同じく、右手の大剣で追い詰めていった。その体捌き、剣捌き……つまりは、機械人形の動きは、グラハムの眼から見ても相当なものであり、思わず生唾を呑み下してしまうほど、美しいモノであった。

「……これは、確かに惹かれるな」

「君ならそう言うと思っていたよ、グラハム」

程なくして、機械人形がフェイトを遠くへ吹き飛ばし、フェイトのデバイスである「バルディッシュ」の柄を半分に切り裂いた。フェイトがそれに驚愕していると、機械人形はいきなり上空へと浮遊し、逃亡を図ろうとした。それを追おうとしたフェイトだが、吹き飛ばされたダメージとバルディッシュのリカバリーに時間を取られ、まんまと逃げられてしまう。

「とても機械人形如きができる動きだとは思えんな。一体、これはどういう原理で動いているんだ、カタギリ？」

「それが、僕にもよく分からないんだ……これを送ってきたモコさんも分からないとすると、これはもしかしたら……ロストロギアなのかもしれない」

「……ロストロギア、か。成程、合点がいく。オーバーSと同等に戦う機械人形など、確かに御伽噺おとぎばなしの中のアルハザードぐらいにしか造れんだろう」

映像はそこで終わったが、グラハムにはそれで十分だった。あの機械人形の姿を思い浮かべるだけで胸が躍りおど、心の奥底から興奮してしまう。それは「恋」にも似た感情で……「愛」のような気持ちでもある。それをグラハムは映像で見ただけの青い機械人形に抱い

ていた。

「それで？ あの機械人形はなんという？」

まるで無邪気な子どものように目をキラキラと輝かせながら、グラハムがビリーに機械人形の呼称が何なのかを聞いた。ビリーはその姿に苦笑しつつ、映像を操作する。

「……今はアンノウンとしか言いようがないね。でも、額に書かれていた文字からすると……」

映像の中の機械人形の額をズームアップするビリー。すると、機械人形の額には六つの文字からなる単語が記されていた。その六つの文字——G・U・N・D・A・Mを目で追ったグラハムは、その単語をこう呼んだ。

「……「ガンダム」、か……！」

熱に浮かされたように、その名を口にするグラハム。その姿はまるで、思い人の名を知って浮かれた青年のソレのようであった。その姿を、親友のビリーはただ笑って眺める。

これがグラハム・エーカーとビリー・カタギリの、「ガンダム」との初めての接触であった。この接触が世界にどんな影響を齎すのか……それはまだ、誰にも分からないことである。

「……むう」

白髪の老人は、彼の自宅のスクリーンに映る青い機械人形を見て、思わずそう唸^{うな}らずにはいられなかった。青い機械人形はオーバースランク魔導師として知られるフェイトを相手に、互角以上に戦っていた。それが老人には信じられないのだ。

「……むう」

もう一度、唸^{うな}ってしまう老人。だが、それも当然のこと。老人が知る限りでは、オーバースランクとほぼ同等の力を持つ機械人形など、現在の技術で造れるはずもないからだ。確か、かつてエネルギー技術開発会社「アレクトロ社」の開発部主任であった大魔導師、プレシア・テストロッサですら、AランクかAAランクが限界だったはずだ。

「……やはり、この粒子が鍵を握っていそうじゃのう」

プレシア・テストロッサ。6年前に第97管理外世界で起こった「P・T事件」の首謀者であり、また、最先端のエネルギー技術を持っていた魔導師でもあった女性。特殊な条件を揃え、かつ、身体の限界を考えなければ、一瞬とはいえ、あの「夜天の書」とほぼ同格の魔導を行えた大魔導師……

そんなオーバーSランクの大魔導師ですら、A→A Aランクの機械人形しか造れないのだ。それは「P・T事件」の最終決戦場であった「時の庭園」でも確認されたことだ。そして、老人は今も、彼女を超えるエネルギー技術者を見たことがないのだ。モコしかリリスしかリビリーしかり老人しかり……エネルギーという分野においては、誰もが彼女の一步後ろを歩くしかなかった。

「緑色に輝くこの粒子……これを解析できれば、あるいは……」

機械人形の性能を左右する動力機関部、その第一人者とも言えるプレシアですら造れなかったオーバーSクラスの機械人形……老人はその力の源を、機械人形の背後から出る謎の粒子だと考えていた。機械人形の白いコーン状の出っ張りから絶えず出るこの粒子……この粒子を解析することができれば、あの機械人形の性能も説明できるはずだと、老人はそう推測したのだ。

「このロストロギアを……解明することができるかもしれんな」

小さな呟きは、スクリーンの中で動き回る機械人形に決して届かない。しかし、もしその呟きが、やがて大きな声となれば、老人がどうなるのか……それを老人は考えていなかった。

何故なら、老人はあくまでも一介の技術者であり、そういった政治的取引や戦略などは、甚だ門外漢だからだ。そういったモノは上が決めることと、そう思っていたからだ。されど、例え老人がそのような分野に長けていようと、老人は機械人形の解明を止めなかっただろう。だって、彼は技術者なのだから。

「さて、カタギリ君にはもう連絡をしたから、次は無限書庫のスク

ライア君と連絡を取るか。……かれこれ二年振りじゃが、彼は今、
どうしているかのう?」

そう言つて、座っていた椅子から立ち上がった老人は、その身に
黒いコートをまといながら、家の外へと赴いていった。おもむその先に何
が待ち受けているのか、それを知ること無く……次元世界から「エ
イフマン教授」と呼ばれる老人は、一步一步、確かにその世界を歩
いていた。

「……好きな女子には、告白したのかのう?」

【無力であることは罪ではない。

ただ、それを知ろうとしないことは罪深きことだ】

——EXAM様より

05・衝突の前触れ

——新暦71年——

「刹那ああああッ！！　これはあ、どうということだああああああああああ！？」

「そのままだ、ティエリア。正直、すまなかったと思う……」

「それで済む問題じゃないだろうおおおおッ！？」

第6管理世界の宇宙空間。そのあまり開拓されていない宙域に浮かぶプロレマイオス（愛称：トレミー）は、外側で円を描いて回る四つのコンテナ、それぞれに「ガンダム」を一機ずつ収納して、その宙域を延々と周回していた。

また、そのブリッジでは、四人のガンダムマイスターとトレミーのクルーが一拳に集結していた。その中で、ガンダムマイスターであるティエリア・アーデが刹那・F・セイエイを怒鳴りつけていたが、他の者たちはそれに対し、傍観を決め込んでいた。

ティエリアの怒鳴り声は長く続いていたが、ある程度怒鳴り散らすと満足したのか、「もう二度とするなよ？　分かったな、刹那」というと、そのまま踵を返し、手摺へと体を預けた。それを見て漸く、他のマイスターとクルーたちは動き始めた。ティエリアの癩癪かんしゃくが収まったのを見計らっていたらしい。

「で？　Miss・スメラギ。これからオレ達はどう行動すればいい？」

「少しレールが外れたけど、『計画』通りに事を進めるなら、『ヴェーダ』を使つての『宣言』をしなければいけないわ。まずは私達

のことを知ってもらうために」

「それで、その目処は？」

「……ない、わ。イオリアさんが言うには、向こうのマザーと無限書庫に阻まれて、「宣言」どころか情報改竄すら容易じゃない……とのことよ」

「そんな……ああ、アレルヤ。僕達は、どうすれば……」

緑のシャツに赤い袖無しジャケットを着たロックオン・ストラトス、藍色のインナースーツを着るアレルヤ・ハプティズム。そして、魔的な色気を出すおぱゝいを露出する水色のシャツを着たスメラギ・李・ノリエガは、互いの顔を見合せながらそう会話した。アレルヤの悲観的な声はいつものことだが、酒に酔ったスメラギがここまで深刻な声で告げてくるということは、やっぱ相当な事態なんだな……と、ロックオンは思う。

「ねえ、フェルトー？ 何だかいつもより化粧に気合入ってない？」

「……そんなこと、ないよ」

「ええー？ 絶対いつもより気合入っているって！」

「そうそう！ 何だかいつもと雰囲気違うツスよ！」

「……おい、リヒティ。何でお前まで分かるんだよ？ オレにはちつとも分からないぞ？」

「それはラッセさんが鈍いからツスよ。一目瞭然つしよ、これは？」

そう言っつて、白い歯をのぞかせるリヒテンダール・ツエーリ。それに呆れながら、フェルトの桃色の髪を梳くクリステイナ・シエラ。筋骨隆々なラッセ・アイオンはそれを見て溜息をついて……いつもよりめかし込んでいるらしいフェルト・グレイスは、クリスの手で梳かれる心地良さに、刹那に向けていた目を細めた。

「……むっ」

「……」

それを尻目で見つつ、イアン・ヴァステイが「CB」の現在の状況を鑑みて、深く唸った。その隣にいたJB・モレノも、顔を顰めたまま、現状を打破する思考を張り巡らす。……しかし、良案は一考に思い付かない。

「……ともかく。私達はこれから、『計画』に則って……引いては、『ヴェーダ』から提示されるミッションプランを確実にこなして、世界から紛争行為を根絶させる……それでいいわね、皆？」

「……はいっ！」「」
「……」

刹那とティエリアは無言で首を縦に動かしたただけであつたが、その方針には賛成のようである。それを確認して、スメラギもまた深く息をはきながら、覚悟を決めるように両腕を組んだ。そして、力強い視線でクルー全員の目を見渡すと、

「……それじゃ、早速ミッションを開始するわ」

そう宣言をし、これから行うミッションについての説明を開始した。

「今回のミッションでは、ミッドの臨海第八空港、第6管理世界、第54管理世界に同時介入を行うわ。そして、空港にはアレルヤ、第6管理世界には刹那とロックオン、第54管理世界にはティエリアを派遣します」

ブリーフィングルームに現れた地図を差しながら、説明を行うスメラギ。四人のマイスターたちは自分の担当する地域の情報を読み

取りつつ、介入の手順を確認していく。

「空港では、そこにDr・ジェイル・スカリエツィの使いがいるはずよ。アレルヤには、その使いとコンタクトを取って欲しいの」「了解。……まさか稀代のマッド・サイエンティストと手を結ぶ時が来るだなんてね」

「彼の利用価値は計り知れないわ。それに、彼ほどの頭脳を野放しにしておくほど、「CB」に余裕はないのよ」

空港の見取り図を見ながら、ぼやくアレルヤは接触場所を確認した。また、そのデータをキュリオスの太陽炉に転送し、何時でも見られるようにしておく。

「刹那とロックオンは、第6管理世界で今まさに起きようとしている民族紛争の鎮圧を。恐らく管理局辺りが立ちはだかるかもしれないけど、まずは紛争の鎮圧を最優先にして」

「了解」

「オーライっと」

刹那とロックオンも、アレルヤと同様に、太陽炉へとミッションに関するデータを転送する。目は第6管理世界の地形のデータを追っており、緩やかな丘陵地帯が、今回のミッションを行う地域であった。

「それで……第54管理世界では、「世界清浄」の支部を壊滅させなさい、ティエリア。勿論、徹底的によ」

「了解した。なら、僕は徹底的にさせてもらう」

体を少し前傾にさせながら、ティエリアがそう言った。その言葉に頼もしさと恐ろしさを感じつつ、スメラギはクルーたちの目をも

う一度見渡した。

「では、これより「CB」は世界の紛争に対し、武力による介入を行います！」

スメラギの覚悟がこもった一言。それを聞いて、クルーとマイスターたちが一齐に自分の配置場所へと向かっていった。

この理不尽で救いようのない世界を、己がエゴで覆す為に。

……施設の広さと料理の上手さが絶妙に織り合う本局の食堂で、男二人は一緒に食事をとっていた。普通ならば、世間話でもしていそうな関係に見える。しかし、二人の会話はそんな可愛げのある物ではなかった。

「クロノ、君の言う通りに無限書庫で探ってみたけど……この機械人形に関する情報で、二つ、確かになったことがある」

「ほう、随分と速いな？　いつもの資料請求もこれぐらい速くしてくれば助かるのだが……冗談だ、そう睨むな。で、何が確かになったんだ？」

「この機械人形の名は「ガンダム」で、これを保有している組織が

「CB」だということ。今はまだこの程度しか調べられないけど、もう少し時間をくれたら、もっと詳細に調べてくるよ」

「ああ、頼む」

眼鏡をかけた男が、何枚もの資料を黒髪黒制服の男——クロノ・ハラオウンへと渡した。資料は「未確認機械人形について」と題されており、クロノはそれを向こう側に座る男——ユーノ・スクライアから受け取ると、茶色い封筒を手慣れた様子で開き、中に入っていた資料の一枚一枚に、素早く目を通した。

「……全部で四機、か？」

「それは分からない。今のところはこの四機しか確認できないけど……」

「これ以上の機体を確保しててもおかしくはない……か」

ユーノが調べた資料に書かれていた機械人形は、全部で四機。クロノは一機一機の情報を頭に叩き込みつつ、目で文字を追っていく。

緑色の機械人形。仮称は「三つ目」。額にあるガンカメラからそう名付けられた、狙撃を得意とする機械人形。飛行している状態でも狙撃が可能であり、狙撃そのものの精度も並はずれて正確である。

橙色の機械人形。仮称は「羽付き」。M・Sでは不可能な変形機能があることからその名を付けられた、速度重視の機械人形。視認することすら難しい速度で飛び回り、変形後はさらに速くなるので注意が必要である。

白色の機械人形。仮称は「デカブツ」。他の「ガンダム」よりも

二回りほど図体が大きいことからそう命名された、重火力・重装甲の機械人形。恐らくは高町なのはとほぼ同等のスペックがあるかと思われる。A Aランク魔導師すら一撃で消し飛ばす火力がある。

青色の機械人形。仮称は「剣士」。そう称された理由は、その機体が接近戦主体であり、また体のあちこちから剣を取り出すことから。クロスレンジが恐ろしく強く、ミドルレンジにおいてもBランク魔法並みの射撃を放つので、かなり厄介な相手である。また、新型M・S「ヘリオン」及びフェイト・T・ハラウンと交戦し、逃亡できるだけの戦闘能力がある。

不意に、ある一文がクロノの目に止まった。そこには最愛の妹の名が書かれており、思わず顔をにやけさせてしまうが……

「……ユーノ」

「なに？」

「これは、本当か？」

その時、ユーノは思った。「ああ、やっぱりこいつシスコンだ」と。

「……一応聞くけど、何が本当なの？」

「この「剣士」とかいう機械人形とフェイトが、本当に戦ったのか、だッ！」

「……戦ったとしたら、どうするの？」

「決まっている」

何故か席を立つクロノ。全身からオーラが立ち昇っている。シスコンのオーラだ……ユーノは溜息をつかずには入られなかった。テ

ーブルにあったブラックコーヒーを精神安定剤として飲む。

「もしフェイトの柔肌に傷一つでもつけていたら……許さない、絶対にだッ！」

……ブラックコーヒーだけじゃ足りなかったね、うん。そう後悔しつつ、ユーノは、目の前でいきなり恥ずかしい宣言をした友人を、冷めた目付きで見上げた。

もう手遅れだとは……思いつつ。

「……許さないのは勝手だけど、気を付けた方がいいよ？　いくら君でも、この機械人形たちにはきつと手こずるはずだから」

「……何？　それはどういうことだ、ユーノ？」

極まった興奮が収まってきたクロノが、ユーノの言葉を不審げに問い直した。冷静さを取り戻したことに心底から安堵しつつ、ユーノは自分の言葉の意味を語る。

「だって、この機械人形は……ヘタすればオーバース、かもしれないからさ」

「……オーバース、だと？」

クロノがあからさまに驚愕した。だが、それも仕方のないこと。この百を超す世界から成る次元世界ですら、オーバースランク魔導師は全体でも60名にも満たないほど希少な存在だ。次元世界の平和を護る管理局ですら、オーバースランク魔導師は精々40名ほどしか確保できていない。他の世界清浄や聖王教会ですら、両方合わせても十人に届くかどうかだ。

それほど希少な存在であるオーバースランク魔導師は、同時に、極めて強力な兵器でもある。質量兵器が全面的に禁止された次元世界では、最強の生体兵器といっても過言ではない。最強の魔導兵器はアルカンシエルやロストログアに後れを取るが、それでも、個人が持つには過ぎるほどの力であることは間違いない。

そして、己もオーバースたるクロノには、その危険性が嫌というほど分かっていた。彼自身が歴戦のオーバースであり、何度も敵方のオーバースと戦ってきたことがあったのも、彼に危機感を抱かせる要因であった。

「そう、オーバースさ。少なくとも、この「デカブツ」に関してはオーバース認定しても問題はないと、僕は思う。コイツが消し去ったAAランク魔導師は、広域指名手配犯だった。それも、数年に渡って管理局から逃げ延びていた厄介な奴さ。なのに、この「デカブツ」はたった一撃で、その手配犯を消し飛ばした」

「……確かに、並大抵ではなさそうだな。それに、向こうは殺傷設定の攻撃を放ってくる。それを考慮すれば、確かにオーバースだと判断したほうが……」

ブツブツと呟くクロノを見ながら、ユーノはもう一度、手元にあった資料のコピーを眺めた。資料には機械人形の謎の粒子について、ビリー・カタギリとエイフマン教授による考察が書かれていた。それを読みつつ、目の前でまだブツブツ呟いている友人に、もう一つだけ、情報を与えた。

「それと、フェイトは無傷だったよ」

言っただけで後悔する羽目になるとは、露とも思わずに。

【血と涙の混合液が10Lを超えると、正義の味方は怒るのかい？】

——ココロンK様から、『スーパードロボット大戦Z』のジ・エーデルより

幕間―1

――新暦70年――

純白の白衣を着たジェイル・スカリエッティは、今日も今日とて、戦闘機人に関する研究で多忙の日々を過ごしていた。ここ最近には特に忙しく、寝る間を惜しまなければノルマの達成すら叶わないほど忙しい。ウーノはそんなスカリエッティのことを心配していたが、本人は徹夜のハイテンションのせいか、そんな不調などまるで感じずに、研究へと心身を捧げ続けていた。

自他共に認める「狂気のマッドサイエンティスト」。尽きぬ欲望を糧に研究を行うスカリエッティは、知識を得過ぎたばかりに、純粹な狂気をも孕んでいた。そんな彼へと、「CB」の創設者であるイオリア・シュヘンベルグがコンタクトを取るのは、ある意味、必然だった。

「ふむ……面白い話だ、Mr・イオリア。私としても、その『計画』には是非とも力添えをしたいところだが……何分、私も忙しい身でね。もう少し考える時間をくれると助かるんだが」

「返事が遅れるのは一向に構わんが……どれぐらいかね？」

「そうだね……一年ほど待っていて欲しい。こちらも即急に終わらせなければならぬ仕事が決まっているので、それぐらいは待ってもらわないと困る」

「うむ、了解した。ではまた一年後に会おうぞ、サイエンティスト」
研究者
「ええ、会いましょうとも、一年後に。……インベンター」
発明者

だが、スカリエッティはこのコンタクトのことを最高評議会に報告しないで、自らの研究に没頭し続けた。頭の中ではすでに答えは

決まっていたが、迂闊な行動をとれば、即座にスカリエッティは最高評議会子飼いの暗部に殺されることだろう。彼自身は戦闘機人と違ってもか弱い存在だ。一瞬の油断が命取りになる。

しかし、彼は自分を弱いと思いながらも、研究の邪魔になつてきた最高評議会、その暗殺を水面下で進めていた。その為の準備も含めて、彼は忙しいのである。そして、この忙しい時を乗り越えて、彼は新暦75年に、その暗殺を完了させる……

——新暦71年——

あれからちょうど一年が経過していた。年月の経つ速さをしみじみと実感してしまう。今のスカリエッティは一年前とは違い、それ相応には暇ができていた。その空いた時間の殆どは研究に回されるのだが、それも最近は無の体調管理により抑え気味となっていた。

つまり、今のスカリエッティは完全に暇なのであった。

「……暇だ。では返事をしよう」

天才の思考は理解できない。それを分からせるような唐突な行動。あまりにも突然過ぎるその行動に、ウーノは思いつきつんめりそうになったが、ギリギリで持ち堪える。

「……誰に返事をするのですか、Dr.？」

「決まっているだろう？　いつぞやに協力を求めてきたイオリア・シュヘンベルグにだ」

当然のことのように応えるスカリエツティだが、その表情は非常に険しいものであった。

「全く……まさか監視カメラの情報まで発掘してくるなんてね。本当、タチの悪い反則だよ、あそこは」

ウーノはスカリエツティが指す「あそこ」がどこなのかを知っている。何せ彼女が数年かけて構築した本局へのハッキング経路をズタズタにしたのも「あそこ」だからだ。マザーすら騙していたはずのハッキングは、しかし、「あそこ」が本格的に稼働するのと同時に露呈し、封鎖へと追い込まれた。今ではこっちがハッキングを受けていないかを確認しなければならず、しかもハッキングを受けていなくとも、デジタルデータ等の資料は全て向こうにあるので、なおのことタチが悪い。

ウーノは今でも思う。あんな部署があつていいのかと。情報戦においてではまさに最強最悪ともいえるあんな物があつていいのか——あらゆる情報が存在するなど、あつてはならないのではないかと、そう思う。思ってしまう。

「トーレ、悪いけど伝言役をお願いできるかい？　場所は臨海第八空港のここだ。ここに「ガンダム」なる機械人形がやってくるはず

だから、その機械人形に対して「返事はNo」と答えてくれ」

「……Dr.の頼みなら断りませんが、本当にそれだけでいいのですか？」

「ああ、それで向こうは分かってくれるさ。……本当なら面と向かって言いたいところだけど、あの部署があるんじゃないとおちおち会談もできないからね。仕方がない、諦めよう」

先程までトレーニングをしていたトーレ。全身からは汗が噴き出していた。ウーノとは違って戦闘タイプの機人である彼女は、恐らくあのオーバースにも到達することができるだろう。それがどれだけDr.の助けになることが……それを想像すると、ウーノは自然と口元を緩めずにはいられなかった。

「さて、では研究を再開しよう。ウーノ、付いてきてくれ」

「はい、Dr.。くれぐれも無茶はしないで下さい」

「それは保証しかねる」

Dr.との何気ない会話。それにウーノが至福を感じていると、最高評議会からのお呼び出しがスカリエッティにかかった。スカリエッティは研究する時間を邪魔され、思いつきり嫌そうな顔をしていたが、それでもその呼び出しに応じないわけにはいけないので、渋々とウーノが作った戦闘機人に関する報告書を携えて、通信室へと向かっていった。

その後ろにウーノは黙ってついていく。それが秘書たる彼女の務めであり、使命でもある。スカリエッティは後ろにウーノを従えながら、自由気儘に生きて見たいと考える。ウーノや姉妹たちと共に、自由に研究を行いながら生きていく。

そんな輝かしい未来を掴むために、今日も今日とてスカリエッテ

イは最高評議会の議会に出頭する。心の内の『計画』を、胸の奥に隠しながら。

ウーノはそんなスカリエッティにただ黙って付いていくだけだ。それこそが彼女の生きる目的なのだから。

「……ちつ。こんな所で手前なんかと出会っちまうなんてな。イライラするぜ、全くよお」

「それは此方の台詞です。どうしてここにあなたなんかがいるのですか？」

「俺は大司祭に呼ばれたからだ。そういう手前こそどうなんだよ？」
「私は「カリム」に呼ばれました。……もしかして、大聖堂に行くつもりですか？」

「つもりも何も、鼻からそのつもりだ。……まさか、手前もか？」
「ええ。苛立たしいことに……ね」

男女の二人組が、聖王教会総本部、その大聖堂に通じる通路を、肩を並べて歩いていた。二人の間には険悪この上ない空気が漂い、高まる魔力が物理的な圧力すら伴って、ギシギシと周辺を軋ませていた。

最初に口を開いた男は、艶々しい赤髪を一つにまとめ、黒色のス
ーツをきっかりと着込んでいた。女の方は腰当てのあるシスター服
を纏い、頭の前部と後頭部に紫のリボンを巻きつけている。どちら
も容姿のレベルは高く、凜とした姿勢からは気品すら感じられた。
男の方にそんな事を言えば、笑いながら殺されるかもしれないが。

「くつくつく……そうか、そうかよ！ 何だよ、よく考えてみりゃ、
随分と愉快そうな事になってんじゃねえかよおいッ！」

「……数ある戦争屋の中でも飛び抜けて最低なあなたがそう言うん
でしたら、それはさぞかし最悪な事態なんでしょうね。まだ決まっ
たわけではありませんが」

「おいおいおいおい、随分と冷てえじゃねえか、カリムよお！ 本
当はお前だつて分かってんだろうが！ 俺たち二人を呼び出すぐら
いだ、こりゃもう戦争でもおっばじめようとしてんじゃねえのか、
あの老人共はよお！？」

「……もし仮に、あなたのいうような事になっていたら、私
は断固、戦闘を拒否致します。それに、私とあなたが一緒に呼ばれ
たぐらいで戦争が始まるというのは、あまりにも飛躍しすぎです。
もう少し頭を使ったらどうなんですか、アリー？」

カリムと呼ばれた女性の冷たい視線が、アリーと呼ばれた男を貫
く。しかし、アリーは獰猛な笑みを浮かび続け、笑い声を上げ続け
た。その下品な笑い声は、カリムの神経を逆なでしつつ、通路中に
木霊する。

「くつくつくつく……まあいい、これから分かるこつた。そうだろ、
腑抜けシスター？」

「だからまだ分からないと何度言ったら……本当に頭は大丈夫です
か、戦争屋さん？」

カリムの限界が近づく中、二人は漸く大聖堂の扉の前に着いた。厚くて重そうな豪華な扉は、人間というちっぽけな存在に威圧感を与えてくる。しかも、扉の奥にはこの聖王教会の最高権力者たちが勢揃いしているとなれば、感じる威圧感は一倍にも三倍にも感じてくる。

そんな扉を、アリーと呼ばれた人間は、よりにもよって蹴りでこじ開けた。由緒正しき、最高級の扉を、アリーはガサツな前蹴りでもって蹴り開けたのであった。

「……」

当然、このあんまりな事態に、大聖堂に集まっていた大司祭、枢機卿たちは皆一様に閉口し、アリーの隣りにいたカリムも、アリーのあまりの蛮行を前にして、言葉を紡ぐことができないでいた。そんな中を、アリーはただ一人で前に進み、獣のように笑いながら、聖王教会の最高権力者たちに噛みつく。

「そこで……どこで血生臭いドンパチが始まんだよ、爺共ッ!？」

聖王教会で最強と目される「傭兵王」の一吠え。それは戦争を招き入れる吠声はいせいのようであった。アリーから放たれる迫力に、何人かの大司祭がガタガタと椅子から転げ落ちた。そして芋虫のようにもぞもぞと動き、這い上がるうとする。

「来ましたね、アリー。それにカリムも」

「おうおうおうおう、相変わらず胸が無駄にデカイな、「カリフ」
!」

「あなた……「カリフ」様にそんな下品な言葉を吐いていいとでもッ!？」

「ふふ……私は気にしていませんよ？　それで、今回貴方たちをここに招致した理由ですが……」

「ああ……やっぱり戦争などではなかったのですね？」

アリーが去った後、カリムは「カリフ」と一緒にお茶を飲んでいった。アリーは「カリフ」直々の頼み事を聞いて、やる気のない溜息と共に、背中を丸くして通路を戻っていった。「ちくしょー………何でこの俺様がこんなことを……」そう呟いたアリーとは真逆に、カリムは実に活き活きとしていた。

「ふふ……アリーの戦闘中毒には困ったものね。でも、降りかかる火の粉を払うには、彼のような人材も必要なの。そこは分かってくれないかしら、カリム？」

「……分かっています。私も、彼の実力を認めていないわけではないので……」

苦虫を噛み潰したような表情に、「カリフ」が穏やかに微笑した。爆ばいがふるんつと揺れる。カリムは紅茶を優雅に口元に運びながら、言葉を続ける。

「……それで、どうしてアリーをあんな任務に就かせたのですか？　第54管理世界に彼を派遣するような事件は起きていないと思うのですが……」

「……それは、友人である貴方にも言えないことなのです。しかし、強いて言うならば、これは管理局からの要請であって、彼は第54

管理世界に赴く調査団の護衛というわけです」

紅茶を一口飲み、唇を潤わせる「カリフ」。

「これ以上のことは私の口からは言えません。実際、私も今何が起きているのか、正確には把握しておりませんので」

有無を言わさぬ口調で、「カリフ」がそう締め括った。穏やかな笑みが、今はとても冷たいものに見えてならない。

「……分かりました。では、私もアリーと同じように第6管理世界に赴いてきます。管理局の要請通りに」

「お願いしますわ、カリム」

ニコニコと、常日頃の笑みを湛える「カリフ」。カリムはそんな友人の姿に肩を落としながら、紅茶を飲み切った。紅茶は少し冷めていて、飲み易くなっていた。

ただし、若干の苦みをカリムに味わわせてもいたが……それは、実に些細なことである。

【苦さの味を知らぬ者は

甘さもわからない】

——つぁーる様から、ドイツの格言より

06・武力介入

——新暦71年——

第1管理世界ミッドチルダにある臨海第八空港。そこは今、猛る炎により景色を赤く染めていた。

『まさか、レリックが爆発したなんて……』

『しかし、私達もまだできるだけのことはしました。後は、任務をこなすだけです、マイスター』

その燃え盛る空港の中を、人型のキュリオスが、重力を感じさせない軽やかな飛行でもって飛び回っていた。白い四肢と橙の胸部が美しい機体は、胸部と同じオレンジ色の盾をもって、スカリエッティ一派との接触ポイントへと急行する。

『しかしまあ……こんな閉所を飛ぶ羽目になるなんて。ついいてま
せんね、マイスター』

『いや、僕としてはこの火災自体が起きなければいいなと思ってい
るんだけど……？』

『もつとこう……びゅんびゅんと飛び回れる場所でしたら、気分爽
快でしたのに……くう！』

『キュリオス、君が広い所と速さを愛して止まないことは知ってい
るよ？ けどね、今は任務の方に集中しない？』

『Yes , me i s t e r』

狭くて視界が劣悪な通路を、何てことはない軽々と通り抜けていくキュリオス。目的地までの距離がかなりの速さで縮まっていく。アレルヤはその目で生存者を捜しながら、的確で最短なルートを飛

び進んでいった。

その途中で黒いB・Jを纏った魔導師や、天井に砲撃を放とうとしていた馬鹿げた魔導師などを見かけたが、キュリオスは特にそれらに絡むことなく、目的地へと突き進んだ。彼の任務はあくまでもコンタクトを持つこと。魔導師と戦闘することではない。

それに、それらの魔導師は生存者を救出しており、その邪魔をすることは、アレルヤにはできなかった。

『さて、そろそろ目的地だけど……キュリオス？』

『反応……確認しました。すぐそこです』

「……来たか、「CB」とやら」

やがて広間のような場所に出たキュリオスは、静かな様子で佇む一人の女性を、その広間の中心付近で発見した。その女性はボーイッシュな服装で大きなバッグを担いでおり、もしツンツと張ったお椀型のおぱゝいが無ければ、男性とも間違えただろう。

「……貴方が、Dr.の使いですか？」

「ああ、そうだ。名はトーレ……という。……其方の名は？」

トーレと名乗った女性は、そう言うのと、青い髪をまだるっこしい感じにかき上げた。相当熱いのだろう。見れば、細い顎先や白い額からは汗が止め処なく流れ落ちていた。最も、機械の体となっているアレルヤには、その熱さを全く感じ取れず、暑さに共感することはできなかったが。

「……コードネーム「アレルヤ・ハプティズム」。こっちはA・Iの「KYRIOS」」

『Nice to meet you, heroine』

「……まあ、いい。それでは、此方の用件から述べさせて貰う。返事は……No、だ」

「……そうですか」

アレルヤが落胆した声を出したが、それに構わず、トーレは続ける。メッセンジャーとしての役割を果たさんが為に。

「こちらもちちらで、事情があつてな……済まない、とDr.は言っていた」

「分かりました。では、そう伝えておきます。……所で、一つ、聞いてもいいですか？」

「……ああ、構わないが？」

トーレがやや面喰った顔をするが、それに構わず、アレルヤは続けた。

「どうして直接の面談を望んだんですか？ 別に、普通の暗号通信でも大丈夫だと思うんですが……」

「知れたこと。この面談そのものを知られたくなかったからだ」

トーレの言葉に、今度はアレルヤの方が面喰った顔になった。思わず疑問形で問い返してしまう。

「知られたくない？」

「……今の管理局を、あまり舐めない方がいい。一昔前ならいざ知らず、今の管理局は情報戦においても凄まじく強くなっている。……」

「厄介な部署ができたせいだな」

「厄介な部署？ それは一体……」

「それを知らないのも無理はない。寧ろ、知らない方が普通だろう。」

何と言っても、それはまだたった六年しか本格的に稼働していないのだからな」

トーレの独白を聞いていたアレルヤは、しかし、その部署がどこなのか、全く見当がつかなかった。なので帰還したらこの事をスメラギに報告しようとする。勿論、口には出さなかったが。

なおも、トーレの独白は続く。

「だが、そのたった六年の間に……その部署は、管理局を次元世界有数の情報組織にまで仕立て上げた。そのおかげで、此方も動きづらくなっているのだ。……質問には答えた。もうじき管理局の魔導師がやってくるだろう。精々、管理局を掻き回してくれ。そうしてくれた方が、此方としても助かる」

「……了解。できれば、いつか力を貸してくれれば助かるよ」

「一考はしておく。だが、期待はするな」

大きな鞆を軽々と抱えたトーレが、その言葉を最後に、その場から離脱していった。それを見送ってからアレルヤもその場から脱出した。

その姿を捉えた魔導師は、誰もいなかった。ただ一つ、監視カメラに残っていた映像以外は……。

そこは阿鼻叫喚の地獄と化していた。剣が振られる度に、銃が撃たれる度に悲鳴が上がる、阿鼻叫喚の地獄。

『ハアアアアアアッ!』

『おらおら、狙い撃つちまうぞ!』

そんな地獄の中心に、その二機はいた。青色と緑色の機体……それは、二機の「ガンダム」だった。青い機体は右手に装着した大剣を振り回し、緑の機体は両手で固定した長銃から桃色の火を吹かせている。それら剣閃と光線は、魔導師たちの脆弱なB・Jを易々と食いちぎっては、その命を次々と散らさせた。

『次だ、エクシア!』

『Yes , me i s t e r . 10時の方向、距離23です』

青い機体——「ガンダム」エクシアが低空を駆け抜け、滑らかに剣を振るう。その刃は紛争をしていた両民族を斬り裂きて、残酷なまでの平等な死を両民族に与えた。紛争を行う愚、それを分からずかのように、エクシアの剣が断罪の剣となりて、間断無く振る舞われる。

『ハロ、回避行動は任せた! デュナメス、狙撃の補正を頼む!』

『リョーカイ、リョーカイ』

『……Yes , me i s t e r 』

緑の機体——「ガンダム」デュナメスが、空を舞いながら地上にピンクの砲火を降らせる。砲火は一撃たりとも外れることなく、全

弾必中でもって、魔導師たちに降り注ぐ。それは両民族が戦闘する意を失うまで、決して降り止むことはなく、その間にも狙撃銃はその真価を発揮していく。

「く……そ、がああああッ！！」「この、このッ、このオオオッ！！」「Fuckッ！！」

二機は、話し合いで紛争を解決しようとしていた管理局やル・ルシエ族を完全に無視して、この紛争を続けようとする両民族を攻撃し続けていた。また、何時までも攻撃を止めない二機に対し、遂に痺れを切らした管理局は武力でもってこれを鎮圧しようとしたが、結果は物の見事に惨敗。犠牲を無駄に増やしただけであった。

そして、敗北を喫した管理局は、本局からの明らかに間に合わない増援を待てずに、この近辺でもっとも力を持つ召喚士一族のル・ルシエ族に協力を依頼して、ル・ルシエ族から100名ほどの魔導師を借り、再び戦場をただ混乱させるだけの二機に勇み挑んでいった。しかし……

「は……はは。何だよ、お前ら。何なんだよ、お前らはああああッ……」

「ギャガガアアッ！？」

一日近くも戦い続けている筈の二機は、たった二機しかいないにも関わらず、その100名ほどの魔導師を……赤子の手でも捻るかのように、いとも容易く殲滅させた。「殲滅」の文字に嘘偽りなく、である。

「……オレが、「ガンダム」だ！」

『そんな迷台詞、一体どこから引っ張ってきたんですか、マイスタ

「？」

ル・ルシエ族の一人が召喚した竜を、大剣の一振り^はで絶命させたエクシアは、その返す刀でもって魔導師の首を刎ねてから、次の標的へと飛翔した。すると、先程と同様に5〜6メートルほどもありそうな竜がその進路上に立ち塞がるが、エクシアは竜のプレスを受けても物ともせず^に前進し、その竜の胴体を腰から引き抜いたGNビームサーベルでもってなます切りにした。

「ギャオオオツ！？」

「フェルディナント！？ フェルディナントオオオオツ！？」

「次！」

「……Yes」

竜の悲痛な叫び。それを聞いた召喚士が、傍目からも明らかにうろたえた。そこを突いて、エクシアがもう何人目か分らない「殺人」を犯す。うろたえた召喚士はそのうろたえた表情のまま、綺麗に胴体と首を別れさせられた。その時の返り血がエクシアのボディに付着し、青空のような青色を赤黒く上塗りするが、今の刹那はそんなことを気にも留めなかった。

それこそ、彼の相棒たるエクシアが、それを嫌って機嫌を急降下させていたとしても、だ。

「全くあの聞かん坊はよ……張り切り過ぎだっつうの！」

「……ああ、全くもってその通りだな、マイスター」

「少しはフォローするこつちの身にもなれつつうんだ……そうだろう、デユナメス？」

「……ああ。毎度貧乏くじを引くマイスターは、恐らくマイスターの中で最も苦勞しているだろうからな」

『ビンボウクジ、ビンボウクジ！』

『ハロ、回避に集中しろ！ 飛弾率上がってんぞ！ それと、デユナメスの言に反論できねえ自分が嫌になってくるぜ、全くよおッ！』

エクシアを狙っていた魔導師を、天空からの狙撃でもって撃ち抜いたデユナメスは、第三の目である「ガンカメラ」を、V字アンテナを下げた額に露わにすると、そのままの状態で数射、連続して狙撃を放った。デバイスを破壊された者、頭部を撃ち飛ばされた者が、狙撃の回数と同じ数だけ生まれる。

『エクシア、目標を駆逐する！』

『デユナメス、狙い撃つぜ！』

クロスとロングの距離を支配する二機の「ガンダム」。その進撃は終ぞ、止まることを知らなかった。「C B」による介入は一昼夜かけて延々と行われ、両民族に甚大な数の死者を齎し、最終的には民族紛争そのものを凍結させるにまで至った。

武力による紛争根絶……それを彼らは今、確かに成し得ていた。管理局ですら手出しを躊躇する厄介な民族紛争を、彼らは誰にも縛られずに、確かに根絶させたのだ。

だがしかし。それを評価する者は、誰一人としていなかった。寧ろ、中傷にも近い批判ばかりが、第6管理世界と管理局に横行した。戦争を圧倒的な武力で捻じ伏せる、それは現在の次元世界には到底受け入れられる物ではなかった。

また、それを褒め称えることは、時空管理局の権威を失墜させることにも繋がりがなかった。管理局も武力には武力を用いるが、それ以前に対話のテーブルを用意しなければ、如何に管理局とはい

え、管理世界に横暴と罵られることは避けようのないことだ。

管理局が対話のテーブルもなしに武力を用いる場合は、それこそ世界規模での危機のみだ。11年前の「一年戦争」然り、6年前の「P・T事件」然り、5年前の「闇の書事件」然り……対話をする時間すらない、緊迫した状態の時に限り、彼らは独自に武力を用いることができるのである。

そして、「CB」はまだ、世界規模の脅威だとは認知されていない。ただ、たかだか紛争の一つを根絶した程度では、管理局の気を引くぐらいが精々である。また、管理世界には管理局の情報操作がかなり有効に働くので、「CB」の存在自体、市民はまだ知らない。知らされていない。

つまり、「CB」の戦いは、まずは己が存在を世界に知らしめることから始まるのであった。

余談だが、この事件が起きたすぐ後に、五歳となったキャロ・ル・ルシエが部族より追放される。それは強すぎる力を持つが故の宿命だったが、もし……もしもキャロの力が原因で「ガンダム」が再びやってくる可能性があったとすれば？　そして、ル・ルシエ族の人々が、その事態を恐れていたとしたら？　五歳の子どもを放逐するのに足る理由が、もしかしたらあったのだとすれば？

……それはあくまでも可能性、幾つもある理由の内の一つにしか過ぎないが、可能性は無くもない、だろう。

ズズウン……重く鈍い音が、鬱蒼うつそうと生い茂るジャングルの中に響き渡った。小鳥の囀りもえも、サルの鳴き声も、ドラゴンの遠吠えさえも……今はもう聞こえてこない。聞こえるのはただ、太陽炉がGN粒子を圧縮する音のみ。

『圧縮粒子、解放』

いきなり静かになった森を訝しげに見つめていた警備兵に、いきなり大きな影が差した。それを不思議に思った警備兵たちだったが、次の瞬間にはその両目を大きく見開いた。その視線の先に浮かぶ白い巨兵を、彼らは見てしまったから。

『GNバズーカ、発射!』

『発射!』

白い巨兵——「ガンダム」ヴァーチェが、胸の前に構えた大砲から、桃色の極線を放つ。何の勧告も、合図も出さずに。

「……へ?」

ヴァーチェの極線は数メートルもの太さに達していた。また、極線の威力は、その太さに比例するかのよう**に**強力で、瞬きの内に世

界清浄の支部に施されていた2重の結界を破ると、その内側をも熱線の余波で蹂躪し尽くした。天然の山を刳り抜き、その中に造られた頑丈な支部。それがまるで飴細工のように破壊されていく光景を、警備兵たちは……もう、見る事すらできなかった。

『目標の破壊を確認した。これより帰還する』

それは、正に一瞬の出来事だった。そして、その一瞬の出来事で……第54管理世界・世界清浄活動拠点支部は壊滅に至り、中にいた数百人近い構成員もまた、その瓦礫の下敷きとなり、この世から去っていった。

だが、白い巨兵は、自らが作り出した惨状を振りかえることなく、帰還の途につこうと……して。

『……今回はやけに対応が早いな、管理局』

後ろを振り向かざるを得ない事態に陥った。

「……！」

「きつさつまあああッ！！」

白い巨兵の視線の先に、二人のA A Aランク魔導師が何処からともなく転送されてきた。藍髪と桃髪の二人は、質素な色のB・Jを構成し、それぞれ杖型のデバイスをヴァーチェに突き付けながら、怒りを露わにしていた。目は口ほどに物を言うとは、このことだろうか？ ふと、そんなどうでもいい疑問が、ティエリアの脳内に浮かびあがる。

「……ロストログイアらしいですが、ここで壊れて下さいお願いしますま

す」

「ここには、400人近くの人がいたのだぞおおおッ!? それを皆殺しにするとは、一体どういう見で……」

『面倒だな。ヴァーチェ、GN転送まで、あとどれくらいだ?』

『あと数分はかかります、マイスター』

藍髪はクールを装っていたが、内心は怒りで煮え滾っていた。桃髪はその言動の通りで、熱血風に叫んでいる。それを鬱陶しく思いながら、ティエリアはヴァーチェの体をその二名の魔導師の方に動かし、

『なら、こいつらを破壊する方が早いな』

その手に持ったGNバズーカを、問答無用に発射した。

【結構じゃないですか。

せいぜい勝手に油断して勝手に自滅してもらいましょう。後から思い知らせてやればいいんですよ。

一体誰を見くびっていたのかと】

——鴨川秕様から、『ブラッディ クロス』の花村より

07・始動する二つの超組織

——新暦71年——

「第54管理世界の活動拠点支部が壊滅したって？　それは一体、何処の冗談ですか？」

「……（フルフル）」

「な、何だってーッ！？　その首振りから察するに、冗談じゃないだつて！？　そんな馬鹿な！　管理局がそこを攻め込んだなんて情報、Meには届いていませんよ！？」

「……（コクコク）」

「え？　昨日壊滅したから、まだそんなに知られていない？　何だ、そうなんですか。……なのに何故貴方はそれを知っているのですか？　ジャンヌ、恐ろしい子……！」

「……（……目、かゆい）」

ひっそりと静まり返っていた通路に、快活な男の声が響く。其方の方に目を向けると、二十代後半ぐらいの男が、9歳ほどの少女と共に、寂れた通路に佇んでいた。少女は一言たりとも声を発していないので、実質、男の声だけが空気を伝って聞こえてくる。

「ぬるぽと言えばガッ！　ぐらいに定番ですが、やはり管理局が攻めてきたのですか？」

「……（フルフル）」

「……では、他に何処が支部に攻め込むというのですか？　どう考えても管理局以外にアソコを落とせるわけがないでしょう常考。まあ、フリーのオーバーSランク魔導師なら話は別ですが……」

「……（コクコク、フルフル、……？）」

「三段活用k t k r。それで、ふむふむ、成程……分かりましたよ、

ジャンヌ！　つまりは、こういうことでしょうか？　管理局以外には無理、されど、オーバーSもまたあり得ない。世界清浄を敵に回して得るメリットがないから。だから今回の襲撃犯は謎である……と！

「……（コクコク）」

「貴方の無口には慣れましたが、それをここまで解読できるようになった自分が恐ろしい……！」

色素が濃い茶色の瞳から零れる涙。それは男の苦労を雄弁と物語っていた。苦節うんぬんと言いつい出しそうな雰囲気である。「ジャンヌ」と呼ばれた少女はその大仰な仕草に桃色のほつたを膨らませたが、特に何も言わずに、その奇態を見続けた。……どうやら面白かった、らしい。何が面白いのかは皆目見当もつかないが。

「しかし、だとすればその謎の襲撃犯は、一体どんな目的で世界清浄に喧嘩を吹っ掛けてきたのでしょうか？　もしかして、世界清浄に勝てるとても夢想していたのでしょうか？　だとすれば、ソイツはとんだメンヘラ野郎ですね」

「……（メン……ヘラ？　よく、分からない）」

「おっと失礼。メンヘラは頭がおかしいという意味です。しかし、本当……誰がこんなことを？」

「……（コクコク）」

ジャンヌの頭が、男の声に同調するように動く。その動作はさながら小動物のように見えなくもなかった。あくまでも上辺だけだが、もしジャンヌの右目に宿りし異能——強力なレアスキルのことを知れば、何人かの内の誰かはきっと彼女に怖れ慄くはずだ。若干9歳で世界清浄の四大幹部にまで成り上がった彼女の異能は、まさにそれだけの規格外な性能を持っているのだから。

かくいう男もまた、そのジャンヌと同格の四大幹部の一人、『オズ』ことモン・ティ・デュークという人物なのだが……その振る舞いからそれを察するのは不可能であろう。

しかし、こんな言葉遣いでも、実力はあのグラハム・エーカーと同等と言われ、さらには、曲がりなりにも管理局の『鬼札』と引き分けたこともある実力者である。つまりは、世界清浄で一、二を争う最強者なのだが……そんな風格は今の彼には微塵も見られなかった。

「ふうむ……後でM eの方からもググらせておきます。ちなみに、ググるというのは「探る」をM eなりに略した単語です。M eとその部下以外には通じないので気を付けて下さい」

「……（コクコク）」

「その素直さ、純朴さ……可憐さ、頂きました！ これで勝つる！ では、また何時の日にか会いましょう、ジャンヌ」

「……（コクコク）」

「くうッ！ 最後まで無口を貫き通すその姿勢……そこに痺れる、憧れるうッッ！」

「……（いつも思うけど……おかしい人。……でも、面白い人）」

立派に仕立てられたスーツを翻しながら、男——デュークが颯爽さっそうと通路を去っていく。デュークの顔は中々に造形が整っているのですが、その潔い去り方がまた一段と彼に似合っていた。もし言葉がまともだったら、もっとカッコ良くなっていただろう。実に残念なイケメンである。

「……（それで……調査のほどは？）」

「は……実はまだ何の成果も……」

デュークが去っていったのとはほぼ同時に、ジャンヌの私兵力でもある「オルレアン・ナイツ」の騎士団長が、通路の陰からジャンヌの方へと歩み寄った。その顔は無表情で、感情を読み取ることではできなかった。最も、それはジャンヌにも言えることだが。

「……（そう。……調査、続けて下さい）」
「了解しました、ジャンヌ様」

騎士団長がジャンヌの目を直視しながらそう答えると、ジャンヌは肩まで伸びた髪をたなびかせながら、デュークとは正反対の方へと歩き始めた。髪の白銀が騎士団長の視界に広がる。騎士団長は純粹にそれを綺麗だと思い、そのせいでジャンヌの後を追うのが遅くなってしまった。急ぎジャンヌの後を追おうとする騎士団長。

「……（……？）」

ジャンヌはそんな団長の様子を不思議がりながら、右目の質素な眼帯に触れ、心中で呟く。

「……（メ、かゆい）」
と。

「こんなもん……かな？」

ユーノ・スクライアは臨海第八空港と第6管理世界、及び第54管理世界に現れた「ガンダム」の情報を無限書庫から収集し、報告書に編集していた。また、ユーノの自室でもある司書長室に置かれた3つの高性能ノートパソコンは、現在もフル稼働で動いており、通常の業務も平時と同等のスピードでこなしていた。

そんな状態で三時間近くも仕事をしていたユーノは、編集作業が一段落ついたことで、ちょっと休もうと考え、気を少しだけ緩ませた。

だから気付かなかった。後ろの方で「ブウン」と、施錠の魔法を解除した音が鳴った事に。

「さて、それじゃあ一休み……」

「ということは、今がチャンスですよ、お嬢様！」

「は、はい、ブレイド！」

「し……よう……か？」

ぎざぎざ……錆びついたような音を立てながら、ユーノはぎこちなく首を後ろに回した。それに合わせるようにして、ユーノの眼前に漆を思わせる瑞々しい黒髪が広がった。嫌な予感が加速度的に増加し、冷や汗が泉の如く湧きでてきた。

そして、そういう場合は往々にして、嫌な予感が的中するものである。

「ゆ、ユーノさん！ これ……私が作ったお弁当なんです、一緒に食べませんかッ！？ 一人ですと食べ切れないのでッ！！」

「ふっ、まさか断るような真似はしますまいな、ユーノ様？ お嬢様が誠心誠意をこめて、朝5時から作ったお弁当を食べたくないなど……そんな真似、この「執事長」たるブレイド「バスターナ」が決して許しませんとも！！」

「……はあ、どうしてこう……。いえ、嘘です！ そんな悲しい顔をしないで下さい、プリウスさん！ あと、バスターナさんも、その般若のような顔を止めて下さい！ お願いします！」

ユーノが溜息をついたことで、大きな菖蒲色あやめいろの瞳が潤い出し、「ひぐっ……やっぱり、迷惑ですよ？ こんな女の弁当なんて……食べたく……うう」という泣き声までが、ユーノの耳にまで聞こえてきた。当然、今年で20歳となるお嬢様の斜め後ろに立つ「執事長」ブレイドからは猛烈な殺気が吹き荒れ、ユーノに対し、巨大な魔力の波動を叩きつけてくる。

これはひょつとしなくても脅迫なのではないか？ そう思わずにはいられないほど、ブレイドの殺気は本気だった。本気と書いてマジと読むほどには、それはガチであった。というかあまりにも本気過ぎて、ユーノは半分意識を飛ばしていた。

「えっと……とりあえず、今お茶をお出しますので、そこにかけ置いて下さい、プリウスさん！ そして、一緒にお昼ご飯を食べましょうええそうしましょう！！」

「……え？ ほ、本当ですか！？ あ、ありがとうございます、ユーノさん！ ……ところで、どうして爺やそんなに殺気立っているのですか？」

「いえいえ、お気になさらないので下さいます、お嬢様。もう爺は殺気立ってはおりませんので」

「そうですか。ならいいです」

この時のユーノは、本当に半分ほど意識を失っていた。多分自分が何を言っているのか、理解してはいなかっただろう。というか、それだけの殺気に気付かないプリウスもプリウスである。恋は盲目と言うが、ここまで来ると寧ろ不安になってしまふ。主にユーノの身の安全や貞操に関してだが。

「（……あれ？　僕は今、何をしているんだ？）粗茶で申し訳ないですが、どうぞ」

「（ユーノさんが淹れられたお茶……！）いえ、あの……ありがとうございます！」

「（くつくつく……全てはこの爺の計画通り！）ささ、お嬢様。次はお弁当を……」

三者三様、それぞれの思惑が交叉する中、プリウスがいわゆる「重箱」の蓋をゆっくりと開けた。一つ一つ、丁寧に慎重に緊張して

ユーノは中身が明らかとなった重箱を覗いて見た。重箱の中には隈なく美味しそうな料理が敷き詰められており、滅多に食に金を使わないユーノにとっては、久しぶりの御馳走であった。思わず喉が鳴り、腹が鳴る。

「今日はユーノさんに師事されて、ちょうど一年という記念すべき日でしたので、少々、張り切り過ぎてしまいました」

「……ああ、そうでした。もうそんなに経ったんですね、あの日から」

「ええ。今ではもう、苦手だった防御魔法もかなり改善されましたよ。これもそれも、ユーノさんの教え方が上手だったからです」

「それはどう致しまして……この煮付けおいしいですね。これ

もプリウスさんが？」

「そ、そうです……美味しそうに食べて下さって、私もとても嬉しいです。沢山ありますので、どんどん食べて下さいね、ユーノさん」

司書長室のテーブルに広がる重箱を突いて、話を弾ませるユーノとプリウス。その様子を見たブレイドは、静かに、本当に静かに司書長室から退出し、後ろ手でそのドアを閉めた。深い皺が刻まれた顔には、満面の笑みが張られていた。実に満足そうである。

（お嬢様は生来より防御魔法を苦手となさっておりますでしたが、ユーノ様のお力添えでそれかなり改善されてきました。まあ、この爺の一撃をも防ぐとは思っても寄りませんでした……）

司書長室の入口前に置かれた椅子に座るブレイドは、何処からともなく彼の弁当を取り出すと、それを急いで食べ始めた。そして、ものの一分で空にすると、もう一度、物思いに浸り始めた。

（お嬢様はミッド有数の資産家、ネッツ家の一人娘です。その婿としてユーノ様を見た場合、能力・性格・地位・ルックス、その全てに置いて、ユーノ様は文句なしに合格です）

物思いに浸りながら、ブレイドは顔見知りの司書と二言三言、何でも無い話をした。マルチタスクは魔導師には必須の技術であり、思考を二つに分割するなど、魔導師にとっては朝飯前のことだ。

（それに、もしユーノ様がネッツ家の婿となれば、最近成長が著しい無限書庫とのパイプも作れますし……何よりも、お館様もお嬢様も、ユーノ様をかなり気に入っておられます）

ユーノとプリウスが結婚する……それはブレイドだけの望みでは

なく、ネッツ家の総意でもあった。「プリウス」という男っぽい名前にコンプレックスを抱き、かなりの人見知りで、人との会話がちょっと苦手なプリウスは、20年も生きてきて、未だに彼氏の一人すら作ったことがなかったのだ。

それはそれで良かったのだが、ここまで浮いた話が一つも上がってこないとなると、ネッツ家の当主であるプリウスの父親も娘の恋模様に不安を抱くようになった。そんな折に、プリウスがユーノから防御魔法を習うと言いだし、しかも様子が明らかにフォーリング・ラブであったとすれば、父親として、娘を応援せずには入られなかった。

かくいうブレイド自身も、プリウスの恋路を応援する一人で、様々な助言をプリウスに与えたりもしていた。その八割方はてんで見当違いな物だが、残りの二割はまともな物なので、プリウスは未だにその助言全てに効果があると信じ切っていたりする。

(……爺も、早くお嬢様のお孫を抱いて見たいのであります)

次元世界でも例を見ない、オーバース同士からなる最強の主従コンビ。その両方がまさか色恋沙汰に現を抜かしているなど、恐らく世界の誰もが予想だにしていなかっただろう。

その幸せな日常がいつまで続くのか……それは誰にも分からぬことである。だが、この時の二人は、きつと幸せだったに違いない。

例え、不吉な影がすぐそこにまで迫っていようと、プリウスとブレイドは、きつと……幸せ、だったのだ。その事実だけは、絶対に……消え去りは、しない。

【少年は叫ぶ。

しかし誰もその言葉に耳を貸そうともしない。

それでも少年は叫ぶ。

”狼が来たぞ”と……】

——EXAM様より

08・蠢く闇部と絡まる想い

——新暦71年——

真つ暗闇の中、三つのモノリスが空中に浮かび上がる。モノリスにはそれぞれ「評議員」「書記」「評議長」の文字が書かれ、端には「Sound only」の文字が踊っていた。

モノリスの一つが喋る。

『コードネーム「U・D」による『計画』は今のところ順調か……レジアスの坊やも扱いやすくなったことだし、今のところ、全ては我らのシナリオ通り……か？』

電子に変換された音声。とても肉声とは思えない音声。低く響く音声。

『ああ、そうだ。この所世界清浄も大人しいし、特に議題として取り上げるようなことは、もう無いだろう』

さっきまでのとは違うモノリスが喋り出す。深みのある声、到底人間の出せる声ではない。

『待て、議題はもう一つあるだろう。最近頻繁に現れるようになってたという「未確認機械人形」についてだ。無限書庫司書長であるユーノ・スクライアが言うには、最低でも四機、オーバースクラスのロストログアがあるそうではないか。その対策を今、話し合わなければなるまい』

最後に残っていたモノリスの、物々しい声質。思わず身を竦めてしまいそうな声質だ。雷鳴のように轟く声が、会議室と呼ばれる空間に響き渡る。

『確かに、それに対する対策も決めておかねばなるまい。して、それらのロストロギアは本当にオーバースなのか？ 報告ではAAAランク魔導師二人を相手に勝っただけだそうだが……それだけでは到底、オーバースクラスとは言えんぞ？』

『ならば、本当に機械人形がオーバースかどうか、確かめる必要があるな。……確かあのクラウンIIガバレートの兄であるレクスIIガバレートが本局にいたはずだ。奴をこの「ガンダム」というロストロギアに当ててみるのが得策ではないか？』

『異議なし』

『異議なし』

『では、そうするでしょう』

最高評議会の議員である三人の了承を得たこの議案は、恐らく明日には実行に移されているだろう。ただ、問題なのは機械人形がどこに現れるかだが……ユーノ曰く、機械人形こと「ガンダム」は紛争地域か、もしくは管理局や世界清浄の基地に現れるとのことなので、そこに狙いをつけることとした。

また、「ガンダム」は探査魔法や念話を使用不可にすることから、第10管理世界で起きている紛争に焦点を当てて、大規模な探査魔法をその紛争地域に展開することとする。それによりいち早く「ガンダム」の位置を使用不可となった地帯から割り出し、逃走するよりも早く一機だけを囲い込んで、そこにレクスIIガバレートをぶつける。

『では、後は結果を待つのみ……大規模な探査魔法は、ちょうど今

手が空いてるプリウス〓ネットに任せるとしよう」

『それだとネット家が五月蠅くなりそうなものだが……他に適任者がいないのも事実。致し方あるまいて』

『いや、心配には及ぶまい。プリウスの任務はあくまでも「ガンダム」を探し出すこと。罷り間違ってもレキスの援護が任務なのではない。恐らくは傷の一つも負うことはなかるうて』

新たに浮上した議題が終わり、各々のモノリスが談笑し始めた。

そして、それが30分ほど続いた後、最高評議会のメンバーたちは自分達のメンテナンスのため、通信を切った。さきほどまで三人の話し声でざわめいていた会議室が、一気に静かになった。

「ふむ、あの三人は脳だけとなった今も変わらず。実に人間臭い、いい指導者」

そんな会議室の中央、真っ暗やみの中に、白い服装を着た一人の青年か少年かが、文字通り、足元の白い魔法陣から浮かび上がった。その人物の顔にはこれまた白い仮面がかけられており、全身が正に白尽くめであった。

「だが、年月は残酷。昔にあった正義感は、どうやら薄れた模様。最も、そうでもないかと平定など夢のまた夢……実に正しいことを、彼らはしているとも言え」

全身真っ白な青年か少年。その独白は暗闇の会議室によく響いた。高いような低いような、少年のような青年のような声が、部屋一杯に反響する。

「それに、彼らには恩あり。吾輩のロードを造ってくれ、またそのロードをあそこに配置してくれたのには、感謝してもし切れず。…

…これもまた、運命の導き？ それとも、アカシックレコードをなぞって？」

真っ白な人物は、所々を不自然に切りながら、言葉を紡ぎ続ける。それを聞く者はいないし、聞けたとしても理解できるのは最高評議会の三人だけだろう。だからこの独白に意味はない。仮にあったとしても、意味がないことこそに意味がある。

仮面を被った人物の独白は続く。

「どちらにせよ、吾輩のロードはもうじき「あそこ」の深淵に到達する。その時こそ、吾輩は真なるロードを得ることが可能。ユニゾンデバイスたる吾輩の、真のロードが……！」

嬉しそうに、そして狂気を撒き散らすように。

「……その時を楽しみ待っている、吾輩は」

そう言っただけの人物は、魔法陣へとその身を沈みこませていった。完全に沈みこめば、そこには再びの静寂が戻ってきた。

この行為に意味はない。あるとすれば、意味がないことこそに意味がある。ただそれだけのこと、それだけのことなのだ。

無音にも等しいこの独房に、カッソーカッソーと、硬質な足音が聞こえてきた。人数は二人か三人ぐらいで、恐らくは何処の高官とその秘書たちだろう。

「……なんだ？ 遂に弟を釈放する氣にでもなったのか？ ……いや、それはないか」

四方が合金の壁で囲まれている独房室は、空しさを感じるほど、何も無かった。生活感を感じられるのは、片隅にひっそりと置かれている布団のみで、それだけが唯一、ここに人が住んでいる事を証明していた。

殺風景な独房室。そこに備え付けられた椅子に跨またがっている人間がいた。その人物こそが、数少ないオーバー・Sランク魔導師の一人、レクス・ガバレート本人であつた。

レクスはタイトミたいな囚人服を着て、無精髭を顎などに生やしていた。パツと見の容姿はそれほど悪くないが、独房の環境が悪いせいか、今は薄汚れた大人にしか見えない。緋色より色相の薄い浅朱の瞳は半ば閉じられており、とても眠たそうに見える。

「ふわぁ……面倒臭そうな匂いがするな。ま、それもまた何時ものこと……汚れ仕事には付き物だわな。……ふわ」

欠伸を噛み殺すレクス。彼の独房に通じる隔離用の扉が左右に開く。それが彼の運命を決定づけるとは知らずに、レクスはその運命を眠たそうに受け入れた……

「で、弟の刑期は短くなるんだろうな、お偉いさん方？」

一年前、プリウスⅡネットスはオーバースの認定試験で、防御魔法のあまりの稚拙さ故に、不合格とされてしまった過去があった。それを受け、プリウスはその後一週間ほど防御魔法を自己だけで磨いてみたが、それもすぐに限界がやってきた。

元々、プリウスには防御魔法の才がこれでもかというほどに欠落していたのだ。補助魔法や攻撃魔法にはずば抜けた才能を発揮するのに、防御魔法だけは何時まで経ってもからつきしだった。どれだけ努力しようとも、その努力はただ空費していくだけで、何の効果も上げることが叶わず、それに涙を飲む日々がその後、一ヶ月ほど続いた。

その時に、彼女の執事長であるブレイドから紹介されたのが、ユーノ・スクライアであった。あの白い悪魔の砲撃を受け止めることができる、というのが紹介された理由の一つであり、もう一つが、堅牢で知られる白い悪魔の師であったからだ。

実際、ユーノは防御魔法に関してはかなりの才能を持っていて、また教え方も上手で、プリウスは防御魔法を鰻上りうなぎのぼに上達させるこ

とができた。それのおかげでオーバースの再試験にも受かることができ、ブレイドを泣かせるほど喜ばせることができたのも、今では良い思い出である。

「ユーノさん。ユーノさんはレクスⅡガバレートという方を御存知でしょうか？」

「レクスⅡガバレート？ ガバレートって、あのガバレート三兄弟の？」

「はい。……恐らくはそのガバレートで間違いはないかと」

プリウスはユーノの問いに答えつつ、手元にある抹茶ラテを一口啜^すった。程良い苦味が口内にふんわりと広がって、プリウスの表情が柔らくなる。ユーノは笑顔を浮かべるプリウスから視線を外しつつ、資料を手繰り寄せ、レクスに関する情報を目の前のモニターに提示した。

「レクスⅡガバレート。二十代後半でオーバースランクに昇格しながら、弟のクラウンⅡガバレートの不祥事により独房入りを余儀なくされた、不遇の魔導師。なお、クラウンⅡガバレートの不祥事は、一年戦争にて味方のオーバースを二人も殺したもので、その中には彼の妹であるプレミーⅡガバレートも入っており、何故そのような行為に至ったのかはいまだ定かにされていない……まあ、彼に関する情報はこのぐらいかな？」

モニターに羅列する文字を、ユーノは丁寧に読み上げた。プリウスはその説明に頷きつつ、言葉を足す。

「はい、その通りです。そして、私は今度の任務で、そのレクスⅡガバレートなる人物と就くことになりました」

「……へえ。それはまたどういった経緯でそんなことに？」

「私にも分かりません。しかし、そんな犯罪者一步手前の人と任務に当たるなど……」

プリウスは箱入り娘といってもいいほど大切に育てられた純真な人間であり、そんなプリウスからすれば、独房に入っているレクスIIガバレートなど、同じ局員とはいえ、犯罪者同然にしか見えなかった。ユーノはプリウスのそんな心境を察しつつ、裏ではプリウスの今回の任務についての情報を蒐集していた。

（これは……最高評議会は「ガンダム」の力量を確かめるために二人を？）

「大丈夫だよ。レクスIIガバレートは結構優しい性格らしいから、多分君の想像しているような粗暴な人じゃないよ」

「ユーノさんがそう言うのでしたら、そうなのかもしれません……」

（……何だか騒がしくなってきたね。聖王教会にも世界清浄にも何かしらの動きがあるみたいだし……特に世界清浄は「Mark-X」なんて量子演算処理システムの構築を急がせているようで、戦争の準備もやっているからなおのこと、キナ臭い）

普通に会話をしながら、ユーノは頭の中の情報を整理する。無限書庫が蒐集した情報はそれこそ無限で、限りなどは始めから存在しない。頭を圧迫するような情報の津波がユーノの脳に大波を立てるが、それをマルチタスクで流れるように処理していく。

「とにかく、レクスIIガバレートについては大丈夫だろうから、プリウスさんは任務の方に集中して下さい。オーバースを二人も動員するような作戦ですから、相当難しい任務のはずです」

「それは……私も分かっております。ですから、ユーノさん。これに……」

すっ。プリウスは何か書かれた紙をユーノに差し出した。ユーノは情報を捌きつつ、それに視線を落とし、

「実印を……押して下さいまし」

「……って、これってここに、婚姻届じゃないですかッ!？」

反射の速度で絶叫した。

「もしこれがユーノさんとの最後の会話かと思うと、私はもう……!」

「いえいやあのちよつとちよつと待って下さい!?!?いきなりですし急ですし突然ですしでああもう自分でも何を言っているのか……」

何時もは垂れている目尻が、今ばかりは覚悟の強さを示すようにつり上がっていた。唇は一文字に引かれ、眉も目尻に同調するようにつり上がっている。頬はほんのりと桃色に染まっており、両手は胸の前で握り締められ……

（落ち着け、ユーノ! 僕には彼女がいるだろう!? それに、こういう場面でこういった約束をするのは、確か死亡フラグ……だったような気がする!）

……あわや陥落しそうになる可愛らしさが、今のプリウスにはあった。ユーノはギリギリの線で立ち止まりつつ、プリウスの顔から視線を外し、その肩に両手を置く。

びくっ!

肩に手を置いた際にプリウスの小柄な体が小さく震えたが、それ
を無視してユーノはプリウスへと語りかけた。……心中にわだかま
る謝罪の念すらも、同じく無視する。

「……プリウスさん。前にも言ったけど、僕には「分かりました」
……え？」

だが、さしものユーノもまさか自分の言葉を無視されるとは思わ
なかっただろう。ユーノの目が点となった。プリウスはユーノに背
を向けながら、今にも泣きそうな声で、

「今はそれでいいんです、今は。……予め言っておきますが、私に
は諦めるつもりなんてちっぽけたりともありませんので、ユーノさ
んもその心持ちでいて下さいッ！」

そう宣言し、そして飛び出すように司書長室から出ていった。そ
の小さな背をユーノは、ただ茫然と見送ることしかできなかった……

【正義とは貪欲な神に似ている、次々といけにえを要求して飽くこ
とを知らない】

——EXAM様から、『銀河英雄伝説一巻』のジョアン・レベロ
より

09・銃鬼魔人剣鬼囚人

——新暦71年——

綺麗事では、世界を変えられない。

それは、幼い時に思い知った理の一つだ。

この手を血で染めなければ、仇を取れない。

それを、厳然たる事実として、思い知らされた。

だから、オレはこの手を血で染める。どれだけこの手が真っ赤になろうとも、世界を変え、家族の仇を取るためなら、オレはこの手をもつと人の血で染めてやる。

それがオレの、「ガンダム」という絶対的な武力を振るうモノとしての……覚悟だ。

デユナメスが右手に持ったGNスナイパーライフルで、第54管理世界にやってきた管理局の調査団を狙い撃つ。桃色の光線が調査団の直前に撃ち込まれ、土埃をあげる。たったそれだけで調査団のメンバーは蜘蛛の子のように散り散りとなり、戦場となり得るそこから撤退しようとする。

『やけに聞きわけがいいじゃないか。どういう心境の変化だ、こりや？』

『……Meister、気をつけろ。これは何かあるぞ』

『ああ、そうだな。Eセンサーに反応は？』

『……今のところ、それらしきものは見当たらない』

あまりにもあつさりといき過ぎることに、ロックオンが嫌な予感を抱いた。そして、その予感は……実に正しいものであった。

『……いや、10時の方向、距離300に反応があるにはあるが……』

『……一つだけだな』

『一つだけだと？……ますます嫌な予感がするぜ。まさかオーバーSじゃないだろうな？』

『……魔力量を計測する。魔力量……』

構えられるスナイパーライフル。黒光りする銃口が、藍色の見たことのないM・Sを捉えた。そのM・Sはロックオンされているにも関わらず、こちらに悠々と向かってきている。

その様子に正気を疑っていたロックオンは、しかし、デユナメスの次の言葉を聞いて、頭を完全に戦闘モードに切り替えた。

『……オーバーSクラス！』

デユナメスがスナイパーライフルのトリガーを迷いなく引く。桃色の光線が寸分違わずに、M・Sの防護ヘルメットへと向かっていく。ロックオンはその射線を見て、当たることを確信して……

『『んなっ！？』』

次の瞬間に、その確信を覆された。

「ハッハーッ！　いい腕じゃねえか。ええ、「ガンダム」さんよーッ！」

獰猛な声が、デユナメスの射撃を半身になることで避けたM・Sから聞こえてきた。ロックオンは自分の狙撃が当たらなかったことにショックを受けたが、もう一度藍色のM・Sに狙いを合わせると、トリガーをもう2、3回ほど、連続して引いた。

「おおっと、危ねえ危ねえ。こりゃあオレも本腰を入れてやらねえと……な！」

藍色のM・S——『ヴェーダ』によるデータ照合の結果、管理局の試作M・S「イナクト」だと判明——がデユナメスの射撃をまたもや避ける。そして、その速度をさらに上げ、デユナメスへと肉薄してきた。互いの距離はすでにミドルとクロスの間만에埋まっ
ていて、お互いの姿を肉眼で捉えることができる。

『オレが何度も外しただとツ！？　コイツ、何て反射神経してやがるんだ！　デユナメス、サーベルを準備しておけ！　ハ口はピストルを！』

『……Yes , me i s t e r』

『リョーカイ、リョーカイ!』

デュナメスの必中を誇っていた一射。それが悪夢の如き連射でもって放たれる。対して、藍色のイナクトはそれを軽々と、曲芸師みtainな動きで全弾を回避する。

「ちよいさーッ!」

『また避けやがったッ!? コイツの反射速度は尋常じゃねえぞ!』

イナクトの動きを捉えられないロックオン。そして、遂には手が届きそうな距離にまで迫られてしまう。

「お返しだ、野郎ッ!」

頬のセンサー素子を光らせたイナクトが、デュナメスのボディに鋭い蹴りを放つ。デュナメスは後退してそれを避けるも、その動きを読まれ、イナクトの右手に握られていたブレイドライフルによる弾雨をまともに喰らってしまった。

幸いにして、デュナメスの装甲を削るほどの威力はなかったが、それでもBかAクラスの威力があり、それを面上にばら撒けるだけの魔力量があることに、ロックオンは驚きを隠し切れなかった。

「もらったああああ!」

『させるかよッ!』

イナクトが右手のライフルの刃部で、態勢を崩しているデュナメスへと斬りかかる。デュナメスは即座に両手で持っていた長銃を投げ捨てると、今度はその両手に、尻部の双発式の推進機に備え付けられていたGNビームサーベルを握り、それでイナクトの斬撃を受

け止めた。

「ああん？ コイツ、剣もあるじゃねえか！」

『オレに剣を使わせるとは！ だが、たかがM・Sのイナクトに！』

イナクトとデユナメスは互いの目を覗きこみながら、互いの剣で切り結ぶ。均衡が僅かな間、両者の間に広がる。しかし、力比べでは生身のM・Sよりも機械の「ガンダム」の方に比があり、徐々にだがイナクトが押し込まれていく。

「コイツ……なんてえ力だ！ これが管理局でマークされ始めた口ストロギアの力つつうわけか！」

力比べを不利だと感じたイナクトは、一旦デユナメスから離れるために、切り結びを解いて後退した。その隙に両手のサーベルをGNビームピストルに持ち替えたデユナメスは、そのまま両手のピストルを構えて、

「ところがぎつちゅん！！」

『んな、なんだその動きはッ！？ サーカスかつつうの！』

左手に持っていた方を、イナクトのアクロバティックな後ろ回し蹴りによって、取り落としてしまった。

「ちょいさー！」

『クッ！』

デユナメスが残った右手のピストルをイナクトに向けるが、その頃にはもうイナクトは片足を地面につけており、その足を軸にした蹴りを、今度こそデユナメスの胸部に叩き込んだ。

『蹴りを入れやがったな、こんにやる!』

「うおッ!? いてえ!」

イナクトの細い足からは想像もできないパワーで蹴り飛ばされたデユナメス。地面を荒々しく削りながら、数十メートル先にまで飛ばされていく。景色が後ろに流れていく……中、デユナメスは技後硬直しているイナクトへとピストルを向けると、勝ち誇って余裕の表情を浮かべているであろう頭部へと、桃色の光弾を撃った。

イナクトは人並み外れた反射神経でその攻撃に反応し、左腕のローターの形状をしたディフェンスロッドでもってそれを防ごうとしたが、光弾の威力が強すぎて、ディフェンスロッドは粉々に破壊されてしまった。その破片が顔面を襲い、イナクトの魔導師に痛みを感じさせる。

『何だこいつは……へたすりゃオレよりも技量が上なんじゃねえか?』

「……とんでもねえな、こりゃあ。ああ、こりゃとんでもねえなあおい!」

デユナメスとなっっているロックオンが、イナクトの強さに驚愕しているのに対し、イナクトの魔導師は逆に、デユナメスの予想以上の強さに狂喜していた。再び若干の距離を置き、対峙する二機。実力が伯仲しているので、勝負は早々には終わらない……

かと思われた。

「……やれやれだぜ。こんなに楽しくなってきたつつのに、調査団の撤退が完了したから撤退しろだなんて、本当……ついてねえな」

イナクトは突然そうばやくと、血色のベルカ式魔法陣を足元に展開し、飛行魔法を発動させた。そしてそのまま空にまで上昇し、ここから飛び去ろうと、デュナメスに背面を見せる。

『……どうする?』

『……撤退なら享受すべきだと進言する』

デュナメスに背面を見せたイナクトは、そのまま青空が広がる大気圏内へと進んでいった。数瞬もしない内に、イナクトの藍色のスイーツが見えなくなる。それを完全に見届けるまで、デュナメスはその場から動きだそうとはしなかった。

地面に落ちた一丁だけのピストルが、ロックオンにはこの勝負の勝敗を明暗に指し示しているように思えた。

『……Meister、今『ヴェーダ』から照合データがきた』

『そうか。それで、ありや一体どこの魔導師だったんだ?』

『……『ヴェーダ』によれば、先程のイナクトは管理局が聖王教会に譲渡したものらしい』

『……何? 聖王教会だと?』

『……ああ。そして、そのパイロットだが……』

デュナメスが珍しく口ごもったことを気にしつつ、ロックオンは「聖王教会」に抱く怒りのまま、その先を促した。

『……パイロットの名はアリー・アル・サーシェス。聖王教会随一の戦争屋で、「傭兵王」とも言われるS+ランクのオーバーSランク魔導師だ』

デユナメスの報告を聞いて、ロックオンは死ぬほど後悔した。あの場で奴を、アリー・アル・サーシェスを討てなかったことは、ロックオンにとっては万死に値する失敗だった。皆の、家族の仇であった奴を……ロックオンは、討つことができなかった。

『クソおおおおおおおおおッ！！』

その遠吠えは、敗者のものではない。それは悔恨からなる……悲痛な叫びであった。

第10管理世界に到着したレクスⅡガバレートとプリウスⅡネッツは、目の前で行われる悲惨な紛争を目にし、顔をしかめた。普通のように殺傷魔法が使われ、質量兵器も使われるその戦場は、彼らにとって、とても正視できるようなものではなかった。

「では、プリウス殿は広域探知魔法をお願いします。レクス殿は戦闘の準備を」

「……了解」
「……了解」

二人の前に立つ指揮官——知的な印象と目元の泣き黒子が特徴的なカティ・マネキンが、二人に冷静な指示を出す。しかし、カティ

とて、子どもが兵士の駒として使用されるこの紛争を直視することはできなかった。今もまた、子どもが爆弾を抱えて自爆し、敵兵にダメージを負わせようとしている。

「あの、マネキンさん。この紛争を止めることはできないのですか？」

「それは出来ん。もし管理局が介入すれば、この紛争はさらに過熱し、さらなる犠牲者を出すだろう。それを防ぐためにも、我々はこの紛争に介入してはならん」

「ふわあ……相も変わらずまどろっこしいな、管理局は。ま、それが世界の管理を担う組織の宿命って奴かね？」

銃撃音と爆発音、魔法が炸裂する爆音などが三人の鼓膜を激しく揺さぶってくる。地面から振動が伝わり、戦闘の激しさを雄弁に物語っていた。

「……探知魔法を発動させます。結界はどうしますか？」

「結界は必要ない……とのことだ。オーバースが戦うというのにな」「そりゃそうだ。オーバースの力を見せつけることで、この紛争の熱を冷ますのも狙いの一つだからな。それはマネキン大佐、アンタも十分分かってるだろ？」

「……」

薄めの紫である菖蒲色をした魔力が、プリウスの体から迸る。それと並行して探知の波動が戦場を駆け回った。捉えるべき情報は探知の空白地帯であるので、広域であればあるほど、その空白地帯を認識し易い。プリウスは数十キロ単位を探知しながら、その空白地帯を探る。

およそ数十キロ——数十キロ範囲で展開された探知魔法。それがす

ぐに本来ならあり得ないはずの反応を捉える。ぽつかりと空いた空白地帯を、プリウスは確かに捉えたのであった。

「発見しました。恐らくはこの地点で間違いないかと……」

「ご苦労だった、プリウス殿。では、レクス殿。ここから先は、貴公に任せる。……相手が貴公と同格かもしれないということを、努々、忘れるなよ」

「オーライ。じゃ、行ってくるわ。ふわあ……ああ、ねみいねみい」

欠伸をしながら空白地帯に飛び立つレクス。デバイスは専用の物ではなく、一般の支給物しか与えられていなかったが、それに落胆の色はない。銀色の装甲がつけられた青基調のBJを纏ったレクスは、足元に青紫色のミッド式魔法陣を展開しつつ、詠唱を滑らかに唱え、杖型デバイスの先端に魔力を収束させる。

「さて……相手には申し訳ないが、初手から全力で行かせてもらう。グラヴィティバスター！」

収束された魔力が、光りすら呑み込む黒い光条となって、探知魔法の空白地帯であった戦域に叩き込まれた。鼓膜を破りそうな轟音が唸りを上げ、分厚い地層が冗談みたいにくれ上がる。天空に舞い上がった粉塵が太陽の光りを遮り、一時的な夜までも造り出した。

「……初手から行き過ぎたか？ ま、これならさすがに生きては……って」

砲撃魔法の一種であるグラヴィティバスターを放った際に生まれた余剰魔力を蒸気のように吐きだすデバイスは、しかし、敵がまだ

存続していることをレクスに伝えてきた。それも、大したダメージがないという。

「そんなに甘かないか……やっぱりな」

レクスが見つめる先で、視界を狭める粉塵の中から、トリコロールカラーをした機械人形が、歩きながら現れてきた。若干青が多い気がしたが、その全身は尋常でない量の返り血で真っ赤に染まり、銀色の大剣もまた全身と同じくらい、真っ赤に染まっていた。

それを見たレクスは寒気を感じながら、デバイスの矛先を機械人形に向け、こう言い放つ。

「さて……では、弟の刑期を短くするためにも、早々に壊れてくれよ、「ガンダム」」

自分が相対しているロストロギアらしき物体が何なのか……それを理解しないで、レクスは罪を犯した弟のために、「ガンダム」へと勇ましく踊りかかった。それを「剣士」——エクシアは、両手に剣を構え、万全の態勢で迎え撃つ。

二人のオーバーSが衝突する音が、数キロ離れたプリウスとカティのところにまで聞こえてきた。

それは、長い長い戦いの……始まりでもあった。

【戦場は大いなる牢獄である。いかにもがいても焦っても、この大いなる牢獄から脱することはできぬ。】

——ダイモン様から、田山花袋『一兵卒』より

09・銃鬼魔人剣鬼囚人（後書き）

もしかしたら、来週の更新はスピノフだけかも……？

10・決着

——新暦71年——

いつしか、空には暗澹たる雲が広がっていた。ポツポツ、ザーザーと、雨が降る勢いを増していく。それはやがて土砂降りのような雨に変わり、周りの風景を一変させた。

『ハアツハアツハアツ……！』

土砂降りの中、密林の中に立つ「ガンダム」エクシアは、ヒビの入った右手の大剣を握りしめ、目の前で横たわる40歳手前の魔導師をジッと見つめていた。データ化された刹那の意識は、今までの激戦のせいか、荒い呼吸を再現していた。

『ハアっハアっハアっ……やった、のか？』

目の前の魔導師とエクシアは、つい先程まで、互いの喉笛を喰い合うような死闘を行っていた。エクシアの体には大小無数の損傷があり、立っていられるのも不思議なほどの損壊を全身に受けていた。その傷が戦闘の激しさを暗に語っている。

『一応生命反応はありませんが、油断はできませんね』

『……そう、か』

大破寸前にまで中破したエクシア。だが、その代わりに、エクシアは目の前の魔導師——レクスⅡガバレートの命を絶つことに成功していた。オーバーSであるレクスⅡガバレートの最大魔法、グラヴィティホール——極小のブラックホールを生み出す魔法には驚き

を禁じえなかったが、エクシアはそのブラックホール諸共、GN粒子を纏わせた大剣でもって、レキスを切り裂いた。

結果としてソードに大きなヒビが入ってしまったが、オーバーSを自力のみで殺害した喜びが、刹那にそれを忘れさせた。四年前には平均的な魔導師にも勝てなかった刹那が、今ではどうだ？ 魔導師の頂点と言われ、最強の生体兵器として恐れられているオーバーSを相手に、見事な勝利を^もぎ取っているではないか。

このレクスIIガバレートなる人物は、次元世界で畏れられるオーバーSに足る實力を持っていた。だが、刹那はそれを上回る武力でもって、彼を殺した。實力で彼から勝利を得たのだ。それに喜びを感じないと言えば嘘になる。それだけ、刹那にとってこの戦闘は大きな意味を持つものだった。

故に、これが刹那にさらなる「ガンダム」神話を信じさせる要因となる。「ガンダム」は『神』であり、『神』は紛争を根絶させることができる……刹那はそう信じて止まなくなる。

それがどれだけ浅はかで、浅慮な考えだったのか……それを刹那は、まだ知らない。刹那はまだ、この世界の闇の一端にすら触れていないのだから。

……それを思い知る日は、すぐそこにまで迫ってきていたが。

『……』
『……』

エクシアはオーバーSの骸をそこに残したまま離脱し、今は密林ではなく、蒼々たる大海の上を飛行していた。レクスに付き添っていたもう一人のオーバーSは、レクスが敗れるとすぐに撤退し、戦闘となることはなかった。それに安堵を覚えたのは、果たしてどちらか？

なお、エクシアの損傷は太陽炉の自己修復機能により、普通に動けるくらいには回復していた。

『……マイスター。先程のオーバーSは、どうして最後に弟や妹の名を言ったりしたのでしょうか？ エクシアには全く理解できないのです。』

『……資料によれば、ガバレート兄妹はかなり仲が良かったらしい。だからだろう。』

『だからだろうって……エクシアはまだ理解できていないのですが？』

『……Yes, master。口を閉ざします。』

今にも水平線に沈みこんでいきそうな夕陽が、空も海もエクシアも、その荘厳な橙色に染めていく。一様にオレンジ色となった風景の中を、エクシアは無言で飛び去っていく。

不意に、刹那は思いだした。あの日の夕陽を、初めて『神』を見たあの夕暮れ時を。あの日もちょうどこんな感じに染まっていたなと、刹那は頭の片隅で思考する。思考する……

——ピピッ！

『！？』

刹那とエクシアは突然鳴ったEセンサーの警報に身体を固くした。しかし、その捉えた反応をすぐさま確認する。Eセンサーはこちらに向かつてくる一機——M・Sのフラッグを捕らえ続け、先程からずっと警鐘を鳴らし続けている。

『マイスター、このフラッグは……！』

『ああ、分かっている！ まさか、こんな所で出逢うとはな……！』

A・Iのエクシア、人間の刹那がフラッグの型番を見て、揃って苦々しい声を出した。このフラッグは『ヴェーダ』に照合するまでもなく、間違いなくあの……

「初めましてだな、「ガンダム」ッ！！」

あの、世界清浄最強と目される『エース』、グラハム・エーカーのモノであつたッ！！

『クソッ、厄介な奴に！』

『無駄口を叩かないで下さい、Meister！ 敵はあのグラハム・エーカーです！ 今のエクシアでは、到底駆逐することは……』
「早速で悪いが……まずは手土産に破片の一つでも頂く！」

空色の機体を上下左右に動かし、エクシアに猛進していくフラッグ。M・Sで最高傑作機とまで言われたそのスーツは、エクシアに近い機動性でもって空を駆ける。

空の王は自分なのだと、そう証明するかのように。

「喰らえ！」

フラッグは腰に下げていた魔導ライフルを左手に持ち、エクシアへと魔力弾丸を放った。エクシアに真っ直ぐ突き進む魔力の弾丸は、大気圏内でも十分な威力を持っていた。しかし、エクシアはそれを脇の後ろから抜いたGNビームサーベルで易々と切り裂く。

だが、その合間にフラッグはエクシアの眼前にまで迫り、腕を伸ばしてきた。

「あれを斬るか！ ならば、これはどうだッ！」
『クッ……！』

魔力で強化された握力で、エクシアの顔面と肩部に掴みかかるフラッグ。装甲の軋む音が、刹那にも聞こえてくる。耐久ゲージが危険を示すレッドに突入し、金切り声を上げ始める。

だが、それ以上に。

『……オレに』
『……Meister?』

刹那は怒り狂っていた。自身に触れた、目の前のフラッグに対して。

『オレに……触れるなッ!!』
「何ッ!?!」

その怒りに身を任せ、エクシアが力づくでフラッグを引き剥がし、サーベルを一文字に振るった。それはフラッグの左手にあった魔導ライフルを二つに割り、フラッグを後退せしめた。

後退させられたグラハムは、しかし、「ガンダム」の想定以上の性能を目にして、何故か歓喜で打ち震えていた。その尋常でない様子に、憤怒のエクシアですら、思わず動きを止めてしまう。

「まさか、これほどまでとは……口惜しさが残るが、ライフルを失ってはこれ以上の戦闘はできません。始末書を書かねばなるまいしな」
『……?』

「聞こえるか、「ガンダム」! 私の名前はグラハム・エーカー!」

動きが止まったエクシアに、グラハムは突如声を張り上げた。あまりにも突然過ぎる奇行に、エクシアと刹那、両者の思考がフリーズする。それを知らずに、グラハムはエクシアに心からの言葉を贈^{そう}呈する。

「君の存在に……心奪われた男だッ!!」
『なっ……心を奪われただ?!? ど、どうということなんだ、エクシア!?!』

『え、エクシアにも分かりません! ですが、もしMeisterに対して言ったのなら……グラハム・エーカーはガチホモだったということ……!』

HENTAIチックな言葉に戦慄し、完全に凍りつく刹那とエク

シア。それを無視して、グラハムは自らの母艦がある方向に身体を向け、

「再び戦場で相見えるその日まで、私のことを忘れるなよ、
「ガンダム」！」

来た時と同じように、勢い良く飛び去っていった。残されたエクシアと刹那は、グラハムに言われた言葉にただ呆然とし、再起動するのにも数分も要しなければならなかった。

『な、何だったんだ、奴は？ 一体、何を言っていたんだ……？』

グラハムはどうやら、レクスとは違う意味で、刹那に大きな衝撃を与えたようだ。それが良い事なのかどうかは……言う必要はないだろう。

……キュリオスのガンダムマイスターであるアレルヤ・ハプティズムは、深い溜息を零さずにはいらなかった。手に持っているのは作戦データを内蔵している情報端末で、その情報は彼にとっては禁忌に触れるものであった。

「……僕は、どうしたらいいんだ？」

『決まってるだろ、アレルヤ。オレ達は「CB」、紛争を根絶するモノ共だ。そんなオレ達がやるべきことはただ一つだけ。それを実行に移すだけだろうが』

「ハレルヤ。だけどこれは……これじゃあ余りにも、彼らに救いがないじゃないか……！」

『救い？ オレ達超兵にか？』

「ああ、そうさ。超兵にだって、救いは必要なんだ。……必要なんだよ、ハレルヤ」

情報端末に収められている情報は、『ヴェーダ』が世界清浄のホストコンピュータにハッキングをして見つけ出してきた物だった。その情報とは「超兵」に関する情報で、それによれば、今現在も「超兵」に関する研究は途絶えていないという。

『救い……ねえ。オレには殺してやることこそが「超兵」にとつての救いだと思うけどなあ』

「違う！ 彼らにだって戦う以外の選択肢はあるんだ！ 彼らは人間だ。彼らは僕達の同胞なんだよ！ それを殺せっていうのか、君は！」

かつて、「E」計画というモノがあった。それは「超兵」を生み出す計画であり、「超兵」とは脳量子波による超反射能力を身に付けた「兵士」——「兵器」である。かくいうアレルヤも、この「超兵」という強化人間であり、「E」計画の犠牲者である。

『ああ、そうさ！ 殺すんだよ！ 殺すしかない！ 奴らは遅かれ早かれ、戦争に参戦する！ オレ達「超兵」には戦う以外の術がないからなあ！ そして、いつかはオレ達を殺しに来るぜ、何処かの組織にいいように使われてなあ！』

「……ッ！」

アレルヤは二重人格者であり、もう一人のアレルヤはハレルヤという。ハレルヤはアレルヤとは正反対に狂暴な性格で、「E」計画を潰す為に、「超兵」を皆殺しにしろとアレルヤに囁いてくる。しかも、その理論はアレルヤの自論よりも遥かに正論であった。ぐうの音すら出てこない。

『どっちにしろ、オレ達がこのミッションすべきことは一つだけだろうが！ 目標をブツ潰す！ ただそれだけをすればいいんだ！ 簡単な任務だろう、「超兵」であるオレ達にとってはなあ！』

「……戦争補助になり得ると断定された「E」計画。それを潰すことが「CB」の理念であることは、僕にだって理解できるさ。だけど、それでも僕は彼らを、同胞を殺したくはない！」

だが、例えぐうの音が出なくても、アレルヤはこのミッションに異を唱えていた。今回のミッションは世界清浄側の「超兵」研究機関を潰すことであり、それは「E」計画の根幹を潰すことに繋がる任務でもある。

しかし、それは同時に彼らの同胞を討つことにも繋がる任務である。それはアレルヤにとつて、とても許容できることではなかった。心優しいアレルヤは、自分の矛盾に気付きつつも、もう一人の自分であるハレルヤの意見を強情に拒絶する。見てて愚かしいほどまでに。

『アレルヤ、お前がそこまで反対するならオレはもう何も言わねえ。言わねえが……これだけは忘れるなよ。ガンダムマイスターは一人じゃない。お前がやらないのなら、他の誰かがこの任務を遂行するだけだということを……』

「……」

『それで良いなら……過去の尻拭いを他人に任せても良いなら、オレからはもう何も言わねえ。後は自分で考えろ、アレルヤ。オレは寝てっからな』

「……ハレルヤ」

ハレルヤの気配が消えていく。恐らくはもう表に出てこないだろう。アレルヤは展望室の手摺に腰かけながら、自分のすべきことを考える。自らの同胞を討つか否か……その選択はアレルヤにキツイ精神的重圧を感じさせ、重い疲労すら感じさせる。

「……僕は、どうすればいいんだい、マリー？」

悲痛を含む声で呟いたアレルヤは、その呟きが虚空に消えゆく様を見つつ、たった一人で考える。「超兵」として同胞を護るか、同胞を討ってガンダムマイスターの理念を貫くか……

「……決めたよ、ハレルヤ。僕は……」

ひっそりと静まる展望室で、アレルヤの目が光った。その目は強い決意と覚悟に満ち溢れ、爛々と光り輝いているようだった。アレルヤは自分のなすべきこと、その答えを得て、展望室から退出していった。この時、普段気弱なアレルヤは、その背に壮絶な覚悟を背負い込んでいるように見えた。

そして、その手には一基のGNドライブが握られていた。

【どれだけ足掻こうが、人は過去から逃れられん】

——キラー様から、「FINAL FANTASY ？？」のジ
ヤッジ・ガブラスより

10・決着（後書き）

本編も更新しました。

幕間―2

――新暦71年――

どうして世界は、こんなにも残酷なのか。

「……そん、な」

今、私の目の前は、一面の瓦礫で埋まっていた。その瓦礫の下には多数の同胞がいたはずだった。さっきまで話をしていた同胞が、笑い合っていた同胞が、今はがれきの下敷きになって、呻き声を漏らしている。それを私はただ聞くことしかできない。かくいう私も、その瓦礫の下敷きになり、身動きが取れないのだから。

「いたッ」

顔を横に向けると、左半身が瓦礫に埋まっていた。その下からは血も流れている。痛みが私の涙腺を刺激し、一粒の涙が頬を伝っていく。同胞の呻き声はまだ聞こえているが、次第に弱まっていくのが分かる。

遅かれ早かれ、あとは全滅を待つのみだろう。……一体私達が何をしたというのか？

何をすれば、こんな仕打ちに遭うというのか？ 怒りが、憎悪に近い憤怒が、私の心を赤く染めていく。

『……いたぞ！ こつちだ！ 早く救助しろ！』

不意に聞こえてきた第三者の声。けれど、それを確かめる前に、

最高の「超兵」として生み出されたマリー・パーファシーは意識を手放した。真つ暗となった視界の中、マリーは考える。

私達にこんな仕打ちをしたのは、一体誰なのかと……そして、彼女の心の支えでもある友人の名前を、助けを求めるように胸の内でも思い描く。

（……助けて、アレルヤ）

しかし、その声が彼に届くことはない。何故ならこの惨状を引き起こしたものが……彼だったのだから。

「……そうですか、分かりました。引き続き彼らの治療を行って下さい。彼らにはこれから働いてもらうことになりそうですので。……ええ、ええ。それをお願いします。では、これで……」

五人用の丸いテーブルが中央に置かれた部屋。天井はシャンデリアに、床は高級そうな赤い絨毯で飾られたその部屋には、テーブルの指定人数と同じだけの人間がいた。

通信をしていたのはその内の一人、世界清浄の四大幹部である『

オズ』ことモン・テ・デュークだった。デュークは通信を閉じつつ、自分と同じテーブルに座る残る四人の顔を見る。

「施設は壊滅したそうですが、生き残りが数名ほどいたそうです。いやあ、数名だけでも無事だったのは胸熱でしたね。あれだけの費用を投じて全滅でしたら、目も当てられない三次になるところでしたお」

「私は十分に惨事だと認識しているが、貴公は違うのか、伯爵？」

デュークの隣りに座る金髪の男が目を閉じたままデュークに物申す。男は世界清浄最強と謳われる『エース』グラハム・エーカーで、その言葉の裏には少なからずの怒りが込められていた。彼の中では「超兵」も仲間の一人だったのだらう。グラハムの仲間思いぶりは世界清浄内でも有名である。

「いえいえ、Meも惨事だとは思っていますよ？　ただ、私はあくまでも全滅と比してと言ったのです。そこは間違えないで貰えませんか、Mr・グラハム？」

「……了承した。勘違いをしてすまなかったな、デューク」

「……（コクコク）」

グラハムが首を縦に振る。それに合わせて、その隣の少女、『エインデ』ジャンヌも首を縦に振った。一言も喋っていないが、それは彼女が無口なだけだ。彼女の綺麗な銀髪が、頭を動かしたことで少し広がる。ただそれだけの動作でも、彼女はその美しさを周囲に見せつける。

「……しかし、なぜ我々にすら知らされていなかった「超兵」のことを、彼らは知っていたのかね？」

「それは私にも分かりかねますね、プロフェッサー・エイフマン。」

私だって「超兵」のことを知ったのはついさっきなのですから」

ジャンヌの隣りに座っているのは、ステッキを持った白髪の老人で、彼もまた四大幹部の一人であった。『マギ』Prof・エイフマン。彼の名を知らない科学者は、恐らく世界中を見渡しても存在しないだろう。それだけ彼は高名な科学者であり、潔癖だということでも知られていた。

また、そのさらに隣り——巡り巡ってデュークの隣りに腰かける赤茶色のスーツを着た男は、世界清浄のスポンサー的な存在であるコーナー家の当主、アレハンドロ・コーナーであった。その顔は笑顔ではあるが、目は笑っていない。彼もまた自身の預かり知らぬ所で行われていた「超兵」の研究に、不信感を抱いているのだろう。

「それにつきましては、今この場で謝罪を。Meは「超兵」の研究がいつか世界清浄の利益になると信じて研究を続行させていたのですが、これはどう見ても私に非があります、本当にありがとうございます」

「……貴公の言葉には今だ慣れんが、謝っているその心意気だけは本物だと信じたいな。世界清浄の仲間として」

「……（コクコク）」

「まあ、今はその追求よりも、奴らについての話し合いが優先じゃろうて。グラハムの報告が本当なら、奴らはオーバーSクラスのロストロギア級機械人形を最低4機は手にしていることになるからの」
「確かに、そうですね。教会で五人、私達でも三人しか保有していないオーバーSをそれだけ保有する組織……無視するのはあまりにも危険と言える」

「どうやら「超兵」の研究はデュークが秘密裏で行わせていたらしい。だが、今はその追求よりも話すべきことがあるとして、エイフ

マンとアレハンドロが奴ら——「CB」の話題を出す。

「それに関してはMeからは何も言うことはありません。まだ何も調査していないので、何も分らずじまいですし……お役に立てなくて本当にごめんなさい、生まれてきて本当にごめんなさい」

「ふっ……アレは私の相手だ。無用な手出しはしないでらおう。如何にProf・やオーナーといえど、この戦いには助太刀など以外の外！ 私と奴ら……「ガンダム」との戦いを遮ることは、例えば神でもできはしない！」

「……（「ガンダム」……「CB」については、此方の方でも調査中です。手出しをするかは管理局の反応を見てからでも遅くはないかと）」

デュークは特に興味はなさそうだった。それとは正反対に、グラハムは「ガンダム」との戦いに意欲的で、今にも飛び出しかねない様子だ。ジャンヌは何時もの変わらぬ無表情さで、その正反対な二人を遠くの目線から眺めている。

「では、まずは管理局の反応を見てからにするかの。……「ガンダム」に関する研究は私の方で行っていく。それと、以前からの要望であったグラハムの新たなM・Sも準備しておくからの」

「では、話もまとまったようですし、今日はこのあたりで解散しましょう。あまり遅くなつてはロベルトを泣かせてしまうのでね」

エイフマンはステッキを使いながら立ち上がると、そのままくると後ろを向き、自身の研究室へと歩を進めた。アレハンドロはその背中を見送りつつ、自身もまた実家へと戻る準備をする。それに倣ってか、他の三人もそれぞれ解散していった。デュークは生き残った「超兵」が保護されている施設に、グラハムはエイフマンの所にいる親友の元に、ジャンヌは……何処かに。

「……今のところ、それほど知られてはいない、か。全く……民間人でも殺せれば、より早く「ガンダム」の力を世界に知らしめることができるというのに、何故それをしないのだ、イオリア・シユヘンベルグ？」

たった独りその場に残り、帰りの準備を済ましたアレハンドロの言葉。それを聞いた者は……こちらもまた、ただ独りだけだった。

最も、その人物とは世界清浄の者ではなく、時空管理局の者であったが。

とある管理外世界の、とある山脈の内側。そこには長年をかけて造られた施設――基地があった。その内部の円形に造られた広場で、その三人は言葉を交わしていた。

「だゝかゝらあゝ！ オレ達の出番は何時あるんだつつのッ！ もう待ちくたびれたぜ、イオリアさんよゝ！」

「きやははは！ ミハ兄は我慢強いもんね。もう暴れたくって暴れたくって仕方がないんでしょ？」

「それは構わんが、命令には従うべきだ。イオリア・シユヘンベル

グは投入の時を慎重に謀っておられる。無論、ミス・スメラギもだ」

最初に声を発した男は青い髪を振り乱しながら怒り叫んでいた。その次に言葉を発した三人の紅一点である赤髪の女性は笑って最初の男の確信を突いた。最後の浅黒い肌が特徴的な男は冷静な態度で二人の会話に入りつつ、傍の壁に寄り掛かる。

全員が20代に見えるこの三人は、最初の短気そうな男が次男で、女性が末っ子の長女であり、最後の男が二人をまとめる長男の三人兄妹であった。また、彼らは三人でチーム「トリニティ」という部隊を結成しており、「CB」の創設者であるイオリアからの出撃命令を今か今かと待ち望んでいるチームでもあった。

だが、彼らチーム「トリニティ」が投入される時は、既存の「ガンダム」では対抗し切れない時であり、彼らは言わば「CB」側の「奥の手」として存在する戦力である。その戦力を使い切ってしまった「CB」は、言わば余力を殆ど使い切った状態でもあり……非常に危険だと言わざるを得ない状況にあると言える。

それを理解している長男——ヨハン・トリニティは、できれば自分たちが使われる事態に陥らないことを心の片隅で願っていた。ヨハンは他の兄妹と同じく、ガンダムマイスターになって世界を変革するためだけに生み出されたデザインベイビーだが、それは「CB」が存続する限りにおいて成立するので、「CB」が壊滅したのであっては意味を成さなくなってしまう。

そうなる事態を防ぐためにも、ヨハンは自分たちが召集される事態が来ないことを願う。他の二人——次男のミハエル・トリニティと末っ子のネーナ・トリニティはそれを分かっているから早く戦いたがっているようだが、ヨハンは違う。ヨハンには冷静に敵の戦

力を分析する思考があった。

ヨハンは思う。今の「CB」と管理局の戦力差を。そこにはアリと象すら生温いほどの圧倒的な差が両者の間には広がっていた。こちらのオーバーSは、チーム「トリニティ」の二機を合わせても六機であるが、向こうは40名近くのオーバーSランク魔導師を保有している。それだけでも管理局は「CB」の7倍近い圧倒的戦力を手にしており、その気になれば何時でも「CB」を捻り潰すことができるだろう。

事実、「CB」が今もこうして活動できているのには、管理局がまだ本気になって「CB」を叩いていないからだ。それは同時に、「CB」の存在——引いては理念がこの世界にまだ知られていないことにも繋がるが……そのおかげで命拾いしているのだから、皮肉である。

（だが、すでに賽は投げられたのだ……もう、覚悟を決めるしかないまい）

そうだ、もう後戻りはできない。後は前に進むだけ、愚直していくのみ。その決意を再度固めていると、ヨハンたちと相對する位置に立っていた人物が、初めて口を開いた。

「現在の「CB」はそれほど危機的な状況ではないので、投入されるのは当分先でしょうね。そうでしょ、紅龍^{ほんろん}？」

「はい、お嬢様」

赤紫のチャイナ服で着飾ったその人物——王留美^{ワンリョーミン}の言葉に、従者である紅龍が頷く。彼らは莫大な資本を持つ「CB」のスポンサー的存在であり、サポートメンバーでもある。王留美はいかにもな作

り笑いを浮かべながら、ヨハンたち「トリニティ」の価値を見定めようと、視線を動かしている。

「んだよ、つまんねえの」

「ヨハン兄、それじゃあ私達の出番はまだ先なの？」

「……恐らく、管理局が何かしらのアクションを起こさない限り、オレ達が呼ばれることはないだろう。それより、ここで油を売ってでもいいのか、王留美？」

ヨハンの問いに、王留美は口元を扇子で隠しながら答えた。

「ええ。私共は監視者とも接触ができたので、今のところは特になにもすることがないのですよ」

「……そうか」

ヨハンは王留美を味方だとは思っていない。切れるカードの一つだと、そう認識していた。だから、機密が詰まっているこの空間にあまりいて欲しくはなかったのだが、王留美は暫くここに滞在する気なのだろう。すでに目が早くアレを見せると、そう急かしていた。

その様子に半ば呆れつつも、ヨハンはアレが仕舞われているボックスを一つ持つてくると、中を開け、そこに納められていた白い謎の物体を取り出した。それを見て、王留美は目を輝かせる。

「それが、世界を変革へと導くデバイス……！」

「言っとおくが、これはあくまでも疑似だ。そこを間違えないでもらいたい」

世界でもトップクラスの財を持つ王留美が、やや気圧されながら、その物体を子どものように見つめる。その視線に若干うんざりとし

ながらも、ヨハンはコーンの形状をしたそれを、王留美が満足するまで見せ続けた。

なお、その間。次男、長女、従者の三人は、その様子を遠巻きに眺めつつ、談笑を行っていた。

【けっして忘れるな！お主らの足元には、呉の礎となった無数の英霊達が眠っていることを！】

——アストレア様から、『真恋姫無双』の黄蓋より

幕間―2（後書き）

今週は本編の更新はありません。全ては作者の力量不足のせいです。楽しみにして下さった方には、本当に申し訳ないことをしてしまっただと思います。

一応、更新できない理由は、第72話が想像以上に長くなりそうだからです。現在一万字を書き終えましたが、まだまだ書き終わる気配がありません。このままですと、2 3万字に到達するかもしれません。

来週の更新を目指して書きますが、来週もまたスピンオフだけの更新になる可能性が高いです。その時はご了承ください、お願いします。

11・ガンダム破壊作戦：前哨（前書き）

【心しておけ。貴様らの脆弱な発想が、人類を壊死させるのだと】

——Corporal様から、『ARMORED CORE
or Answer』のマクシミリアン・テルミドルより

11・ガンダム破壊作戦：前哨

——新暦71年——

『レキスⅡガバレートが敗れたか……』

『これでガンダムがオーバーSだということが判明したな』

『しかし、オーバーSクラスのロストロギア級機械人形を四つも保有する組織を世間に公表しては、混乱は必至。しばらくは隠密に事を進めるべきだろう』

三つのモノリスが威厳のある声で話し合っていた。三角形を作るように配置されたモノリスは、中央のモニターに移る「剣士」とレキスの凄まじい戦闘を再生しながら、これからの対応について議論していた。

『ならば、即急に事態を解決するべきだな。大規模な作戦を展開し、CBを壊滅させるか？』

『確かに、そうすべきだろう。相手にはオーバーSが四機ある。その作戦にはやはりオーバーSを投入すべきだ』

『そうすべきだろう。オーバーSは二人、それにAAAランク魔導師も6人、参加させよう。内一人はヴオクシーⅡジハードにしようかと思うが、如何かな、二人とも？』

彼らの中では、CBはまだ世界清浄より劣る、第二級の反管理局組織だった。オーバーSを四つも保有するのは確かに脅威と言えば脅威だが、逆に言えばそれだけである。管理局にはオーバーSが40名以上も在籍しており、その気になれば何時でもCBを壊滅させることができる、彼らはそう信じて疑っていなかった。

『あの『最強』をか？　しかし、奴は我ら管理局にとって、切り札にも近いカードだぞ？』

『切り札ならば、文字通りの『鬼札』や、あの『歩くロストロギア』もある。特に「闇の書」などは、その名前だけでも世界を脅せる、第一級の兵器だ。それならば『最強』の代わりとて、楽にこなそうて』

『うむ、そうだろうな。それに、他にも『白い悪魔』や『金色の閃光』、ヴォルケンリッターなど、此方の戦力は層が厚く、しかも豊富に揃っている。例え『最強』が敗れ、死亡したとしても、問題は何もない』

暗い空間に浮かぶモノリスは、管理局で最高の権力を持つ最高評議会のメンバーのものであった。そこでの発言は管理局の上層部の意思と言ってもあながち間違いではない。

そして、彼らの認識はそのまま管理局の認識でもある。例えCBがオーバーSを倒そうとも、未だにCBはその名を世界に知らしめることすらできていなかった。

それも全ては、6年前までともに稼働していなかったはずの無限書庫のせいだった。CBにとって最大の誤算とは、無限書庫によってヴェーダによる裏世界——情報世界の掌握ができなかったことである。その弊害は今も重く深く、CBの活動を無意味なものとしめていた。

『して、どれだけの戦力で行う？　百か、千か……人手不足を考えれば、数百程度で済みたいところだが』

『さすがに数百では無理があろう。千……そうだな、五千ほどの魔導師部隊をもって、事に当たろう』

『問題は、それだけの数をどうやって集めるかだが……そうだな、

危険なロストログアの回収任務とすればいいだろう。事実、嘘ではないしな』

管理局にとって、最も厄介な問題とは何か？

それは、設立当初から続く万年人手不足がそうだ。100を超え、世界を管理する管理局は、その超規模的な人数の構成員とは裏腹に、一つの事件に割ける人数はかなり少ない。

地球よりも進んだ科学技術を持つ世界を、最低でも30以上も抱えている管理局。そして、彼らはその全てを守らなければならない。そのために戦力は自然と分散され、いざという時でも戦力を集めるには大変な労力が必要となる。

しかし、それも最高評議会の権力さえあれば、五千程度の戦力など、造作もなく集めることができる。寧ろ、最高評議会以外では千を集めることすら満足にできないだろう。それは評議会に権力が一極集中しているということの裏付けでもあるのだが……。

『CBを誘き寄せる餌はどうする？ さすがに管理外世界の戦争にそれだけの戦力を送り込むことはできない。管理世界は今のところ、平和なことこの上ないから、戦争など起こってないぞ？』

『ならば、我らが餌を用意すればいいだけのこと。世界清浄を引き摺りだし、同じ戦場に配置させれば、奴らは否が応にも現れるだろう。現れなかった場合は、それだけの組織だったということだ』

『その通り。それだけの組織ならば、わざわざ我らが相手にするほどもない。……では、戦場は第28管理世界の砂漠地帯にしましょう。あそこならば見通しも立ち、ガンダムを肉眼で確認しやすいからうからな』

作戦の規模も、誘き寄せる餌も、戦場も決まった。その後三つのモノリスは他の議題を幾つか議論し、管理局の運営を取りまとめると、そのまま解散して、闇の中へと消えていった。

最高評議会のメンバーは、肉体というモノが存在せず、専用の培養液に入れられた脳だけで生きている。こまめなメンテナンスと適度な休憩は、彼らにとってかなり重要な事項だった。

それもこれも、全ては管理局を、ひいては次元世界の平和を守るためなのだが……彼らは気付いていない。自分たちがもう、どれだけ歪んでしまっているのかを。

そして、その歪みがイオリアにCBを創設させたのだということ……彼らは、知らなかった。

ヴォクシー「ジハード。彼は管理局でも数少ないS+ランク保有者であり、管理局『最強』の魔導師としても有名な、オーバーランク魔導師である。

ヴォクシーは40歳間近の年齢だったが、その筋骨隆々な肉体には衰えというものは存在しない。ベンチプレスやスクワットは両方

とも余裕の300キロオーバーで、見た目だけでもボディビルダーとして十分やっていけそうである。

マッチョという概念のど真ん中を直走るヴォクシー。そんな彼は今、『鬼札』クロノ・ハラウンと向かい合って、勝負をけしかけていた。

「がっはっはっはっ！ 勝負だ好敵手^{ライバル}！ 21回目の勝負をやるぞ

ーーーー！！」

「……」

「互いに8勝8敗4引き分けの今！ どちらが真の『最強』かを決めるぞ、好敵手！」

「……」

21歳のクロノに勝負を挑む40歳のヴォクシー。二人の年齢は倍近く離れている。しかし、遠目から見て、何故かクロノの方が年長者に見えるのは、恐らくヴォクシーが脳筋だからだろうか？

「訓練室はもう取り押さえてある！ 救護班もばっちりだ！ 審判は俺の部下に任せるから、あとはお前が承諾すれば、何時でも勝負でき……」

「さて、仕事も終わったことだし、そろそろ帰るとするか」

「がっはっは……無視はいかんぞ、無視は。俺のハートがブレイクされるではないか……はっはっ……」

神妙な顔で笑うヴォクシーを、クロノは完全に無視する。クロノの予定では、今日はエイミィ・リミエツタを誘つてのディナーがあり、ヴォクシーに付き合うわけにはいかなかったのだ。それにしても、40間近の男が泣きそうになる顔は気持ち悪いと、クロノは密かに思う。

「今日はエイミーとのディナーがあるんだ。訓練や勝負は後にしてくれないかな、ヴォクシー？」

「……ほう。あのどうやらあの熱愛報道は嘘ではないようだな、好敵手よ。俺との勝負よりそっちを取るとは……本気らしいな？」

「どちらにせよ、貴方との勝負はそんなにいいものじゃありませんがね。でも、本気なのは本当です。僕はエイミーをあ……あい、しているのです」

クロノの顔が、さつと朱に染まる。ヴォクシーは好敵手の初々しい一面を見て、密かに気持ち悪い奴めと思ったが、さすがに口には出さなかった。言ったら最後、何をされるか分からなかったからだ。

互いが互いを気持ち悪いと思っていることに気付いていない二人は、そのまま少しばかり話をして、中途の通路で別れていった。エイミーとのディナーにはばかり気を取られているクロノを勝負に連れてこさせたとしても、満足のいく戦いはできそうにないと、ヴォクシーがそう踏んだのだ。

できれば、最後に勝敗を決めておきたかったが……好敵手の恋愛を応援するのも、また好敵手たる自分の役目だと思い、そこは割り切る。

「……さて、では行くか。危険というロストログアの回収任務に」

筋肉で盛り上がった背をクロノに向け、正反対の方向に歩んでいくヴォクシーの姿は、先程までの緩んだ様子から一変して、歴戦のそれに変わっていた。途中、出くわした管理局員が思わず道を空けるほど、今のヴォクシーの顔には「覚悟」が滲みでていた。

「やはり、早々に排除する方向で決まったか……」

「大佐あゝ、どうしたんですか？」

「いや、何でもない……それよりも貴様、今度の作戦では以前のような失態は許さんから、気を引き締めろよ」

教導隊に所属するA A A+ランクのパトリック・コーラサワと、女傑として有名なカティ・マネキンが一緒にいる光景は、何とも奇妙なものに見えた。だが、彼ら二人にとっては別段おかしい話ではない。

ただ、カティに惚れたコーラサワが上層部に無理を言ってカティの部隊に入れてくれと頼み込み、それが通っただけのこと。それに迷惑そうな顔をしたのは、カティの中では随分と昔のことに思えた。それだけ長い間、コーラサワと一緒にいたが、コイツは何も変わっちゃいないと思う。

また、そこを好ましいと思ってしまう自分にも苦笑してしまう。

「今度の作戦……って、なんでしたっけ？」

「先程説明しただろ？ ロストロギアの回収任務だ。五千もの局員やあのヴォクシー・ジハードを投入するほどの任務なのだから、もう少し気を引き締めろ、パトリック」

へらへら笑うパトリックを、やれやれといったように見やるカティは、「ガンダム」と呼ばれたロストロギアの資料を読みながら、頭の中では幾つかの戦術を構築していた。

最も、相手はこのコーラサワーをも超えるオーバーSクラスの怪物たち。如何に巧妙な戦術を築いても、力づくで突破される可能性は非常に高い。

ましてや、無限書庫ですらまだ調べきれないという相手を、カティは不気味に思っていた。ここ数年、無限書庫の本格的な稼働とともに、ロストロギアなどの情報は寧ろあつて当然であつた。それによつて一体どれだけの被害が無くなつたことか……それを思えば、なおのこと、今回の作戦では大量の犠牲者が出そうな気がした。

それを少しでも抑えるべく、カティは必死に戦術を構成する。己の信念である『紛争の根絶が不可能である以上は、的確な戦術予報によつて早期解決を図り、被害を最小限に抑えることが平和に繋がる』の元、彼女はガンダムを打倒するための戦術を練る。

その凜々しい横顔を見ていたコーラサワーは、カティの様子に何を思ったのか、何時もの彼らしくもなく、黙つたままカティを見守っていた。カティはコーラサワーの視線に気付いていたが、特に何も言わなかつた。

それが両者の信頼を現してもいたが……コーラサワーの忍耐が切れて、カティに殴られることになるのは、あと少し先のことであつた。

スメラギ・李・ノリエガはヴェーダから提示されたプランの戦術を練っていた。机にはいつものように空の酒瓶が転がっており、頬がうつすらと桃色に染まっていた。

「やっぱり、管理局は大規模な作戦を行うのね……現状の戦力では、到底私たちに勝ち目はない。……こうなったら、トリニティに出撃してもらうしかないわね」

視線の先に映るモニターで行われたシミュレーションでは、敵方の仮想オーバー・Sが仲間のA A A +と組んで、エクシアを撃破していた。もう一方のモニターでは、ヴァーチェがもう一人いた仮想オーバー・Sとほぼ相打ちとなり、動きを止めていた。それらを厳しい目付きで見ていたスメラギは、作戦を練り直し、もう一度シミュレーションを行う。

「絶対的に戦力が足りないわ……ここは素直にイオリアさんに彼らの導入を決めてもらうしか……」

砂漠地帯にて相対する、世界清浄と時空管理局。もし双方が戦闘に突入すれば、C Bがそこに介入しないわけにはいかない。これは彼ら自身の信念を見せつけるためでもある。

また、武力による紛争根絶——C Bの信念でもあるそれを広めるのにも、二つの超組織による戦いは都合がよかった。何度も小規模な紛争に介入したとしても、C Bの情報を揉み消すことができる管理局によって、世界にはC Bの情報が全く知らされていなかった。

だが、さすがにこれだけ大きな作戦は、管理局といえど隠し切れるものではない。ちらほら、チラホラと、噂程度でもCBのことが口から口へ、人から人へと伝わっていくだろう。それはやがて大きなうねりとなって、CBの存在を世界に知らしめる切っ掛けとなる。

「一か八かの賭けことは好きじゃないけど……伸るか反るか、やってみようじゃない」

スメラギには分かっていた。もしこれが失敗に終われば、CBはガンダムをも失って、もう二度と再起することができないことを。だからこそ、この作戦は絶対に成功させなければならぬ。これ以上の無駄な戦闘を抑えるためにも、そろそろCBも大きな一手を振り込まなければ、あとはじりじりと戦力を摩耗していくだけだ。

それを防ぐためにも、彼女は王手に繋がる戦術を作る為、もう一度シミュレートを始めた。その頃にはもう酒はもう抜け切っていて、頼も健全な色合いに戻っていた。

11・ガンダム破壊作戦：前哨（後書き）

本編も更新しました。なお、これと本編を合わせるとちょうど2万字になります。切りがいいですね、何故か嬉しくはありませんが。

次の投稿でこの作品は大凡半分を超えます。あんまり進んでいないのに、ここまでで6万字を使っている作者はきつと文才ナッシング！！

次話の投稿予定日：2011年8月27日（土）

12・ガンダム破壊作戦：準備（前書き）

【『正義』はどんなことにも使える大義言い訳名分となる】

——EXAM様より

12・ガンダム破壊作戦：準備

——新暦71年——

世界清浄の幹部の一人、モン・テ・デュークは、目の前で行われている「超兵」の訓練を満足げに眺めていた。今回の作戦では初めて「超兵」を実戦投入するので、多少の不安があったが、これなら大丈夫だろうと、そう確信した。

デュークが主導して行った「E計画」の産物たる「超兵」は、脳量子波を操ってあり得ない反射速度で動き、目の前のシミュレート上の「羽付き」を易々と追い詰めていた。それまでに4人ほどが死亡していたが、所詮は消耗品の部隊。気にすることはないと、デュークはそう思っていた。

「はぁぁぁぁッ!!」

追い詰めた「羽付き」に、全身をM・Sのスーツで覆ったマリィ・パーファシーが止めを刺す。大仰な仕草で落下していく「羽付き」を、部隊の全員が油断なく見つめていた。

倒した後も決して油断せずに臨戦態勢を解かない彼らに、デュークは酷く満足した様子で賞賛の拍手を送った。響かない拍手の音が、空しそうに閲覧室に木霊する。

「どうだい？ 君から見ても中々のものだろう？ 特にマリィ・パーファシーは素晴らしい素質を持っているから、君ともいい戦いをするかもしれないね」

「ふ、確かに。だが、本物のガンダムに通用するかどうかはまだ

分からんぞ？ 仲間として忠告しておくが、奴らを舐めないほうがいい」

「オーキードーキー。M eの肝に銘じておくよ、グラハム」

訓練が終わり、次々と空中から地上に降り立つ「超兵」たちを、グラハムは何処か面白くなさげに見詰めていた。「超兵」の殆どは少年少女であり、とても戦争に耐えられるようには見えなかった。

しかし、グラハムは何も言わずにその場から去っていった。心中に何を思っても、「超兵」の管轄はデュークにある。自分が何を言っても無駄になることを、グラハムは承知していたのだ。

「相変わらず気味の悪いことをしていますね、デュークは」

「全くだ。うちの隊長にあんなモノを見せつけるなんて、悪趣味にも程があるぜ」

「そう言うな、ハワード、ダリル。奴はそれを分かってやっているのだからな」

デュークのいた閲覧室から出ると、二人の屈強な男がグラハムの後ろに付き従った。彼らは「フラッグファイター」と呼ばれる歴戦の戦士であり、グラハム直属の部下であった。

かの高名なP r f・エイフマンの尽力の元に製作された試作M・S「オーバーフラッグ」。それを操るストライカー級の魔導師が揃った特殊部隊「オーバーフラッグス隊」。グラハムはその隊長として、オーバーフラッグス隊に着任していた。

なお、グラハムにはそのオーバーフラッグをさらに専用にカスタムマイズした「フラッグカスタム」が授与されていた。

「それにしても、管理局がこちらの基地を叩くのに大部隊を送ってくるという情報は本当なのですかね？　ここ数年ほど大人しかった管理局がいきなりそんな行動を取るとは思えないのですか……」

「おいおい、ハワード。向こうはあの時空管理局だぞ？　管理外世界を見下すような組織に、そんな常識があるもんかよ」

「ダリル、落ち着け。……確かに疑問の残る行動だが、恐らくこれは、ガンダムを誘き寄せするための餌だろう」

「餌^{でずか}？」

ハワードとダリルが異口同音に疑問を口にした。グラハムは自身も考え込みながら、その疑問に答える。

「これまでのデータから、ガンダムはどうやら紛争や戦闘などに介入するように出現していることがはつきりしている。そこに、二大超組織たる世界清浄と管理局が戦争をする予兆を見せれば、ガンダムもきつとそこに現れるだろうと思っているのだろう。なぜガンダムがそんな介入を行うのかは、疑念が尽きんがな……」

第28管理世界から見上げる星空は、技術の発達した管理世界だというのに、驚くほど綺麗だった。一つ一つを数えることができるほど、星々は鮮明に光り輝き、漆黒の空で激しい自己主張をしているように見える。

「おい、刹那。何やってんだ、そんな所で星を見上げて？」

「……気にするな、ロックオン」

星を見上げていた彼——刹那・F・セイエイが、感情の薄い声で、傍にいるロックオン・ストラトスへそう言った。ロックオンはやれやれ、とでも言いたげに肩を上下させながら、ガンダムの追加装備をGNドライブにインストールしているイアン・ヴァステイの元まで歩いていった。

「ガンダムの調子はどうだい、おやつさん？」

「調子はすこぶるいいぞ。……エクシアが返り血で汚れたと愚痴る以外はな」

刹那とロックオン、それにイアンの三人がいるのは、マイスターを運ぶCのコンテナ船の外であり、刹那は二人から離れた所で星を眺めていた。その横顔からは年相応の幼さが垣間見え、ロックオンは刹那がまだ幼いということを再認識した。

「刹那ももう少しエクシアのことを気にかけてくれればいいんだけどな。ま、アイツはまだお子ちゃまだから、もう少し大人にならないと無理、か」

「勘弁してくれ。その被害を受けるのは儂だぞ？ 整備の度に愚痴を聞かされる身にもなってくれ」

イアンはエクシアへの愚痴、という不満を言いながらも、その手を止めることはなかった。ガンダムの整備諸般を受け持つ彼は、何だかんだいいつつも、何時もガンダムを最良の状態にしてくれるメカニックマンだ。ロックオンも刹那も彼のことを信頼していて、整備のことやインストールのことに関しては、何も口出しをしなかつ

た。

だからロックオンは、別の話題をイアンに持ち出してきた。

「……今回の作戦、どう思う？」

「どうも何も、完璧に罠だ。恐らく管理局はここらで儼らを一挙に摘みたいのだろう。もしくは、壊滅的なダメージを与える気なのか……」

「どちらにしろ、ここが勝負どころか……オーバースクラスの魔導師も何人が投入されるな、こりゃ」

「投入されたとしても、1人が2人が限界だろう。怖いのは、世界清浄側のオーバースが何人投入されるかだ。それで戦闘は大きく変わるぞ？」

「……そうだな。さすがに聖王教会は動きそうにないが、世界清浄のリアクションが怖いといえば恐いな。刹那も変態に遭遇したと言っていたし……」

その時のことを思い出してか、ロックオンは思わず噴き出しかけた。あの無表情な刹那が、珍しく狼狽していると思ったら、いきなり「変態と遭遇した」と、真面目な顔で言ったのだ。あの時はつい刹那の頭が大丈夫か心配してしまったが、あの変人として有名なグラハム・エーカーと会ったのなら、それも説明がつく。というよりついでにしよう。

グラハム・エーカー。世界清浄最強と目される、オーバースクラスのストライカー級魔導師。その凄まじい戦歴は管理世界にも轟き渡り、教科書にも必ず名前が載るほどだ。しかし、それとは別に、彼を有名にしたのは、彼自身が途轍もない変人だということであった。

その一端に触れ、予想の斜め上を超えた変態性に怯えていた刹那を、気の毒とでも思ったのか、エクシアが宥めようとしていたのは二人とも驚いた。イアンはそれを見て、これで愚痴から解放されると思ったが……それはどうやら尚早だったようだ。何故かいつもの2倍近い愚痴を延々と聞かされ、イアンはもうクタクタに疲れていた。

しかし、イアンは身体に鞭を打ちながら、インプットする作業を続けた。今回の作戦は今までにないほど大規模なものになるというのも、彼に作業をさせた理由の1つであった。

「しかし、例え罷だとしても、僕たちがすることは変わらない。それに、見方を変えれば、これはチャンスだ。CBの名を、その理念を知らしめる絶好の機会だ」

「ああ……武力による紛争根絶。ガンダムがそれを成すのだということを知らしめるには、またとない機会だな。だから、今回ばかりはCBも本気を出さなきゃならないつつつことだ……分かったか刹那？」

「ああ。オレが……ガンダムだ」

「……本当に分かってているのか、ロックオン？」

「オレに聞かないでくれ、おやっさん。……オレにも分からねえんだよ」

刹那は上を見ながら、ガンダムだ、ガンダムだと呟いた。ロックオンとイアンが胡乱な目でそれを見ていたが、刹那は特に何も思うことなく、ガンダムの単語を呟き続けた。

そこに彼なりの決意があるということに気付けたのは、彼の相棒たるエクシアだけであった。

時空の海を漂う時空管理局の本局にある、無限書庫。ユーノ・スクライアはそこでCBに関する情報を蒐集^{しゅうしゅう}していた。

「CBを創設したのは、イオリア・シュヘンベルグみたいだね。…彼の理論の中には量子演算に関するものもあったから、やっぱりCBには量子演算システムが存在すると思う」

「量子演算システム……ですか？ でも、本当にそれを開発することができるのでしょうか？ ミッドチルダでもまだ実現されていないのに……」

「さあ？ そこまではまだ調べがついていないけど……電子データを蒐集できないのは、もしかしたらそれが原因なのかな？ といっても、無限書庫自体、僕たちにも分からないことだらけだから、断定はできないけど……」

断片的な情報から、仮説を打ち立てていくユーノに、対面していたオーバーSランク魔導師のプリウス^{あやめ}は菖蒲色の瞳をゆるゆると潤ませていた。ユーノはそれに気付いていないのか、自身の貞操の危機かもしれないというのに、全く警戒せずに口を動かしていた。

「……あら？ ユーノさんも知らないのですか？ 無限書庫の……」

えつと、機能のことを？」

「いや、機能ぐらいいは分かっているんだけど、その原理を説明するのは無理かな？ 無限書庫が造られたのは、古代ベル力時代よりもさらに昔みたいだから、アルハザード時代の遺物の可能性だってあるんだ」

「それはつまり、無限書庫自体がロストログア……と、いうことなのでしょう？」

「そうなるね。実際、その可能性が一番高いよ」

ユーノはしれつと言ったが、プリウスは椅子から立ち上がるほど驚いていた。最も、本局にロストログアのようなものが普通に稼働していると知ったら、誰もがそんなリアクションを取るだろう。酸素を求める金魚のように口をパクパクしているプリウスに、ユーノはさらに自分の仮説を説明する。

「無限書庫って、何だか「夜天の魔導書」に似ているんだよね。「夜天の書」が魔法を蒐集するなら、無限書庫は情報を蒐集する。「夜天の書」が魔力を貯蔵するのに対し、書庫は情報を溜めこむ。もしこれが偶然でないとすれば……無限書庫は「夜天の書」に類似するロストログア級のデバイスである可能性が高い」

朗々と語るユーノ。その顔は至って真剣で、プリウスに詭弁をしているわけではなさそうだ。ユーノの独演説はなおも続く。

「だとすれば、無限書庫は「夜天の書」のように管制人格……つまりは、ユニゾンデバイスか、あるいはインテリジェントデバイスのような「知能」を持つデバイスがあってもおかしくはない……と思うんだけど、5年ぐらい勤めても一度も会ったことがないから、そんなに可能性はないけどね。あくまでも仮説だし」

ユーノは最後にそう締めくくって、すぐ近くに置いてあったコーヒーを口に運んだ。ユーノは仮説と言っていたが、その仮説をユーノ自身は信じているように思えた。少なくとも、プリウスにはそう思えた。

「話を戻すけど、今度行つ管理局の作戦で、CBはどう出ると思う？」

「そうですね……全力を出してくると思います。確認されているガンダムは4機だけですから、1機辺り最低でも大体1200人を相手にしなければなりません。そんな大軍を相手取することは、オーバーSといえども不可能です。ですから、本気を出すしかありません」

「その本気を出すつていうのを具体的に言つと？」

「……新しい装備を出したりするのではないかと思います」
「そうだね、きつと新装備は出してくるよ。でもね、それだけで済めば寧ろ恩の字さ」

ユーノの口に含まれたコーヒーになりたい、と思っていたプリウスは、自分のはしたない妄想に顔を赤くしながら、ユーノの言葉の続きを待った。

しかし、ユーノの次の言葉は、不吉な予兆と確実性を多分に孕んでいた。

「僕としては、新しいガンダムを出してくるんじゃないかと睨んでいる。それも、1機だけじゃなく、複数のガンダムをね」

ユーノが推測で言ったこの言葉。だが、これが実現しようとは、ユーノ自身ですら、今はまだ思ってもいなかった。

12・ガンダム破壊作戦：準備（後書き）

……本当にあと3話で終われるのかが不安です。

今月と来月で3・までは終わらせたいです。本編は7・を終わらせたいです。夢で終わらせないよう、頑張りたいと思います。

次回の更新予定日：2011年9月3日（土）

13・ガンダム破壊作戦：開始（前書き）

【綺麗事で戦っている奴は、自分の手が汚れると脆いよ】

—— P3 様から、『仮面ライダー龍騎』の北岡秀一より

13・ガンダム破壊作戦：開始

——新暦71年——

第28管理世界の砂漠地帯。ここには世界清浄の大規模な秘密基地が存在していた。収容されている兵数は、ざっと2000人ほど。Bランク以上の高ランク魔導師も100人ほどいた。それだけの兵たちが駐屯する秘密基地は、しかし、今や警報を鳴らし、コンディションレッドを発令していた。

理由は、眼前で陣形を組む時空管理局の大隊が迫っていたからだ。約5000もの魔導師で構成された管理局の大隊だが、そこにはオーバーSランク魔導師の姿も確認できた。その事実が世界清浄側の兵たちに恐れを抱かせ、士気を下げさせる。しかも、そのオーバーSはよりにもよってあの『最強』ヴォクシー・ジハードである。世界清浄側の士気は底辺といってもよかった。

基地まで約10kmの地点にまで接近した管理局は、そこで一度、進軍の足を止めた。今回の作戦で指揮を取っているカティ・マネキンが止めたのであった。彼女は通信でヴォクシーに指示を出すと、全軍に次の指示があるまで待機を命じた。

「やれやれ、俺様はロストログアの破壊のために魔力を温存しなければならんというのに……人使いが荒いな、カティの姐さんは。最も、暴れる許可をくれたのには感謝をするがな！　ガッはッはッ！」

ヴォクシーは筋骨隆々の身体を大きく揺さぶりながら、カティの指示通りに、たった一人で敵基地へと突撃し始めた。9km、8km、7kmと大きく距離を縮めるが、6kmまで近づいた所で敵の

対戦車用の地雷が爆発し、ヴオクシーの姿を巨大な炎で見えなくさせた。

歓声があがる世界清浄の兵たち。逆に管理局の魔導師たちは冷静な様子で前進を始めた。前衛の砲撃魔導師がデバイスを構え、砲撃の準備に入る。

それに対処しようとした世界清浄側のリーダーたちだが、彼らはその後に信じられないモノを見た。対戦車用の地雷を喰らっても前進を止めないヴオクシーの姿を、彼らはその目で捉えたのであった。ヴオクシーは地雷を次々と爆発させても疾走するのを止めずに、砲撃魔法が前方にあるうとも、その身に纏ったB・Jだけで全てを無効化して、基地の内部へと恐ろしく強引に突入した。

それを合図とし、管理局がついに本格的に進軍を始めた。砲撃魔法が飛び交う中、速度のある航空魔導師が敵兵を攪乱し、陸上部隊の進行を手伝う。陸上部隊はヴオクシーにより無効化された地雷原を悠々と渡り、敵基地への侵入に成功した。

明らかに管理局の絶対的優勢となった戦。だが、カティは勝ちを拾えそうになっても、その目から陰を取ることはない。まだ本番ではないのだ。世界清浄の基地を攻略するなど、彼女の任務では序の口でしかなく、本当の任務はこの後にくるはずの……

「マネキン大佐、通信が次々と途絶えていきます！ A2ブロック、C5ブロック共に沈黙！」

「通信、回復しません！ それに、こちらの損害がどんどん増えてきています！」

「……そうか。来たのだな、ガンダムが。パトリック！」

「はい、大佐！ なんですしょう？」

「獲物が罠にかかった。お前はもう一人のオーバーSと一緒に、デカブツを討ってこい！ いいな！？」

「了解です、大佐！ 大佐のキッスのために、オレ、死ぬ気で戦ってきますよ！」

センサーにノズルが混じり、使いものにならなくなる。しかし、それは事前に分かっていたことであり、指揮系統が乱れることはなかった。カティは冷静沈着のまま拡声機を使い、周辺の部下へと命じた。

「これより、管理局は第2級搜索指定遺物「ガンダム」の破壊を行う！ 世界清浄の方は一旦ヴォクシーに任せ、全軍、そちらに全力を注げ！」

この声明が「ガンダム破壊作戦」の幕開けを告げることになった。砂塵が常に舞う戦場で、ついにCBと管理局が初めての大戦を迎える。

世界はそれを、ただ静かに見つめていた。

A2ブロックでは、キュリオスの背に乗ったデュナメスが、正確

な狙撃で眼下の魔導師を狙い撃っていた。今回のミッションは大規模に展開された管理局及び世界清浄の争いに介入し、これを止めさせることである。

『センサーに反応！？ ロックオン！』

『反応が早い！ やっぱり罠だったか！』

しかし、CBは同時に分かってもいた。これがCBを誘き寄せる罠だということも。そして、罠だと分かっているながらも飛びこまなければならぬことも。

『空戦魔導師、30！ 陸戦魔導師、87！ 空戦は僕に任せて、ロックオンは陸上の敵を！』

『了解！ 行くぞハロ、デュナメス！』

『リヨウカイ、リヨウカイ！』

『……Yes, mister』

空戦魔導師が十人十色の魔力光を放ちながら、魔法を発動していく。キュリオスから離れ、地上に降り立ったデュナメスには、陸戦魔導師の集中砲火が放たれた。砂漠の砂と共に巻き上がる砂煙がデュナメスの身体をすっぽりと覆い、視界が利かなくなる。

「やったか！？」

誰かが発したこの一声。しかし、その希望は一発の粒子ビームにより砕け散った。

『へっ！ さすがはおやつさん考案の新装備！ 攻撃を全然受け付けねえぜ！』

全身を緑色のフルシールドで固めたデュナメスが、二挺拳銃を構えながら魔導師たちに近づいていく。魔導師側の懸命な攻撃も、デュナメスの装甲の前では蚊の針よりも弱かった。

『そんじゃま、反撃といきますか！』

地上から浮かせた機体を一転二転と回転させながら迫るデュナメス。両手の拳銃をガン・カタをするように扱いながら戦うデュナメスは、この10分後に、87名の陸戦部隊を全滅させ、次のポイントへと向かっていった。

『一気に決める！ キュリオス！』

『大空を心地良く飛ぶ私を邪魔する人には、ミサイルの雨をプレゼント・フォー・ユーです！』

デュナメスと別れ、30の空戦魔導師と相対したキュリオスは、後ろのテールユニットに装着してあったミサイルコンテナのハッチを上げ、数十発ものミサイルを一斉射した。相当な速度で迫るそのミサイルの群れに、何人かのシールドを張った魔導師以外は呑み込まれて、全員が爆死してしまう。

「クソッ、コイツ！」

「は、はや……！」

ミサイルに気を取られた魔導師の一人を、粒子ビームで蜂の巣にする。それに驚いた魔導師も同様に同じ結末へと導く。残った魔導

師は僅か2名で、憎悪を浮かべながらキュリオスに肉薄しようと、無駄な努力をする。

『殺したくはないけど、これも世界の変革のため……それに、僕はガンダムマイスターだ!』

人型に変形し、擦れ違いざまにビームサーベルで一人を斬り裂く。もう一人の方は、GNビームサブマシンガンの粒子ビームでB・Jごと撃ち抜き、血反吐を吐かせながら殺した。自らの手で人を殺めた感触がアレルヤ・ハプティズムに罪の意識を感じさせるが、それを今一時ばかりは忘れて、新たな敵影を捕捉する。

『行くよキュリオス! 長丁場になるだろうけど、頑張ろう!』

『Yes,meister』

空気抵抗を考えて造られた飛行形態に戻り、敵影に向かっていくキュリオス。デュナメスと付かず離れずの距離で戦いながら、キュリオスは空で踊り続けた。

キュリオスとデュナメスが交戦に入った頃。このC5ブロックでもガンダムと魔導師による戦闘が始まった。ここにいるガンダムは

「剣士」と「デカブツ」の2機で、その2機は互いをサポートしながら戦っていた。

『刹那、こちらに接近してくる機影を発見した。僕はチャージ中で動けないから、君が排除に向かってくれ』

『了解。刹那・F・セイエイ、目標を駆逐する！』

青色と白色をパーソナルカラーとするエクシアが、迫りくる魔導師たちを前にし、右腕のGNソードではなく、腰にマウントしていた二振りの剣を手にした。これがエクシアの新装備であり、銘はGNブレイドである。このロングとショートに別れた2剣を手にしたことで、エクシアはようやく開発コードの「セブンソード」を完成させたと言える。

「く、来るな！ 来るなアアアアッ！！」

重力を完全に無視して動くエクシアに、魔導師たちは完全に虚を突かれ、簡単にエクシアを近づけさせてしまう。エクシアは両手を別々に動かして、魔導師のシールドを紙のように切り裂きながら、首なしの死体を増やす作業を黙々と行っていく。

『ハアアアアア！』

上段からの斬り下げを相手に見舞い、右腕と上半身を真つ二つにするエクシア。その悪鬼然とした後ろ姿を見ながら、チャージの終わったヴァーチェが大きな大砲を胸に構え、その砲口から光りを溢れさす。

『離れろ、刹那！』

『了解』

『GNバズーカバーストモード……発射!』

エクシアが上空に飛び離れるのと同時に、ヴァーチェから極光の光りが放たれた。それは地面を半円に挟りながら突き進み、地平線の彼方まで続いていった。

エクシアが相手をしていた魔導師部隊もその光りに吞まれ、今では塵一つすら残ってはいなかった。エクシアとヴァーチェはそれに感慨を思ふこともなく、逃げ道を確保してから魔導師たちに本格的に襲いかかっていった。

しかし、CBの猛攻も、長くは続かなかった。倒しても倒しても湧いてくる敵にマイスターたちの精神は次第に削られていき、20時間も経った頃には、その動きから精彩さが無くなっていた。本来なら24時間以上も戦い続けることが可能なガンダムだが、カティの的確な指示と戦術により、肉体面ではなく、精神面を責められ続け、動きを鈍らせていったのだ。

『クツ……しんどいぜ!』

『……こつも絶え間ないとな。敵の司令官は余程優秀なのだろう』

いつもの精度を欠いた狙撃を撃ちながら、後退するように動くデユナメス。すでに20時間の間に管理局の戦力の20%ほどは削った筈だが、攻める手が緩まることはなかった。

『しかし、まだ向こうさんのオーバーSは投入されねえのか？ そろそろ来てもおかしくは……』

『……他の所で出現した可能性もなくはないが、噂をすれば何とやらだ。……来るぞ！』

A・Iのデユナメスが叫ぶのと同時に、ロックオンはGNスナイパーライフルの照準を自分の真上に持っていき、近づいてくる敵機へと合わせようとした……が。

『遭いたかったぞ、ガンダム！』

そこにいたのは、管理局のオーバーSではなく、世界清浄のオーバーSであるグラハム・エーカーのカスタムフラッグであった。漆黒の機体が昼から夜に変わった空を疾駆し、デユナメスに迫らんとする中、ロックオンは冷静な思考を保ちつつ、精度の落ちた狙撃を、真上から墮ちるようにしてやって来るカスタムフラッグに放った。

『そんなもの……このグラハム・エーカーにかかれば何のその！』

『なッ……おい、デユナメス！ フラッグはあんな機動もできるのか！？』

『……普通はできん。グラハム・エーカーだけだろう、あんな変態的機動ができるのは』

それをグラハムのカスタムフラッグは、どう考えても無理矢理としか言えない身体の動きで避けて見せた。明らかに航空力学を無視した動きに、さしものロックオンも呆氣にとられ、暫し言葉を失う。

『人呼んで、グラハム・スペシャル！』

『しまっ……！』

その間にも迫ったカスタムフラッグは、右手でデユナメスの頭部を掴み、そのまま半円状に穿たれた地面へと、後頭部を思いつき叩きつけた。その衝撃で地面は割れ、人大のクレーターができる。デユナメスの視界となるディスプレイに破損箇所を示す警告欄が何個も出現しては消えていく。

『ああ、沈黙して眠るガンダムは、まさに眠り姫……！抱き締めたくなるな、ガンダム！』

グラハムに続き、空から降り立つてくる数々のオーバーフラッグ。グラハム用に改修されたフラッグカスタムとは若干異なるそれらの機体が、合計12機、円を作ってデユナメスを囲む。

グラハムに抱き着かれているデユナメスは、沈黙したままだった。

『ロックオン！？』

空からいきなり現れたオーバーフラッグス隊に驚く暇もないまま、捕らえられたデユナメス。キュリオスは助けにいくべく、機頭を翻し、一路デユナメスの元に向かう。

『ロツク……うああああッ！？』

だが、そんなアレルヤに、突如として頭痛が押し寄せてきた。死んでしまうような頭痛が、アレルヤの脳内でのたうち回る。何が何だか分からないまま落下し、地面に倒れるようにして降りたキュリオスは、次の瞬間、あり得ない物を目にした。

『そ、そんな……これは、脳量子波！？　だけど、そんな……』

アレルヤのモニターに映る、十数人の少年少女たち。覚悟を決めたように口を一文字に結ぶ彼らに、アレルヤはどこか見覚えがあった。それは彼が超兵機関に所属していた時に、同じ仲間として見ていた顔ではなかったか……？

『まさか、超兵！？　でも、超兵機関は僕が、僕が壊滅させたは……そんなッ！？』

十数人の超兵たちから、一人の年長と見える少女が進み出てきた。その顔を見た時、アレルヤは本当にこの理不尽な世界を恨み、そして半ば茫然としつつ、その顔を凝視した。することしかできなかった。

『ま、マリーツ！？』

「「羽付き」……私たちの同胞を数多屠^{ほふ}った罪を、今ここで償いなさい！」

その少女の名は、マリー・パーファシーという。「アレルヤ」という名前を彼に与えた、アレルヤ・ハプティズムのもう一人の片割れとでも言うべき少女であった。そんな少女の憎しみに染まった瞳を見て、アレルヤは自分がこれまでに何をしてきたのかを、何度目かに分からないほど、噛み締めた。噛み締める他なかった。

その味は、酷く苦くて……それでいて、罪の味をアレルヤに感じさせた。

「全員、かかって!」

「「「おおおッ!」「」「」

「あ……う……」

『マイスター! どうしたのですか、マイスター!?』

アレルヤの思考が、頭痛によってか真っ白になった。何も考えられない、何も感じない世界が、アレルヤの脳内に広がる。目は敵を捉えていたが、心は……タブラ・ラサ、白紙である。

しかし、敵である超兵たちはそんなことを露と知らずに襲いかかってくる。あと20、あと10と、刻々と迫りくる超兵たちに、アレルヤはついに思考を放棄した。罪の意識に耐え切れずに。

『マイスター!?!』

「……」

沈黙する中、超兵の一人がデバイスを振り落としてくる。スローモーションになった世界でも、キュリオスは動けない。マイスターが自分の罪を贖おうとしていることに気付いてしまったが故に。

だが、それを良しとしない者が……もう一人、ここにはいた。

『チツ……残念だったな、アレルヤ。俺はお前の贖罪に付き合うつもりは毛頭ないぜ。俺は生き延びるために戦って戦って戦って……戦い貫くぜえー！　ハッハー！！』

沈黙していたキュリオスの、左腕にあった盾が二つに割れた。まるで鉄のようなそれは、最も近づいていた超兵の一人の胴体を挟み、そしてその奥に仕舞われていた刺突用の剣でその体を貫き、一瞬で絶命させた。

それに物怖じした超兵たちを睥睨^{へいげい}しながら、アレルヤからハレルヤへと人格が変わったキュリオスが、空に飛翔する。それを追うようにして飛び立つ超兵たち。

『いくぜ、キュリオス！　アレルヤじゃねえからって手を抜くなよ！』

『……Yes、ハレルヤ。手は抜きませんからご安心を』

そして、超兵と超兵による戦闘が始まった。一対多で分が悪いのが分かっているハレルヤと、油断なく臨戦態勢を超兵。このどちらにも勝敗が読めない極限の戦闘に、ハレルヤは会心の笑みを浮かべながら、ビームサーベルを抜く。そのデータでしかない頬に、一筋の冷たい汗を伝わらせながら……。

13・ガンダム破壊作戦：開始（後書き）

5000字の縛りにより、大軍に追い詰められる大事なシーンは抹消されました。ご愁傷様です。

なお、この作品でもアレルやマリィ、マリィと叫びます。書いている方としてはある意味楽ですが、何だかなあ、と思い耽ったりすることもあります。

今回、一番目立ったのはアレルやなはず。グラハムさんも抑え気味……抑え、気味？ これで抑え気味なら、グラハムさんのフルスロットルはどれくらいなのでしょう？ 謎です。

次回の更新予定日：2011年9月10日（土）

14・ガンダム破壊作戦：中盤（前書き）

ついに始まった「ガンダム破壊作戦」。驚異的な強さを見せるガンダムたちだが、圧倒的な物量により次第に消耗させられていく。そして止めとばかりに投入されるオーバーSの魔導師たちに、ガンダムは追い詰められていく。

【困難に遇って倒れるようでは、汝の力はまだ弱い】

——つぁーる様から、『旧約聖書』より

14・ガンダム破壊作戦：中盤

——新暦71年——

ロックオンがグラハムと、ハレルヤが超兵と戦っている頃。それとほぼ同時刻に世界清浄の秘密基地がヴォクシーIIジハードにより陥落した。それはこの紛争の停止を意味し、数十キロ先からそれを見ていたティエリアたちは、すぐに撤退しようとした。

『よし、僕達も二手に別れて撤退しよう、刹那』

『ああ。……ロックオンたちも無事に撤退しているだろうか？』

『それは分からない……が、まずは自分が撤退することを念頭に置くべきだ』

空を飛ぶエクシアと、砂漠をホバーリングで進むヴァーチェとに別れ、それぞれに決められていた撤退経路を進む2機。……が、カティはこれすら予測しており、まずはヴァーチェの方に虎の子の高ランク魔導師を派遣した。

『マイスター、接近してくる敵影を発見しました！ 数は……4です！』

『撤退まで読まれていたか……！』

「あの時のガンダムとは違う奴みたいだが、お前もガンダムなんだろう！？ だったら、オレの敵だあゝ！！」

その内の一人には、AAA+ランクのパトロック・コーラサワもいた。パトリックはM・Sのイナクトを展開させながら、オーバースランク魔導師の後ろでガンダムにリベンジできることを喜んでいた。オーバースの魔導師はそのハイテンションに、若干迷惑そう

な顔をしていた。

「パトリック、嬉しいがるのも大概にしろ。貴様らは私のサポートをしておけばよいのだ。それ以外は邪魔になるから、何もするなよ？」
「……へいへい、分かっていますよ。天下のオーバーS様には逆えませんかからね」

「分かればいい、分かれば」

オーバーSがデバイスを起動させる。巨大な戦斧がオーバーSの右手に現れた。オーバーSはその鋭利な刃に舌を這わせながら、狂った赤い瞳でヴァーチェの体軀を舐めまわすように見つめてくる。

「管理局も、よりにもよってこんな戦闘狂を送ってくるとは……しかも、AAAクラスの魔導師を3人も付けるとは、余程ガンダムを万死させたいようだな」

「ですが、狂っていないオーバーSなんて、それこそ半分もいませんよ、マイスター。国家すら一人で容易く滅ぼせる力を持った人間は、狂う道しか残されていないとも言いますし……」

「そうだな。それもまた然りだ。……来るぞ！ 出力全開！」

「Yes,meister！」

空から降下してくるオーバーSに対し、ヴァーチェはGNバズー力を構え、迎撃の態勢を取った。それが争いの合図となり、ヴァーチェとオーバーSの、オーバーS同士による超常の戦いが始まった。

世界清浄の秘密基地を、最後にはたった一人で制圧してしまった

マッチョな男、ヴォクシーは、ようやく回復した通信を使って、カティの指示を仰ごうとしていた。

「カティの姐さんよ、世界清浄の基地は制圧したぞ！ 俺様はこれからどうすればいい？」

40代の男が、それよりも若い女性に姐さんをつけるという、酷くシニールな光景があったが、カティはメガネの位置を直しながら、まるで気にしていない様子でヴォクシーに指示を出した。

どうやら以前からカティは姐さんと呼ばれているらしい。そして、カティは相棒でもあるパトリックがヴォクシーと一緒に訓練を行っているのも何度か見ているので、別段、二人は知らない仲ではなかったのだ。かといって、それほど親しいわけでもなかったが。

『ヴォクシー』ジハード。貴様は「剣士」の追撃に当たれ。今、探知魔法の空白地帯のデータを送る。……一騎討ちとなるが、くれぐれもレクスⅡガバレートのように……』

カティは以前に見た、「剣士」とレクスの戦いを思い出す。オーバースを持ってしても倒せなかったガンダムに、カティは最大の警戒心を抱いていた。

「死ぬな……か？ 悪いが、俺様は死なんぞ？ 何と言っても俺様は……」

いつになく厳しい表情をするカティ。それをリラックスさせるように、ヴォクシーは、

「『最強』の魔導師、ヴォクシーⅡジハード様だからな！ がッは

ッはッ！」

と、笑い飛ばしてから、データにあった「剣士」の予測地点へと飛んでいった。なお、このデータには無限書庫側の協力も幾らかあったのだが、それに気付けたのはカティしかいなかった。大半の局員は当然のような顔でデータを受け取っていたのだが……それを異常な光景だと思っていたのも、またカティのみであった。

たった6年前に出来たばかりの部署に、上から下までの情報全てが集まっているというこの現状。それに異常さを感じながら、カティは目の前で行われている作戦の方に集中すべく、頭を切り替えた。

ディスプレイの中では、オーバーS魔導師を相打ちに近い状態で殺したヴァーチェが同時に力尽き、パトリックたちに捕らえられていた。あのオーバーSは民間人を殺したこともある狂人なので、殺されたことには寧ろ精々としたものを感じるが……問題はヴォクシーの方だった。

たった一人でガンダムと相対しなければならぬヴォクシー……その彼が今、「剣士」と接触するのを、カティは冷静な思考のまま、受け止めた。

『……マイスター！ 敵と思しき反応が一つ、こちらに向かってきます！』

『なにッ！？ ミス・スメラギの撤退路まで予測されていたか……迎撃するぞ、エクシア！』

『Yes, meister!』

すでに茜色に染まった空を飛んでいたエクシアは、遠方からやってくる敵に備え、左右のGNブレイドを両手に持った。刀剣の刀身が夕陽と同じ色を反射し、^{すが}眇めるような色を放つ。それとほぼ同時に、エクシアの正面から点のようなものが近づいてきた。

『……来たか！』

『照合します！ ……えっ！？ マイスター！ 相手はあの管理局

『最強』のヴォクシー!! ジハードです！ 今すぐ撤退を……』

『オレが……ガンダムだ！』

点のような人影が、次第にその輪郭を露わにする。^{じんかく}赤銅色の分厚いB・Jを内部から押し上げているのは、並々ならぬ筋肉であり、鎧のようなジャケットがやけに印象的であった。白髪の混じった頭髪は後ろに撫で下ろされ、邪魔にならないようにされていた。

「おお！？ 俺様を見ても真っ直ぐ向かってくるとは……それでこそ戦い甲斐があるってもんだぜ、ガンダム！」

ヴォクシーは闘牛のように向かってくるエクシアを嬉しそうに見ながら、鋼鉄のような筋肉をさらに盛り上げた。ヴォクシーのデバイスは鎧を思わせるこの防御特化のB・Jそのものであり、彼はエクシアの一撃を真っ向から受け止めようとしていた。

『舐めるな!』

加速する勢いをそのままに、エクシアが上段の一撃をヴオクシーに叩き込んだ。次いで横薙ぎ、刺突、×斬と、次々と剣技を繋げていく。だが、それらはヴオクシーのB・Jを浅く斬るだけで終わり、その傷もすぐに魔力によって回復させられる。

「俺様のB・Jに傷をつけるとは! 気に入ったぞ、ガンダム!

これはお礼だ、受け取るがいい!」

『何故だ……何故切れな……何ツ!?!』

「俺様パンチッ!」

『ぐはあッ!?!』

『な……ただのパンチでこの私を凹ませたッ!? 何て馬鹿力!』

笑いながら放ったヴオクシーのただのパンチは、エクシアの言う通り、ガンダムの装甲を僅かながらも凹ませていた。最新の素材でできた、GN粒子の恩恵を受けるE-カーボン製の装甲すら、ヴオクシーの馬鹿力の前では霞んでしまった。その事実、エクシアはただ驚愕するだけだった。

「ほお? 俺様のパンチを直に受けても壊れんとは……一体何でできているのだ、アレは?」

『ゲホッ! ゴホッ! い、一体何が起きて……!』

『マイスター、逃げて下さい! あんなバグキャラ、相手にし切れません!』

「まあ、ともあれだ……俺様はお前を破壊しなければならんだ。悪く思うな……よお!」

『ガ……ガハアッ!?!』

『マイスター!?!』

ヴオクシーの蹴りを剣越しで受け止めたエクシアだったが、左のGNショートブレイドはヴオクシーの蹴りの前に碎け散り、余りある威力を保った蹴りが、エクシアの身体を大きく蹴飛ばした。エクシアはヴオクシーと似た赤銅色に染まった砂漠の上を七転八転していき、止まった頃には数十メートル以上も転がされていた。

仰向けになつて空を見上げる格好となつたエクシア。その上空に位置取つたヴオクシーは、エクシアを見下ろしながら、下げた両拳に多量の魔力を集中させた。

『ガハッ！ ガハッ……！』

『マイスター、しっかりして下さい！ マイスター……！』

『ハア、ハア……ガン、ダム』

夕陽の中に浮かぶヴオクシーを見上げ、その姿に、あの時のガンダムの姿を思い重ねた刹那は、無意識にそう呟いた。刹那にとっての『神』であるガンダムを掴もうと、エクシアの腕を持ち上げる。その指は中空を握るだけであつたが、刹那はその時、一心で『神』たるガンダムを求めていた。

そして、同時に……地に倒れ伏す自分は、ガンダムにはなれないのだと……思った。

だからこそ、彼はガンダムを求める。人が手に入らないモノを求めてしまうように、彼もまた、自分がなれなかつたガンダムを求める。

『ガン、ダム……ガン、ダアアアム……！』

『ま、マイスター……そこまで私のことを……！』

「まだ動けるのか……こりや破壊するには惜しい相手だったな。も

う少し剣技を磨けば結果が違っていたかもしれん。何にせよ、これでさようならだ、ガンダムと呼ばれたロストロギアよ！」

ヴオクシーの攻撃を受けても、未だ此方を掴もうとしているエクシアに驚きながら、ヴオクシーは両腕の魔力を解放しつつ、エクシアへと降下していった。両腕に溜まった魔力が大気を振動させ、エクシアの装甲表面を震わせる。

「俺様ダブルパン……何イツ!？」

そして、あわや直撃する……というところで、赤い粒子ビームがヴオクシーとエクシアの間に割って入ってきた。突然の攻撃に思わず後退したヴオクシーだが、その上空からは赤い粒子が舞い落ちてきた。

「きやは！ 刹那、何してるの、そんなボロボロな格好で？ 敵が前にいるのに黙ってやられてるようじゃ、ガンダムマイスター失格だよ？」

「シツカクダ、シツカクダ！」

「お、お前は……ネーナ・トリニティ!? どうしてここに……」

「嘘……まさか、ガンダムスローネドライ!? スローネシリーズを投入するなんて……!」

赤と白の装甲が夕陽の輝きを受けて煌^めいた。その背からは赤いGN粒子が散布され、翼のようなものを形成していた。右手のハンドガン^{ハンドガン}をヴオクシーに向けながら、ガンダムスローネドライのガンダムマイスター、ネーナ・トリニティは、刹那に向かって二言、

「どうしてって、決まっているじゃない。貴方たちを助けに来たのよ」

と、天使のような無邪気な声で答えた。

「おいおい……聞いて無いぞ、カティの姐さんよ。他にもガンダムがいるなんてな……！」

見つめ合うエクシアとスローネドライを見ながら、ヴォクシーはじりじりと後退していった。幾ら彼でも、オーバース級の2機を相手にできるとは思っていなかった。そんな彼の目の前で、スローネドライは身体を回転させると、

『それじゃ、始めましょうか。ドライ、H A R O、ステルスフィールド！』

『Yes, me i s t e r。ステルスフィールドを展開します』
『テンカイスルゼ、テンカイスルゼ！』

噴射口のある大きなバックパックから、巨大な赤い翼を、数十キロの範囲に渡って広げていった。赤い翼——疑似GN粒子を広範囲に渡って散布するこのステルスフィールドは、魔導師の探知魔法や念話などを完全にシャットアウトし、ガンダムの反応を完全に消失させた。

そして、その翼を広げる様は、刹那から見て、まるで天使のようであった。

『兄貴！ アレは……』

『ああ、ネーナのステルスフィールドだ。どうやら無事、エクシアを回収したようだな』

砂漠のある地点に点在していた岩山の中で、スローネドライのステルスフィールドが広がっていく様を見ていたヨハン・トリニティとミハエル・トリニティは、すぐさま彼らのガンダム——ガンダムスローネアインとガンダムスローネツヴァイをインストールし、ガンダムの回収を行うべく、岩山から飛び出していった。

『それじゃ、オレはキュリオスを助けに行くぜ！』

『なら、私はデユナメスとヴァーチェを助けよう』

愉しげなミハエル——スローネツヴァイの様子とは真逆に、スローネアインのマイスターであるヨハンは、憂鬱気な溜息を吐かずにはいらなかった。

『（これで、CBは現在切れるカードを全て出し切ったわけか。……ジungkスがまだロールアウトしていない今、イノベイドたちには頼れない……）』

自分達がCB側の奥の手であった以上、恐らくこれからは総力戦になるだろう。そうなれば管理局もまた本腰——本気を出さざるを得なくなる。そうなった時に、果たしてCBは時空管理局という世界そのものに勝てるのか……？

その不安を一抔、抱えながら、スローネアインは今自分がすべき仕事に集中するため、空を全力で駆けていった。モニターに映ったヴァーチェを助けるべく、右肩の砲塔で敵のAAAランク魔導師の一人に照準を合わせる。

『……今は、任務に集中するか！　アイン、GNランチャー発射！』
『GNランチャー、発射します』

右肩から発射された赤い粒子ビームが、魔導師の胴体を貫く。てんやわんやとなった魔導師たちに、ヨハンはもう一射発射し、もう一人を絶命させた。

そして、一人となったAAAランク魔導師が逃げていくのを見届けたヨハンは、撤退を始めたヴァーチェを見送ってから、デユナメスの救出へ向かった。

14・ガンダム破壊作戦：中盤（後書き）

前書きを前話の要約にしてみようという試み。不評だったら止めます。

ヴォクシーは某魔法少年が活躍する漫画の、例のバグをモデルにしています。モデルにしているだけで、全然似ていないのですが、今のエクシアでは相性も合わさって、歯が立たない程度には強いです。今作品筆頭のバグキャラであるヴォクシーですが、弱点として、頭を使う理論的な戦い（例：クロノ）を持ち込まれると弱いです。

シアにフラグが立ちました！ √を開放しますか？ ↓ Yes o

r No?

次回の更新予定日：2011年9月17日（土）

15・ガンダム破壊作戦：終盤（前書き）

撤退を始めるCBのガンダムに、管理局のオーバースがついに投入された。捕らえられる寸前まで追い込まれたティエリアと刹那だが、そこに「トリニティ」の名を冠する三機のガンダムが舞い降りる。

【三歩先を見るのはいいが、君は足元の穴に気づいているのかね？】

- - EXAM様より

15・ガンダム破壊作戦：終盤

——新暦71年——

グラハムのフラッグカスタムに頭を鷲掴みにされたデユナメスは、左に握った拳銃でその手を撃ち抜こうとしたが、撃つ前に拳銃を蹴り飛ばされてしまう。右の拳銃はすでに取り落としてしまっている。で、残っているのは右肩のスナイパーライフルだけだった。

「このままお持ちかえりといきたい所だが……オーバーフラッグス隊！ バインドの準備はまだか！？」

「あともう少しです、隊長！」

「よし、ならばこの一時！ 凌ぎさせてもらうぞ、ガンダム！」

『冗談ッ！』

軋みを上げる頭部の装甲に冷や汗を垂らしながら、デユナメスがフラッグカスタムの片手を握りしめた。尋常でない握力がフラッグカスタムの装甲を歪ませていく。

「があ……！ だが、心頭滅却すれば、痛みもまた和らぐもの！

これしきのことだええええい！」

『クソッ、噂通りだな！ ……ん？ あれは……』

『……ガンダム。ガンダムスローネアイン？ どうしてここに……』

痛みを耐え忍ぶフラッグカスタム。デユナメスはその後方で、黒に染まった機体を発見した。右肩の砲塔が動き、そこから赤い粒子ビームが撃ちだされる。それは正確にオーバーフラッグの一機を貫き、爆散させた。

「な、何だと!？」

グラハムの驚愕する声が聞こえるが、その合間にも爆発音は2つ、3つと増えていった。そして、デユナメスは唐突な襲撃に気を取られた隙を突き、フラッグカスタムの手から逃れた。

「ちい……新型のガンダム!? 聞いていないぞ、ガンダム!」

右肩のスナイパーライフルを手に持ったデユナメスが、オーバーフラッグの一機を射抜く。胸部を撃ち抜かれたオーバーフラッグがまた一機、炎に包まれた。

「くっ……口惜しさは残るが、これ以上部下をやられるわけには……ハワード、ダリル! 撤退するぞ!」

「了解!」

この状況を不利だと感じたグラハムは、自らが殿となって部隊を撤退させた。デユナメスとスローネアインは撤退していく敵機が見えなくなるまで警戒しながら、双方向通信を開いた。

「よお、ヨハン。チーム・トリニティが出撃するたあ、聞いて無かったぜ?」

「このプランはあくまでも非常時用だったからな。ヴェーダが伝える必要はないと判断したのだから」

空いている手でハイタッチをするデユナメスとスローネアイン。お互いが顔見知りだったのか、その声には先程までの緊迫感はなく、親近感が現れていた。

「そっか……それで、これからオレ達はどうすればいいんだ?」

『ティエリアはすでに撤退している。刹那には妹のネーナが、アレルヤには弟のミハエルが向かっている』

『OK、つまりオレは、アンタと一緒に逃げればいいんだな？』

『……理解が早くて助かる』

グラハムたちの姿がデュナメスたちから完全に見えなくなった。それを見計らい、彼ら2機も撤退するべく、動き出した。

ハレルヤが操るキュリオスと、マリー・パーファシーが率いる超兵部隊との戦いは、圧倒的な反射速度で熾烈^{しれつ}を極めたが、やはり数の利によって、キュリオスの圧倒的不利であった。

『クソオー！ 一対一なら負けねえってのによオー！ キュリオス！ 本当に手を抜いてんじやねえだろうなあ！？』

『当たり前です！ 私の性能は今、フルに発揮されています！ つまり、それだけの力を発揮しても、目の前の敵はそれと同等ぐらいに速いのですよ！』

『回り込め！ 正面と後方から挟み撃ちにする！』

『了解！』『』

オレンジ色の機体を空に飛ばせるキュリオスを、正面と後方から

挟み撃ちにしようとする超兵部隊。キュリオスがそれに気付き、直進から直角に軌道を変更しても、超兵部隊からはマシンガンのような連射による魔導弾丸の十字砲火クロスファイアが放たれ、キュリオスを執拗に追いまわす。

『ガッ！？』

広範囲をカバーする十字砲火を避け切れずに、キュリオスが足に被弾する。バランスを崩したキュリオスに、その隙を逃さんとはかりに超兵の一人が距離を詰める。

『オレを舐めんなよ、お前らぁー！』

近づいてきた超兵の一人を、崩れた体勢から回転するようにして斬り捨てる。鉄はみたいに開閉する盾に内蔵されていたGNシールドニードルに血が付着し、それを振り払うと、背後からいきなり衝撃がやってきた。

「よくも皆を！ ガンダムッ！」

M・S特有の特殊ボディースーツを纏ったマリーが、叫びながらキュリオスの背面に弾を撃ち込んでくる。いくらここにいる超兵の誰よりも反射速度が速いハレルヤといっても、死角まではカバーできない。それを上手く突いた攻撃であった。

『いってえーな、女ぁぁぁぁぁ！』

「はぁぁぁぁッ！！」

両刃のついたカーボンブレイドとニードルが、白い火花を散らし、て切り合わさる。キュリオスは2戦目でカーボンブレイドを弾くと、

その無防備な腹へ、右手のGNビームサブマシンガンの銃口を押しつけた。

『さよならだ、おん……なにッ!?!』

「隊長は、やらせない!」

「堕ちろ、ガンダム!」

『こ、こいつらあ……!』

意識がマリィに向いていたキュリオスに、超兵の隊員たちは一斉射を喰らわせた。完全に不意を突かれたキュリオスは、地表まで吹き飛ばされてしまう。衝撃で意識が一瞬飛ぶが、上空からの砲火がそれを許さない。

『うおおおおおッ!? くっそつがああああッ!!』

上空から押し付けるように、キュリオスへ放たれる魔導弾丸の雨。魔法よりも実弾に近い性質を持つ弾丸が、キュリオスの装甲に音を立てて着弾する。その場から抜け出そうとしても、今のキュリオスは身動き一つ取れなかった。

さすがにヤバいと感じたハレルヤだが、敵は遠慮なしに弾を撃ちまくり、キュリオスをこの場に釘付けにさせていた。掲げている盾から伝わる衝撃は、全く弱まる気配を見せない。

「撃って! 撃って! 撃ちまくって! 弾が無くなったら、即座に補給部隊に連絡し、ここにありったけの弾を転送させて! このチャンスを利用してはいけません!」

「……! た、隊長! 向こうから何か来ます! アレは……新手的ガンダムです!」

「……え!?!」

「それも、恐らく新型かと思われ……敵機から何かが射出されました！」

「全員、攻撃を一旦中止！ 敵機から放たれたモノに警戒を！」

攻撃を中止した超兵部隊だったが、その一人に牙のような物体が噛みつく。ビームやサーベルで四方から攻撃する牙——ファングに、超兵部隊は一人、また一人と負傷していった。

「何！？ 何なの、この兵器は！？」

「これは……ファングか？ ということは……」

「はっは——！」

攻撃が止み、やっと上を見ることができるようになったキュリオスは、そこで、赤いに近い橙色をした機体が、超兵の一人を手に持った大剣で斬り裂いたのを見た。さきほどまで苦戦していた超兵たちは、どうやら未知の兵器に戸惑いを覚えているようだった。

「ミハエル・トリニティ！？ それに、あれはガンダムスローネツヴァイ！？ どうして彼らがここに……」

「ハッ！ 決まってんだろ。敵を殲滅するためだ！」

「た、隊長！ 羽付きが……ぐぎゃあああッ！」

すっかり自由になった身で、超兵の一人に接近し、その喉笛を二ードルで貫く。一瞬で絶命した超兵を盾にしながら、キュリオスは超兵部隊から離れていった。それを追おうとした超兵たちを、ファングが食い散らかす。

「その動きは、ハレルヤか！ 久しぶりじゃん！」

「そうだな、ミハエル！ だが今は再会を喜ぶよりも……」

「敵を蹂躪する方が先だあ——！！！」

キュリオスの攪乱^{かくらん}に合わせるようにして、ツヴァイの牙と大剣が超兵の身体をボロ切れみたいに斬り捨てていく。突然の襲撃者によって部隊の隊列が掻き乱されたマリーは、ガンダムへの憎しみをさらに深めながら、撤退することにした。

「……行つたな。それと、キュリオス。あの女のことを、アレルヤに言うんじゃないぞ？」

「……ええ、分かっています、ハレルヤ。マイスターがあの子のことを知れば、きっとマイスターは戦えなくなりますからね」

見えなくなった敵と同様に撤退するキュリオスとスローネツヴァイ。ハレルヤとキュリオスのこの会話を、アレルヤは知らない……。

——ガンダム破壊作戦終了後から4日が経過——

上下左右の間隔を失いそうな、漆黒の空間の中、3つのモノリスが中空に映しだされた。それぞれに議長、書記長などの文字が描かれたモノリスだが、その下に、無限書庫で司書長をしているユーノ・スクライアはいた。

『それでは、報告を聞こうか、スクライア司書長』

「はい。まず、世界清浄の基地を制圧するファーストフェイズは完遂しましたが、その後のセカンドフェイズ、つまりガンダムの破壊につきましたは、完全に失敗しました」

『一勝一敗……と、言いたいところだが、この作戦の概要はガンダムの破壊にある。それができなかったとしたら、此方側の完敗だなそれで、今回出た被害の詳細はどうなっているのだ？』

「それは、こちらの資料になります。……こちらの被害は見ての通り酷いもので、死者だけでも300名以上。負傷者を合わせますと、2000名を超えます」

『しかも、中にはオーバーSが一人と、AAAランクが3人も含まれている。これは由々しき事態ではないか、同士諸君よ？』

『左様。管理局の威信に関わる。いくら緘口令^{かんこうれい}を敷こうがな。それに、新たなガンダムも確認されたそうだな、スクライア司書長？』

「はい、これらのことですね？」

様々な資料をモニターに映すユーノは、ある資料をクローズアップした。資料には三枚の画像が差し込まれており、それぞれに「黒い銃」「橙の剣」「赤き翼」と上に銘打たれていた。

『説明を、スクライア司書長』

「はい。私たちはこの新型のガンダムを、右から「黒い銃」、「橙の剣」、「赤き翼」と仮名しました。そのランクはあくまで推定ですが、黒い銃と橙の剣がS、赤き翼がAAA+かと思われます。

その詳細は下記の項目を読んで下されば分かるかと……」

『成程……どうやら最初の4機とは色々な意味で別のガンダムのようだ。粒子の色といい、粒子ビームの色といい、違いがあちこちらに見受けられる』

『ふむ……ふむ……無限書庫が掴んだ情報だと、この新たな3機の方が疑似太陽炉というモノを搭載したガンダムだということだが、

確証はあるのかね？ それと、オリジナルと疑似太陽炉の違いを説明してくれたまえ」

「はい。まずは両者の違いを述べたいと思います。その前に、まずはこれを……」

言つて、ユーノがモニターに映したのは、C B内でも絶秘とされている太陽炉と疑似太陽炉の設計図であつた。

『これは？』

「GNデバイスのコアとなる太陽炉の設計図です。これを見るに、太陽炉と疑似太陽炉にはTDブランクットという部品が存在するかどうかの違いがあり、それにより疑似太陽炉のほうは、出力はオリジナルと同等でも、様々な弊害へいがいを持ち合せているようです」

『例えば……何だね？』

「まず、中心部品を欠いているので、オリジナルよりも構造の強度が弱くなっています。それによつて、出力は同じでも、それを発揮するマシンにどうやら差が出るようです。ここは僕もまだ詳しくは調べ切れていませんので、あまり説明はできません。次の違いですが……」

太陽炉の部品を指差しながら説明をするユーノ。その顔から表情を窺ふことはできない。能面を被つたような無表情のまま、ユーノは最高評議会と向き合う。

「太陽炉はほぼ永久的なエネルギーの供給、及び生産を可能にしていますが、疑似太陽炉にはそれはなく、稼働時間に制限があります。これが最も大きな違いと言えるでしょう」

『ほう……ならば、波状攻撃を仕掛ければ落とすのは容易いか？』

「そうですね。補給をさせないで戦わせれば、いつかはエネルギー切れで簡単に落とせるかと……」

『では、オリジナルの方はどうすればいい?』

「オリジナルの4機は、それこそオーバースの力押しで攻めるのがよいかと。一機に対し、オーバースを複数当てれば、それで解決は可能かと思います」

『……分かった。その意見は採用しよう。それで、他に報告すべき事柄はあるかね?』

「はい。寧ろ、こちらのほうが僕にとっては本題です」

ガンダムに関する資料を閉じたユーノは、今度は「ロストロギア」と題されたデータを映した。ロストロギアの名は「ナイトメア・デイメンション」と書かれており、その名を見た最高評議会の面々は、一様に驚きを露わにした。

『まさか、見つけたのか!? アルハザードの御伽噺おとぎばなしに出てくる遺物を!?!』

『爆発すれば、いくつもの次元を飲み込むとされる、あの悪夢の爆弾を……!』

「はい。ですので、この件には早急な対応を求めたいのですが……」

『……よからう。予算と人員を直ちに準備させ、急ぎ回収させる。発見、御苦労であった、スクライア司書長。無限書庫の今度の予算と人員を考えておく』

「はい……ありがとうございます、議長」

一礼して下がるユーノ。最高評議會は彼が齎した情報についてさらなる会議をするため、一度議會を閉じてから、また開く。

その頃には、もうCBのことなど誰もが忘れていた。それはユーノと同じであった。CBよりも更に脅威だと見做された第一級搜索指定遺物「ナイトメア・デイメンション」に、管理局は注視せねばならなかったから。

15・ガンダム破壊作戦：終盤（後書き）

無限書庫の使い勝手は異常。こんなあったらそりゃゆりかごにも勝てますよ。相手の情報が下手すりゃ全部分かるって、どういふことなの、一体……？ どうすれば勝てんのよ！？

次回の更新予定日：明日

幕間―3（前書き）

多大な犠牲を出したガンダム破壊作戦が終了した後、御伽嚙でしかないとされたロストロギア「ナイトメア・デイメンション」が発見される。管理局はC Bのことを置いて、まずはこの危険極まりないロストロギアに専念することにした。

【神様？ いるに決まっているじゃない。いるからこそ、まだこの「程度」なのよ。かろうじて世界は成り立っている。神様がいないかったら、こんなもんじゃ済まないわ】

- - 鴨川柊様から、『紅』の村上銀子より

幕間―3

――新暦71年――

眩い輝きを放つ黄金色の髪を両端で結ったフェイト・T・ハラオウンは、アルフと一緒に沢山の荷物をまとめていた。そのアルフはついさきほど無限書庫に勤めに行ったので、ここにはいなかった。相棒のいない寂しさを感じながらも荷物をまとめ終えたフェイトは、それを見計らったように鳴った玄関のチャイムに応じるため、居間から出る。

「はーい、どなたです……って、お兄ちゃん？」
「久しぶりだな、フェイト」

しかし、玄関の向こうにいたのは予想外の人物であった。向こう側にいたのは黒い短髪が特徴的なフェイトの義兄であり、執務官としても先輩であるクロノ・ハラオウンだった。クロノはお土産と思しき手提げ袋を手に、玄関の扉の前に立っていた。

「どうしたの？ 2ヶ月ぶりに任務から帰ってきたのは知っていたけど、エイミイさんと一緒にいたんじゃない……」

「いや、今回はちょっと公的な話もあってな……エイミイにはもう通信を入れてある。30分ほど文句や愚痴を聞かされたがな」

「くす……やっぱり、お兄ちゃんはエイミイさんには勝てないみたいだね」

「そういうフェイトだって勝てないじゃないか。全く……年々、口が達者になってきているような気がするよ」

談笑をしながらクロノを居間に通すフェイト。お茶の用意をする

ために台所に向かい、緑茶を湯呑に注ぐ。この辺は彼女に縁の深い第97管理外世界の風習だった。無論、緑茶に砂糖を入れるような真似はしない。

「……」
「……」

持ってきた緑茶を静かに飲む二人。湯呑を四角いテーブルに置き、暫し、沈黙する。そして、それから何秒か経ってから、クロノが話を切り出した。

「フェイト、長期航行にでかけるとい話は本当なのか？」

「うん。何でも、第一級搜索指定遺物「ナイトメア・ディメンション」が発見されたみたいで、その回収チームに配属されたの」

「そうか……ナイトメア・ディメンションが発見された、か。アレもアルハザードの御伽噺に過ぎないと思っていたが、おとぎばなし実在していたんだな」

そうしみじみと呟くクロノの顔は、苦渋に満ちていた。恐らくは「P・T事件」のことを思いだしたのだろう。あれも実在するかどうかも分からないアルハザードの存在が引き起こした事件であり、フェイトはその事件で心に深い傷を負ってしまった。

それを心配しての訪問だろうかと思いつつ、フェイトは義兄を心配させまいと、努めて明るい声を出した。

「大丈夫だよ。例えアルハザードに関連する任務だって、私はもう大丈夫。だから心配しないで、お兄ちゃん。ちゃんと任務を終えて帰ってくるから」

「……信じているからな、フェイト」

「うん！」

本当は心配で心配で堪らないのだろう。けれど、フェイトの決意を踏みにじらないように、クロノはその気持ちを必死に抑えていた。なのはも、はやても、アルフもないが、彼女だってもう15歳になった。それこそ、純真さしかなかったあの頃とは全く違っているのだ。

フェイトが執務官になって、もう2年が経つ。大人の世界の良い面も悪い面も吸って生きてきた彼女は、強かさを身に付け、すでに大人の仲間入りを果たしている。そんな彼女を信じるために、クロノはそこで、それ以上の言葉を発しなかった。

「まあ、この話はその辺にして、フェイトに聞きたいことがある」

「……？ 何を聞きたいの、お兄ちゃん？ エイミさんの時みたいにスリーサイズを聞いてきたら、さすがに私だって怒るよ？」

「アレは違うんだ！ アレは、指のサイズを聞くとうとして間違っ

……！」

「え？」

「え？」

指のサイズ？ と首を傾げたフェイトに、クロノは大慌てで言い訳をした。フェイトはやや納得がいかないように頬を膨らませたが、話を戻すという義兄の言葉に素直に頷いた。年頃の少女としては、驚くべき純粋さであった。

「……ここ最近のユーノについてだ。何か、あいつについての話を聞いたことはないか？」

「ユーノ？ ……ううん、聞いたことないよ。けど、ユーノがどうしたの？」

「いや、聞いていないのならいいんだ。僕の勘違いってこともあるからな」

一人で納得するクロノに、フェイトは思いっきり疑わしい視線を投げかける。愛する義妹からの痛烈な視線は、クロノの心をヤスリで削るように傷つけ、言葉を引き出すことに成功した。……本人はきっと、無意識だったのだろうが、それはクロノに対し酷く有効だった。

「アイツが無限書庫に勤めて出してからなんだが……どうやらアイツは、最高評議会と何度も会合をしているみたいなんだ」

「……え！？ それって、凄いことじゃ」

「ああ、凄いことさ。何てったって、管理局の頂点に立つ彼らの議会に参加できるんだからな。……それが非公開・非公式の会合じゃなきゃ、とつくの昔に祝ってやったさ」

「……え？」

クロノが言った言葉に、フェイトは頭を真つ白にさせた。最高評議会には黒い噂がよく流れる。それは彼らがよく非公開・非公式の秘密会議を開くためだ。そして、その黒い噂はあながち間違っていない。火のない所に煙りは立たないからだ。だとすれば、ユーノはまさか……

「そんな……それじゃあユーノは、まさか……！」

「僕だって信じたくはない。ないが……執務官として言おう。ユーノは、最高評議会と噛んで、何か非合法的な行いをしている可能性がある」

「……！」

義兄の口から伝えられた、友人の疑惑。フェイトは信じたくなか

ったが、クロノの苦しそうな顔を見て、信じるしかないと思った。
最年少で執務官となり、その才能から友達が少なかったクロノの、
唯一親友（本人は悪友と言って譲らないが）とも言えるユーノ。彼
が犯罪者かもしれないという事実は、きっとクロノが一番辛いはず。

「……それじゃあ、私はどうすればいいの？」

「任務から帰って来た後でいい。それとなく、はやてやなのはたち
にも聞いてみてくれ。僕はこの後、彼女に会えないほど忙しくなる
から、フェイトに任せようと思う」

「分かった、任せて」

「頼んだぞ、フェイト。それと……無事でな」

「うん。お兄ちゃんも任務、気を付けてね」

「ああ。まだまだフェイトには負けられないさ」

笑いながら玄関の靴を履いたクロノの、最近になってようやく伸
び始めた背を後ろで眺めながら、フェイトとクロノは手を振って別
れた。そしてフェイトは、何よりも先にお義母さんであるリンディ・
ハラオウンに通信を繋ぎ、クロノがエイミィに指のサイズを聞いた
ことを報告した。

リンディはそれを聞いて、「あらあら」と、妙に嬉しそうな声を
出した。フェイトも、やっと義兄とエイミィが結婚するのだと、嬉
しげに話す。

つまり、クロノの言い訳は最初からフェイトに見破られていたの
であった。いや、恐らくは最初の、指のサイズの話が出た時から、
もう……。

「いい天気だね」

「せやな。本当に……ええ天気やわ」

「って、何和んでんのよ、アンタらは!？」

澄み切ったように快晴な青天下で、金髪のお嬢様であるアリサ・バニングスの怒声が轟く。しかし、その怒声の先にいた高町なのはと八神はやては、それを聞いてものんびりとしたまま、

「だって、最近起きた重大事件って言われても……」

「私らにはなーんも、思い浮かばれへんもの。次元世界は今、平和そのもので、アリサちゃん」

と、答えた。アリサは腕組みを崩し、溜息を吐きながら、

「じゃあ、フェイトの長期任務って何なのよ？そこを私とずずかに説明しなさいよ、アンタら!」

「えっとね……何でも、御伽噺に登場するようなロストロギアが見つかって、リンディさんは言っていたよね、はやてちゃん？で、フェイトちゃんはそれを回収しに行ってたって……」

「確かにそう言っていたわ。でも、今回の任務はそれほど危険なものやないで？ユーノ君の無限書庫が本格的に稼働したおかげで、ロストロギア関連の任務は昔とは比べ物にならんほど安全になってるんやから」

「……でも、危険もあるんでしょう、はやてちゃん？」

「あることはあるけど……今回みたいに、詳細まで完全に把握できたロストロギアなら、失敗はありえへん。それこそ、誰もが知る御伽噺に登場するような、有名なロストロギアだったから、情報が随分と揃っていたみたいやで」

鈴村すずかの心配する声に、はやては自信を持って答える。アリスもここまで言われれば、フェイトの無事を信じるしかなかった。元より、自分達よりも向こうの世界に精通している彼女たちがそこまで言うのなら、彼女たちの言葉を信じるしかない。

それで打ち切りになった話題を転換するように、アリスは魔導師である二人に聞いてみた。その次元世界出身者ならば誰もが知るという御伽噺の内容を。

「うーん……はやてちゃん、覚えてる？」

「まあ、あらずじ程度やけど」

屋上で弁当を突きながら、輪になって座る4人の少女たち。屋上を囲むように設置された金網に背を向けながら、はやてがそのあらずじを話し出した。

「古代ベルカで王となった少年が、偶然出会った少女の優しさに触れて、忘れていた人の温もりを思いだしていく……っていうのがその御伽噺の前半部分なんやけど、映像化されたら、基本、ここだけで終わるんよ、この御伽噺」

「……？ どうして後半には触れないのよ？」

「この御伽噺の後半部分は、それこそ王家の継承権争いとかで血生臭くなってくるんよ。それに最後の結末は、「蝶」によって幕引きにされるつつお決まりのパターンやし……」

正直、前半ほど面白くはないんやわ、と、はやては肩を竦める。
だが、アリサにはどうしても分からない単語があった。向こうの世界では常識なのだろうが、こっちの世界にいるアリサたちには意味が分からなかった。

「「蝶」？　なんでそこで蝶が出てくんのよ？」

「私に聞かれても……でも、ユーノ君やヴィータちゃんにも聞いたけど、「蝶」が何を示すのか、分からないって言っていたし……」

「シグナムもシャマルもザフィーラも知らんって言ってたしなあ……
…なして「蝶」なんやろか？」

うーん、と、悩む二人の様子から、魔法がある世界でも分かっているということが理解できた。アリサは何か納得ができなかったが、本当に知らなそうだったので、それ以上の追及は避けた。

代わりに、さすががその上品な淑女の声で意見を言う。

「何だか、地球でいうデウス・エクス・マキナみたいね」

「何よその、デウス・エクス・マキナって？」

「日本では機械仕掛けの神とかに訳されているけれど、簡単に言えば、神様のような存在が問題を全て解決して、物語に幕を引かせる手法のことよ。昔の劇ではそういう手法がよく取られていたみたい」
「何よ、そのご都合主義は？　そんなものがあっちの世界でも流行っているの？」

「あはは……」

なのはの乾いた笑い声に、アリサはふんツと鼻を鳴らした。そして質問の本題に戻るべく、再び話を転換させる。

「で？ その御伽噺とフェイトがどう関係あるのよ？」

「……ん、とな。その物語の終盤で、「蝶」がベル力を滅ぼすねん。それで、それを食い止めようとして、使用されたっていうのが……」

「成程、そのロストロギアだったってことね？」

「せや。まあ御伽噺に過ぎんから、どこまで本当かは分からんけど、発動すれば、少なくとも5個以上の世界が消滅するらしいで」

「しょ……！」

予想外に大きい被害に声が詰まるアリサだったが、はやては何てことはない様子で、言葉を続ける。

「せやけど、その御伽噺に登場する「蝶」は、それだけの威力を持つロストロギアでも止められへんかったって言うし……」「蝶」もまた、もしかしたら実在するのかな」

「……何だか、怖い話だよね」

「でも、実際にそのロストロギアは見つかったんでしょ？ だとしたら、やっぱり「蝶」も実在するんじゃない？……」

「それって、かなりヤバいんじゃないの？ どうなのよ、はやて？」「ヤバいも何も、今のミッドよりも進んだ魔法文明を持っていた古代ベル力を滅ぼしたとしたら、ミッドも例外なく滅ぶで？……ま、そういう話はユーノ君とかに任せて、こちらは手が届く犯罪を止めるだけや」

どこまでも樂觀的なはやての見解に毒気を抜かれた三人は、予鈴が鳴ったのに気付き、急いで屋上から教室へと向かっていった。

その廊下の途中で、はやてはなのはと念話で会話した。フェイトは本当に大丈夫なのかと、なのはの声は酷く不安げだった。

しかし、それははやても同じだった。友人としてもそうだが、彼

女が設立を目指す機動部隊にフェイトをスカウトしようとしていた
はやてにとって、フェイトの損失はあまりにも痛かった。

だが、それよりも不可解なことがあった。友人の手前、それを言
わなかったが、最近の管理局の動向は、何かキナ臭いものがあった。

それが何なのか、はやてには全く分からなかったが、しかし、不
安は募るばかりだった……。

幕間―3（後書き）

この作品のクロノは萌えキャラ。異論はありませんよね？　そして誰かクロノ×ユーノで事件を解決する小説を書いては下さないでしょうか？　（チラッ）

次回の更新予定日：明日

16・動き出した滅びの途（前書き）

ガンダム破壊作戦はトリニティの参加によって失敗に終わった。だが、それは終わりの始まりを告げるものだった。

御伽噺に過ぎないと思われていた「ナイトメア・ディメンション」が見つかったことで、管理局はそちらに掛かりきりとなった。その間に、CBは世界清浄の戦力を大幅に削っていた。

これから管理局は、世界清浄は、そしてCBは一体どうなるのだろうか………それを知るために、彼らは早い歩みを止めない。

【行動の理由が正義であろうと悪徳であろうと、最終的に国家が掲げる手段は「軍事力」であり、それは「暴力」だ。「暴力」の前では全てが「弱者」であり、「弱者」にとって「暴力」は「悪」にしか成りえない】

——ダイモン様から、ドワイト・デーヴィッド・アイゼンハワーより

16・動き出した滅びの途

——新暦71年——

世界清浄が管理局に勝っている点。それは、管理世界よりも多数存在する管理外世界の殆どに、組織が浸透していることだった。それにより、管理局の干渉し辛い管理外世界で暗躍する彼らは、表沙汰になっっている管理局の規模に勝るとも劣らず、その資金力や組織力も、他の組織と比べ、頭一つか二つ分ほど抜きん出ていた。

「珍しいな。教え子の中でも特に大人しかったモコ君から直接会いに来るとは……」

「……（会いに来れなくて、申し訳ございませんでした、教授）」

「いや、構わんよ。君があのか&W社の技術主任に就任したことは知っておったからな。それで、今日ここに訪問した理由は何だね？」

「……（はい。まず、教授も御存知かと思いますが……）」

「言つとくが、ビリーはここにはおらんぞ？」

「……！（だ、誰もビリーさんに会いに来たなんて……！）」

最も、オーバースの数や拠点の数など、管理局に劣る点は多々ある。それでも反時空管理局を叫ぶ人達にとつて、この世界清浄という組織は言わば管理局に対抗できる唯一の組織、そして正義の組織であるかのように見えていた。管理世界の人が時空管理局を正義の組織だと錯覚しているように。

「冗談じゃ。モコ君はこれについて、知りたいのじゃろう？」

「……（……はい。エイフマン教授。それを……ガンダムの情報を、私に教えてはくれませんか？）」

それもまた、世界の歪み……それを断ち切るための組織が、CBである。

「ふむ……ならば、モコ君の意見も聞こうか。モコ君がビリーや儂

と同じ意見を抱くかどうか……試させて貰うぞ？」

「……（構いません。それで新技術の情報を知れるなら、いくらでも試してください）」

そのために、彼らは量子演算処理システム『ヴェーダ』を用いて、世界中にハッキングを行い、その約48%を支配下に置いた。そして、その殆どが管理外世界であった。管理世界には無限書庫の存在があったので、ハッキングすることができなかった。しかし、今回のミッションについては、それでも十分だった。

「……（これは……やはり、この粒子がキーですね。これを生成する中央のコアと思しき物体を解析できれば、ガンダムの謎を解明できるのでは？）」

「さすがだな、モコ君。少し見ただけでガンダムの特徴を言い当ておったわ。やはり、ビリーと同じくらい、良い才能をもつとるのう」

「……（そ、そんな……ビリーさんと夫婦になるなんて……！）」

「その妄想癖も、変わつたらんのう」

それ以外にも、彼らは様々なエージェントを、それぞれの組織に配置させていた。世界清浄にはCBの監視者でもあるスポンサー、アレハンドロ・コーナーを配置させていた。彼から上がってくる情報も処理しつつ、ヴェーダはある作戦を決行することに決めた。

それは、ガンダムの謎に近づきつつある二人の科学者を抹殺する作戦であり、そのためにヴェーダは、その二人のいる施設を完全にハッキングし、その実権を握った。マシンパワーに物を言わせたハッキングは、エイフマンにもモコにも気付かれることなく完了する。「それで、他に気付いたことはあるかね？」

「……（そうですね……言えるのは、このコアを造った人物が天才であること、それに、これを造るには高重力の環境が必要だということでしょうか？）」

「その根拠は？」

「……（コアの構造上、どうやっても1G下では造れない箇所が何か所か見受けられます。それに、これを造るには膨大な時間が……」

数十年単位の時間が必要かと……)」

そして、その基地に迫る脅威に、彼らはまだ……気付いていない。「そうじゃ。そして、僕は調べた。過去数十年間で、高重力惑星と関係のある科学者を。数は膨大じゃったが、成果はあった。わしは過去に発表された論文の中から、この半永久機関ともいえるコアを造れる科学者を探し当てた」

「……（それは、一体誰なのですか？）」

「その科学者の名は、イオリア・シュヘンベルグ。200年前の時代に、「才悪」、つまりは「天才」と「最悪」を合わせ持つとされた、人嫌いのマッドサイエンティ……何じゃ!？」

突然、エイフマン教授とモコが見ていた画面が変化した。「You have witnessed too much……」という文字が、画面に現れる。それと警報が鳴ったのは、ほぼ同時であった。

「ま、まさか……CB!？」

「……!？（そ、そんな……どうしてここに!？）」

困惑する二人を他所に、銃声や怒声が彼らの耳にも聞こえてきた。その言葉の端にあった「ガンダム」という言葉に、彼ら二人は肩を震わせるしかなかった……。

『ネーナ、メガランチャーで決めるぞ!』

『了解!』

警報が五月蠅く鳴り響く基地の上空に、ガンダムスローネアイン、ツヴァイ、ドライの三機は浮遊していた。地上から放たれる機関銃や魔力弾はガンダムの頑強な装甲に音を立てて着弾するも、傷の一つもつけることさえできなかった。

『ドッキング完了したよ、ヨハ兄^{にい}！』

『よし、チャージ完了！ メガランチャー、掃射！』

ドライの右手にあるハンドガンが、アインの右肩から伸びるランチャーとドッキングする。ドライのあまりある疑似GN粒子が、ランチャーに充填されていく。折り畳んでいた砲身を伸ばしたランチャーにGNビームライフルも接続させたアインは、それを眼下の基地に向けると、何の躊躇もなく、そのトリガーを引いた。

メガランチャーから放たれた極大の光線は、基地を舐めまわすように動き、司令塔や艦船ドッグ、それにエイフマン教授やモコがいた研究棟を完膚無きまでに破壊した。断末魔も悲鳴も上がらない圧倒的な破壊。それを成し遂げたのを確認し、アインはすぐさま帰投しようと、機体を振り向かせた。

『接近する機体あり。照合の結果、グラハム・エーカー率いるオーバーフラッグス隊かと思われます』

『来たか！ できれば、来る前に撤退を終わらせたかったが……』

その正面から迫る、編隊を組むオーバーフラッグス隊を前に、ヨハンが悪態を吐かずにはいらなかった。負けはしないだろうが、何しろ相手には世界清浄最強のエースがいるのだ。損傷なしで切り抜けられるとは到底思えなかった。

『そ、そんな……基地が、仲間が！？』

『おのれ、おのれガンダムウー！』

『許さん！ 許さんぞ、悪鬼共！』

トリニティと相対するオーバーフラッグス隊は、そのメンバーの誰もが、目の前の惨状を前にして、逆に戦意を高めていた。そして当然、彼もまた戦意を、殺意を極限まで高めていた。

「さすがの私も、今回ばかりは堪忍袋の緒が切れた！ ゆくぞ、オーバーフラッグス隊！ トップエリートのを、奴らに見せつけてやれ！！」

「了解！！」

手に持つ特製のリニアライフルで、前に出ていた橙色のガンダム

を攻撃するフラッグス隊。しかし、ガンダムの装甲は固く、簡単に弾を弾かれてしまう。

『ここはオレに暴れさせてくれよ、兄貴！ 兄貴ばかり暴れちゃって、オレは暴れ足りないんだからさー！』

『相手はオーバーSだ。三機で取りかかるぞ、ミハエル、ネーナ』

『ちえ、まあ兄貴の命令には従うさ』

『了解！ ふふふふ……ここ最近の激務の鬱憤^{うつぶん}を晴らさせてもらうわよ！』

厳しい訓練で培ったチームワークと、3兄妹のコンビネーション。どちらも見事としか言えない連携を取りながら、相手を執拗に攻め立てる。それが10分か、20分か続いた頃。フラッグス隊の一人が、ついにガンダムに捉えられた。

「た、隊長ーッ!?」

断末の叫びを残し、ツヴァイのバスターソードに身体を真っ二つにされるオーバーフラッグ。それを皮切りにし、オーバーフラッグがさらに一機、二機と落ちていく。

『よええー！ よええぜ、アンタらは！』

「……うおおおおおッ!!」

「よせ、ハワード！ 迂闊に近づくな！」

じりじりと消耗していくフラッグス隊に対し、ガンダムは全くと言っていいほど疲労の色を見せていない。それがプレッシャーとなり、屈辱にもなって……誇りあるフラッグファイターであるハワード・メイスンに、突撃という選択肢を取らせた。

『行けよ、ファンゲ！』

呐喊^{とっかん}するハワードのオーバーフラッグに、ツヴァイは両腰からファンゲを射出した。8基のファンゲは円を描きながらオーバーフラッグに迫り、ツヴァイと切り結んだタイミングを狙って、ハワードのオーバーフラッグの身体に次々と突き刺さっていった。

「ハワードオオオ!!」

「ハワード・メイスン！」

「た、隊長……フラッグを……！」

それがハワードの最期の言葉になって、オーバーフラッグが爆散した。その先でデュアルアイを光らすツヴァイを見て、グラハムは溜まりに溜まった激情を爆発させた。

「……ハワード、仇は取る！ このフラッグでな！！」

頬のセンサー素子を輝かせ、グラハムのカスタムフラッグが両手にプラズマソードを握った。プラズマソードの青白い光に対抗するべく、グラハムと相対していたアインも、その右手に赤いビームサーベルを握る。

「今日の私は……」

カスタムフラッグのセンサー素子が、再び光る。カスタムフラッグが身体を前傾にしたまま、アインめがけ突進を始めた。それを迎え撃とうと、アインもビームサーベルを振り上げる。

「阿修羅をも超える存在だッ！！」

交叉するプラズマソードに、振り落とされるビームサーベル。衝突した際に発生した閃光が、互いの目を白く焼く。筋肉が爆ぜそうになるほど両腕に力を込めたカスタムフラッグは、アインの片手を上に弾き飛ばして、その手からビームサーベルを離させた。

そのビームサーベルを飛ぶようにしてキャッチし、擦れ違い様にアインへ斬撃を放つ。グラハムの執念がこもった一撃はアインの片腕を切り落とし、ヨハンを狼狽させた。

「ば、馬鹿な！？ ただの人間が、ガンダムの出力に勝るなど……」

「！」

「くっ……ごは、がはッ！ 軟弱な身体め！」

だが、その代償は大きかった。一瞬とはいえ、ガンダムの膂力を超越したのだ。グラハムの内蔵は無理をし過ぎたせいでボロボロになり、両腕の筋組織は酷使のあまり、血に塗れていた。

「……ミハエル、ネーナ。任務は終了した。粒子残量も残り少ない中、ここで戦闘をするのはあまり意味を成さない。撤退するぞ！」

「ええ〜？ 何だよ兄貴。確かに30%を切っているけど、まだま

だ暴れられるぜ?」

『でも、ヨハ兄がそういうなら撤退しようよ、ミハ兄! ステルスフィールド、展開するよ!』

アインの命令に不満を言うミハエル。ネーナはヨハンの言葉に従って、撤退する為にステルスフィールドを展開する。ドライの右肩からミサイルが、アインのビームライフルからスモークデイスチャージャーが発射され、オーバーフラッグス隊を牽制する。追おうとしたグラハムたちだが、身体に負った創傷は深く、追撃することができなかった。

「ガンダム……貴様たちは必ず、フラッグで倒してみせる!」

すでに肉眼では見えなくなったガンダムに、グラハムは一つの誓約を自らに架した。そして、オーバーフラッグス隊はこの基地壊滅の失態により解散、後に新設される対ガンダム隊に隊員たちは再配属となるが、グラハムだけはその部隊に配属されることを拒否した。

「……ビリー。済まない、私の我儘で、親友の君を困らせてしまった」

「いや、いいさ。それに僕も、エイフマン教授とモコさんの仇を取りたいからね」

薄暗い部屋の中で、モニターの光だけがぼんやりと辺りを照らしていた。光は青い軍服を着たグラハムと白衣を着たビリー・カタギリの姿を照らし、その表情にある陰りかげをより色濃く映し出している。「君には悪いけど、カスタムフラッグは現時点で最高のM・Sだ。これを改造するのは、とてもじゃないけど不可能だ。一から設計し直さない限りね」

「一から設計し直した場合、どれだけの時間がかかる?」

「どんなに早くても数ヶ月……と言いたい所だけど、カスタムフラッグの性能を超える物を作り出すなら、多分数年はかかるね」

「数年……か」

予想以上の年数を言われ、沈黙してしまうグラハム。ビリーは彼を氣遣うようにして、

「C Bの技術を手でできればいいんだけど、それはできなかったからね……とりあえず、今から設計に入っておくよ」

「頼む」

と言った。グラハムはその氣遣いに短く礼を言いながら、手に持つ情報端末を操作し、ある報告を速読した。その報告には四大幹部の一人であった『マギ』Prf・エイフマンの後釜に、スポンサーであったアレハンドロ・コーナーが就任するという旨が書かれていた。その他にも、世界清浄とC&W社の癒着疑惑に管理局が捜査を入れたことや、他にも、襲撃された基地についての情報も書かれていた。

「……」

無言で目を瞑る^{つぶ}グラハム。彼には何故か、これら一連の動きが全て、世界清浄の破滅に繋がっているように思えた……。

16・動き出した滅びの途（後書き）

グラハムはこれで一旦休憩です。次に出てくるのは5・に入ってからです。そろそろ作者が本気を出してフルボッコタイムに突入するので、そういうのが嫌な方はこの辺でターンを！

次回の更新予定日：未来日記

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2256p/>

世界に革新を齎すモノノスピンオフ ～四年前の悪夢～

2011年11月14日22時07分発行